秋田県文化財調査報告書　第95集

桐木田遺跡発掘調査報告書

秋田県埋蔵文化財センター

1982・3

秋田県教育委員会

序

桐木田遺跡は遺跡の中央にある井戸跡が、雄勝町小野に伝わる「小野小町」伝承の舞台の１つであることから、地元郷土史家等の関心をひいていた遺跡であります。これが昭和55年度、県営ほ場整備事業計画に入ることから、当教育委員会では昭和54年秋、範囲確認調査を実施しました。その結果遺跡の面積も広く、諸搬の事情から、発掘調査は55・56年の２ケ年にわたって行われることとなり、55年度には遺跡の東側、56年度には西側を発掘調査しました。

調査の結果、中世末から江戸時代初めと思われる各種の陶磁器類と共に、堀跡、掘立柱建物跡・方形の土壙など多くの遺構が発見され、それをまとめたのが本報告書です。

本遺跡は遺構などから見て中世の土豪の館跡、及び集落跡と考えられるものです。このような例は県内でも数少ないものであり、文献史料の少ない当県の中世から近世初頭にかけての研究等には貴重な資料になるものと思われます。

最後に発掘調査から整理、報告書刊行にいたるまで御協力いただいた地元の土地所有者、土地改良区、雄勝農林事務所、雄勝町教育委員会に対して心から感謝の意を表します。

昭和57年３月

秋田県教育委員会

教育長　畠山芳郎

例　言

1．この報告書は、秋田県雄勝郡雄勝町小野字飯塚に所在する桐木田遺跡の昭和55・56年度発掘調査結果をまとめたものである。

2．今回の桐木田遺跡発掘調査に関する諸発表や、秋田県文化財調査報告書第80集と、本報告書との記述に相違がある場合は、本報告書の記述を正確なものとする。

3．報告書の執筆編集は大野憲司が行った。

4．挿図については三嶋隆儀が主体となって作成した。

挿図の縮尺は原則として、遺構については掘立柱建物跡・柱穴群は1/80その他は1/40に、遺物は一部を除いて1/2に縮尺して掲載した。遺物の写真は、図版45（1/3）を除いて約1/2の大きさである。

5．出土遺物のうち、陶磁器に関しては通し番号を付し、挿図中の番号と図版中の番号を同一のものにした。

6．使用した写真は大野が撮影し、鈴木功(埋蔵文化財センター補佐員)が引伸しを行った。

7．挿図遺構中のスクリーントーンの部分は、焼土あるいは灰の分布を示す。

8．中世陶磁器については武田孝義氏（能代市在住）、石製品の材質については嵯峨二郎氏（秋田県立博物館学芸主事）に鑑定していただいた。記して感謝したい。

9．土色の表記については、小山正忠・竹原秀雄『新版標準土色帳』（日本色彩研究所）を活用した。

10．末尾に発見遺構配置図を付した。各遺構の記述を読む際、これを見開きにして利用されたい。

目　次

序
例言
第１章　はじめに……1
　第１節　調査に至るまで……1
　第２節　調査の組織と構成……1
第２章　遺跡の立地と環境……3
　第１節　立地と環境……3
　第２節　歴史的環境……3
　第３節　周辺遺跡……5
第３章　発掘調査の概要……6
　第１節　遺跡の概要……6
　第２節　調査の方法……6
　第３節　調査経過……7
第４章　調査の記録……12
　第１節　中世後半～近世初期の遺構と遺物……12
　　1　発見遺構……12
　　2　遺構内出土陶磁器……37
　　3　その他の遺構外出土陶磁器……39
　　4　出土石製品……59
　第２節　縄文時代の遺物……65
　　1）　土器……65
　　2）　石器……65
第５章　まとめ……69

挿図目次

第1図　遺跡の位置……4
第2図　グリッド配置図……7
第3図　発見遺構全体図……9・10
第4図　SD16・140　堀跡断面図……13
第5図　SD300・301　堀跡……14
第6図　SX24・150　土橋……15
第7図　SD15A・B・134　溝跡断面図……17
第8図　SB100・302・309・310　掘立柱建物跡……19
第9図　東部柱穴群……21
第10図　西部柱穴群（I）……22
第11図　西部柱穴群（II）……23
第12図　SI 20・108・203・204・205　竪穴住居跡……26
第13図　SI 10・11　竪穴住居跡……27
第14図　SI 117・236　竪穴住居跡　SK209・235　土壙……28
第15図　SK12・124・136・137　土壙……29
第16図　SK116・211・223・224・225・226・242　土壙……30
第17図　SK155・156・157・158・231　土壙……31
第18図　SK23・154・210・230・235　土壙……32
第19図　SK148・149・227・228・229・233　土壙……33
第20図　SK01・02・146・231・232　土壙……34
第21図　SK09・127　土壙……35
第22図　SX03・06・13　集石遺構……36
第23図　遺構内出土陶磁器　（1）……40
第24図　遺構内出土陶磁器　（2）……41
第25図　遺構内出土陶磁器　（3）……42
第26図　遺構内出土陶磁器　（4）……43
第27図　遺構内出土陶磁器　（5）……44
第28図　遺構内出土陶磁器　（6）……45
第29図　遺構内出土陶磁器　（7）……46

第30図　遺構内出土陶磁器　（８）……47
第31図　遺構内出土陶磁器　（９）……48
第32図　その他の出土陶磁器　（１）……50
第33図　その他の出土陶磁器　（２）……51
第34図　その他の出土陶磁器　（４）……52
第35図　その他の出土陶磁器　（３）……53
第36図　その他の出土陶磁器　（５）……54
第37図　その他の出土陶磁器　（６）……55
第38図　その他の出土陶磁器　（７）……56
第39図　その他の出土陶磁器　（８）……57
第40図　その他の出土陶磁器　（９）……58
第41図　石製品　（硯・砥石）……60
第42図　石製品　（円盤状石製品）……61
第43図　石製品　（砥石）……62
第44図　石製品　（砥石）……63
第45図　石製品　（砥石）……64
第46図　縄文土器……66
第47図　縄文時代の石器……67
第48図　縄文時代の石器……68

図版目次

図版１　上　遺跡遠景（東▶）　　下　同上
図版２　上　Ｉ区全景（南▶）　　下　ＳＤ16堀跡南辺（東▶）
図版３　上　ＳＤ16東辺（南▶）　　下　ＳＤ140堀跡西辺（南▶）
図版４　上　ＳＤ16堀跡東辺（北▶）　　下　ＳＤ300・301堀跡（南▶）
図版５　上　ＳＤ16掘跡断面（南辺）　中　ＳＤ16堀跡断面（東辺）
　　下　ＳＤ16堀跡断面（北辺）
図版６　上　ＳＤ140堀跡断面（西辺）　中　ＳＤ140堀跡断面（南辺）下　ＳＤ300堀跡断面
図版７　上　ＳＤ15Ａ・Ｂ溝跡（西▶）　下左　ＳＤ15Ａ・Ｂ溝跡（東▶）
　　下右　ＳＤ15Ａ・Ｂ溝跡（東▶）
図版８　上　ＳＸ24土橋（東▶）　　下　ＳＸ150土橋（東▶）

図版９　上　Ｉ区：中心部（南▶）　下　東部柱穴群（東▶）
図版10　上　西部柱穴群Ｉ（西▶）　下　西部柱穴群（南▶）
図版11　上　ＳＢ100掘立柱建物跡（南▶）　下　ＳＢ100掘立柱建物跡穴ＳＫ137(南▶)
図版12　上　ＳＢ153掘立柱建物跡（西▶）　下　ＳＢ303掘立柱建物跡（西▶）
図版13　上　ＳＢ310掘立柱建物跡（南▶）　下　ＳＩ20竪穴住居跡（北▶）
図版14　上　ＳＩ203・204・205竪穴柱居跡(南▶）下左 同上断面貼床状況 下右 遺物出土状況
図版15　上　ＳＩ203・204竪穴住居跡　下　ＳＩ203・204・205竪穴住居跡（北▶）
図版16　上　ＳＩ108竪穴住居跡（西▶）　下　同上（西▶）
図版17　上　ＳＩ10竪穴住居跡（西▶）　下　ＳＩ11竪穴住居跡（東▶）
図版18　上　ＳＩ117竪穴住居跡（西▶）　下　ＳＩ236・ＳＫ209・235・210（北▶）
図版19　上　ＳＩ117竪穴住居跡（南▶）　下　ＳＫ12方形竪穴状遺溝（南▶）
図版20　上　ＳＫ137方形竪穴状遺構中ＳＫ155・156断面下ＳＫ328・329方形竪穴状遺構(南▶)
図版21　上　ＳＫ211・242・225など(西▶）下　ＳＫ216・217・218・219など（南西▶）
図版22　上　ＳＫ227・228・229・230（西▶）　下左　ＳＫ147長方形竪穴状遺構（西▶）
下右　ＳＫ208（西▶）
図版23　上　ＳＫ09土壙（北▶）　下　ＳＸ03・06集石遺構（東▶）
図版24　上　ＳＸ03集石遺構（西▶）　下　同上（西▶）
図版25　上　ＳＸ03西面　中　ＳＸ03北面　下　ＳＸ03東面
図版26　上　ＳＸ06集石遺構（西▶）　下　ＳＸ13集石遺構（西▶）
図版27　上　明治初期の地籍図　中　遺物出土状況　下　同上
図版28　遺構内出土陶磁器　（１）　図版29　遺構内出土陶磁器　（２）
図版30　遺構内出土陶磁器　（３）　図版31　遺構内出土陶磁器　（４）
図版32　遺構内出土陶磁器　（５）　図版33　遺構内出土陶磁器　（６）
図版34　遺構内出土陶磁器　（７）　図版35　遺構内出土陶磁器　（８）
図版36　遺構内出土陶磁器　（９）　図版37　その他の出土陶磁器　（１）
図版38　その他の出土陶磁器（２）　図版39　その他の出土陶磁器　（３）
図版40　その他の出土陶磁器（４）　図版41　その他の出土陶磁器　（５）
図版42　その他の出土陶磁器（６）　図版43　その他の出土陶磁器　（７）
図版44　その他の出土陶磁器（８）　図版45　その他の出土陶磁器　（９）
図版46　石製品（硯・砥石）　図版47　石製品（砥石・円盤状石製品）
図版48　縄文土器　図版49　縄文時代の石器

第1章　はじめに

第1節　調査に至るまで

雄勝郡雄勝町に所在する、いわゆる「桐木田井戸」は平安時代の歌人小野小町の使用した井戸跡と、古くから言い伝えられていた。昭和47年の山本博士の井戸跡鑑定でも、平安時代から見られる型式のものであるとされ、井戸跡の周囲に古代等の遺構の存在が予想されていた。しかし、この地域が昭和53年度より実施されている県営ほ場整備事業地域内にはいるため、秋田県教育委員会では昭和54年10月22日～11月１日、遺跡の性格、及び範囲を確認する調査を行った。その結果、堀跡、柱穴などの遺構、中世末～江戸期に属する陶器、染付などの遺物が発見された。

遺跡周辺の水田は小さく入り組んでおり、周囲の用排水路との関連からも、遺跡全面に対するほ場整備事業は不可欠のものであった。このため、秋田県教育委員会では、工事に先立ち発掘調査を実施し、記録保存をはかり、今後の資料に資するものとした。

なお、発掘調査は、工事主体側との協議で遺跡の推定面積約 8,000㎡に対して55、56年の２ケ年にわたって行い、55年度は、Ⅰ区 2,900㎡だけとするという計画であったが、その後の状況の変化に伴い、Ⅱ区の一部（1,600㎡）も加え 4,500㎡となった。そして、水路部分を除く、Ⅱ区の残り 2,600㎡を56年度に発掘調査した。

第2節　調査の組織と構成

遺跡名	桐木田遺跡
遺跡所在地	秋田県雄勝郡雄勝町小野字飯塚
調査期間	昭和55年度　７月28日～10月31日
	昭和56年度　４月13日～５月13日
調査対象面積	昭和55年度　4,500㎡
	昭和56年度　2,600㎡
調査面積	昭和55年度　4,500㎡
	昭和56年度　2,600㎡
調査主体	秋田県教育委員会
調査担当者	大野憲司（秋田県教育庁文化課）

調査員　山田貞吉（55年度、平鹿町教育委員会）

調査補佐員　昭和55年度　佐藤和弘

昭和56年度　三嶋隆儀、栗沢光男、池田洋一

調査補助員　昭和55年度　三嶋隆儀、桑原隆

事務補助員　昭和55年度　佐々木恭子

昭和56年度　門脇澄子

調査協力機関　秋田県雄勝農林事務所土地改良課

雄勝町教育委員会

発掘調査参加者　昭和55年度

小野田久孝、藤原和則、今幸太郎、太田三郎、今修三、梁瀬善清、今貞助梁瀬清一、渡辺良市、今勝蔵、多田野庄蔵、竹内源次郎、柴田勝美、柴田進、樋口隆、小野田良子、小野田静子、佐々木葉子、藤原アチ、藤原ミネ子、藤原ミエ、藤原ミヤ、藤原雪子、小野垣キエ子、梁瀬シズエ、小野垣リエ、小野垣トキ、渡辺イヨ、金ユウ子、菅原さだ子、高橋サツ、東海林ミサ、金子恵美。

昭和56年度

小野田久孝、太田三郎、梁瀬清一、柴田勝美、小島晴人、姉崎義一、小野田良子、小野田静子、藤原雪子、小野垣キエ、藤原アチ、渡辺友子、多田野優美子、梁瀬瑤子、今ナミ子、太田登美子、井川哲、太田ヨシ子、今チヨ子。

整理作業参加者　杉原敬子、佐藤真智子、石上尚子、松本淳子、松本千秋、小林弘、進藤滋茂木淳子、高橋紀美、越後谷晴美、武田美智子、藤井智子、池田リュウ子佐藤せい子、高山比奈子、小松睦子。

第2章　遺跡の立地と環境

第1節　立地と環境(第1図)

横手盆地の最南端は、雄物川の開析によってできた、東西1.5～2.0km、南北約10kmの細長い平地となっている。この平地の東と西には、それぞれ奥羽山脈、出羽丘陵の300～800ｍの山地がせまり、その西裾を雄物川が北流し、東裾はかっての役内川の跡と言われる低地が走る。

桐木田遺跡は平地中央部に雄物川と役内川にはさまれてできた自然提防上に立地する。現況は水田と一部畑地で、雄物川からは東１km、国鉄奥羽本線横堀駅の北東1.1kmの地点である。

第2節　歴史的環境

遺跡の所在する小野地区は、平安朝六歌仙の一人小野小町生誕の地の１つといわれ、これにまつわる多くの伝説が残っている。遺跡名ともなった桐木田井戸跡もその１つで、小町の庵の側にあり、小町が日常使用したものであるといわれ、地元有志により保存されている。そして昭和47年には井戸の研究者として知られる山本博氏に井戸の鑑定を依頼し、以下のような結果を得ている。（「雄勝町の歴史散歩」より）。

井戸構造年代鑑定書

１．秋田県雄勝郡雄勝町小野所在、石井年代について、その創掘を次の通り鑑定する。

イ．自然石（凝灰岩）、乱石積、円形井筒

ロ．口径50～55cm

ハ．口縁部より水面まで1.6ｍ

ニ．総深3.9ｍ

ホ．口縁部より約30～40cm下において、直径を増し、径70～80cmとなり、そのままで底部にいたる。

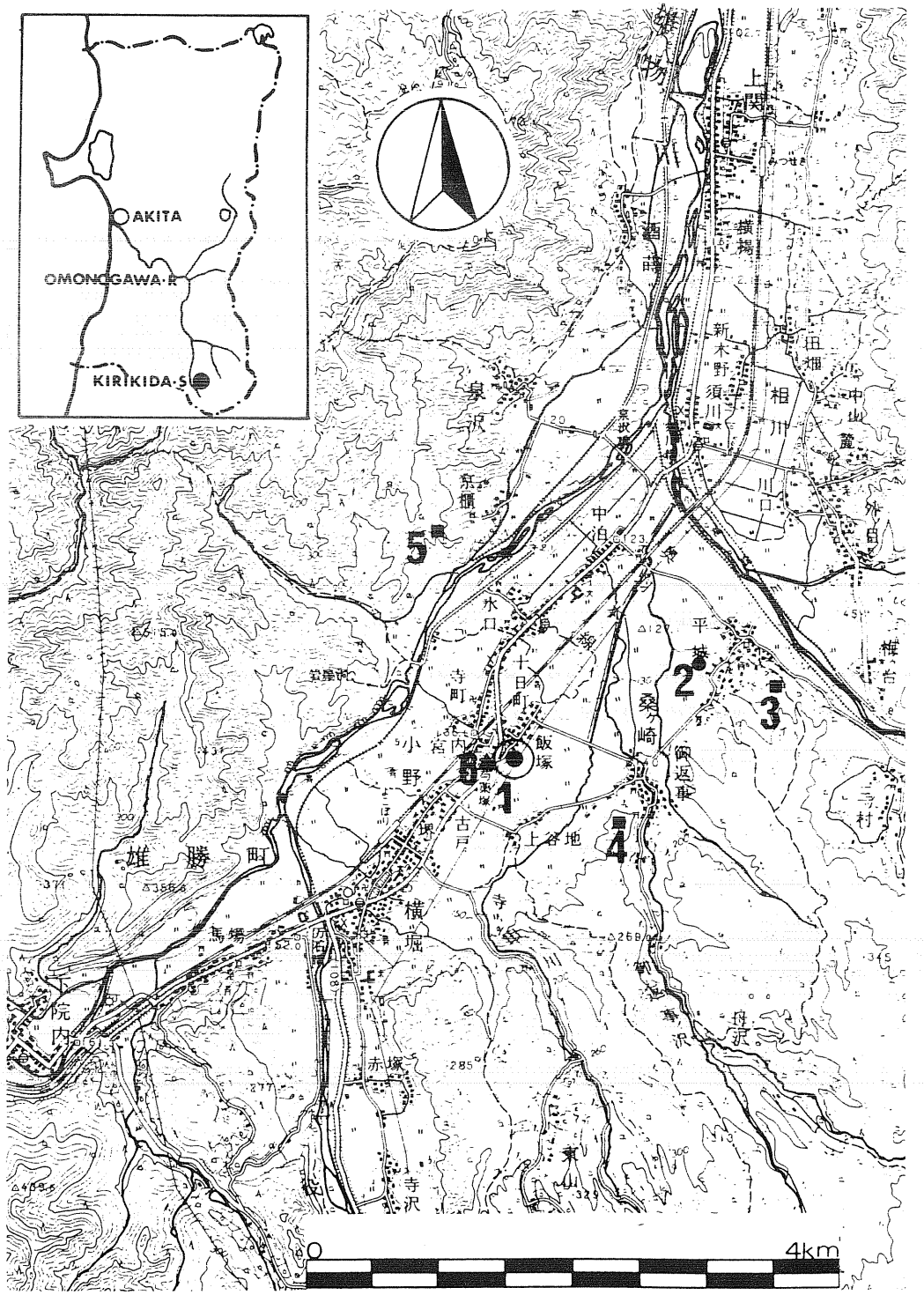
ヘ．井壁の石積みは創掘当時のままと認める。

２．右の井筒構造は平安初期より現われたもので、小野の石積み井筒もその一つに当るものであると認める。

右の通り鑑定する。

昭和47年８月28日

大阪学院大学教授


AKITA
OMONOGAWA·R
KIRIKIDA·S
上関
横揚
新木野
須川
相川
泉沢
京橋
中泊
水口
寺町
十日町
飯塚
小野
古戸
上谷地
桑崎
平城
御返事
雄勝町
横堀
馬場
下院内
赤塚
寺沢
丹沢
1
2
3
4
5
0
4km

第１図　遺跡の位置

文学博士　山本　博

秋田県雄勝郡雄勝町小野遺跡　　保存会　御中

第3節　周辺遺跡

本遺跡の周辺に存在する遺跡のうち、中世に属すると思われるものは比較的多い。半径2kmの以内の城館では山城である小野城跡（1図5）、御返事城跡（1図4）、館跡（1図3）の他平城である鵜沼城跡（1図2）があり、役内川下流から奥羽山脈西麓沿いには多くの板碑群が存在する。

縄文時代の遺跡では、1図6の小野II遺跡があり、縄文時代前期の遺物が採集されている。

しかし、近世に入ると調査例もほとんどなく、わずかに鵜沼城跡において、江戸時代前半のものと思われる掘立柱建物跡群や、井戸跡などが知られているにすぎない。

第３章　発掘調査の概要

第１節　遺跡の概観

明治時代初期の地籍図（図版27）を見ると、井戸跡の東方約50ｍに、長さ約50～60ｍで西に開くコの字形の堀跡らしきものがあるのがわかる。この堀跡はそのまま西に延びて遺跡全体を長方形に囲むようにも見えるが、中央部を南北に走る水路などによりかき消されている。遺跡はこの地籍図が作成された段階で概に水田であり、現在は水田と一部畑地となっている。

遺跡全体での高低差はほとんどないが、南西側がわずかに高く、中心部の標高は約 136ｍを測る。

遺跡の層序は、第１層黒褐色耕作土（15～20cm）、第２層黒褐色土（10～15cm）、第３層暗褐色土（10～20cm）、第４層褐色地山土となる。このうち、遺物は２、３層中にあり、遺構の明確なプランは、地山直上でわかる。

遺物は総じて少なく、主に各遺構の覆土中から発見されることが多い。
これは後世の耕作等によるためと思われる。

遺構の分布は大きく見て２つに分けられる。１つは一辺50～60ｍの略方形の堀に囲まれたその中央部にある柱穴群、他の１つはこの堀が埋まった後のものと考えられる柱穴群で、これは堀の西辺を中心とする地域のものである。この２つの他に方形、長方形の竪穴群があるが、これらが堀の存在した時期とどのように係わるのかは明確にし得なかった。

第２節　調査の方法

発掘にあたり、４ｍ×４ｍグリッドによる調査方法をとることとし、座標軸にあたる東西の基線は２桁の数字、南北の基線はアルファベット２文字の組み合わせを用いた。すなわち、東西の場合、西に４ｍ行くごとに数字が１つずつ増す。（……38、39、40、41……）。南北の場合は南から北に４ｍ行くごとにアルファベット２文字のうち１桁目の文字がＡ～Ｈまで変わり、（……ＭＡ、ＭＢ、ＭＣ、ＭＧ、ＭＨ、……）、32ｍ行くと２桁目の文字が変わる（……ＭＧ、ＭＨ、ＮＡ、ＮＢ、……ＮＨ、ＯＡ……）。

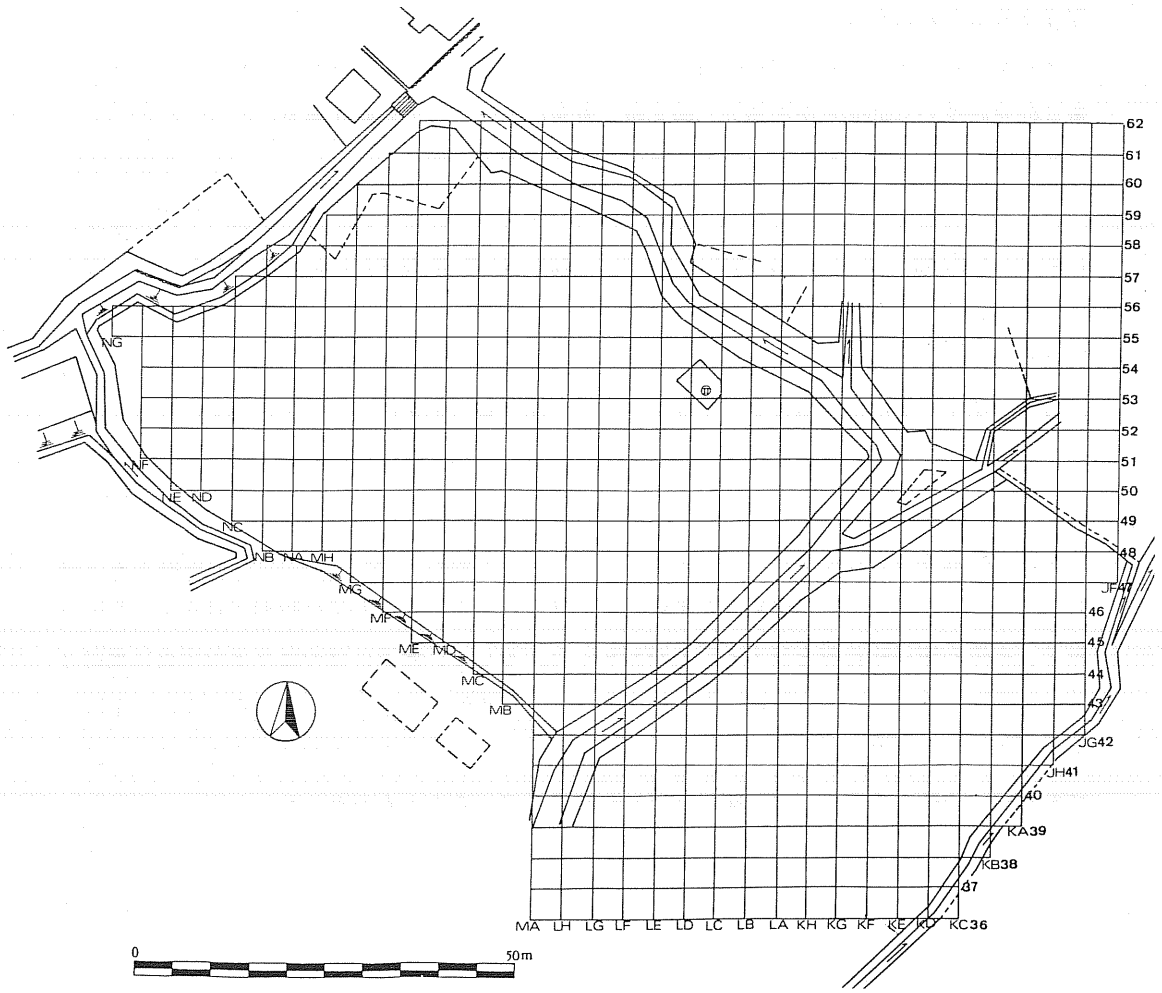
Ｉ区ほぼ中央部に任意の基準杭を打ち、これをＭＡ50とし、東西、南北の基線はこの点で磁北を求め、これに従った。それぞれのグリッドの名称は４ｍ×４ｍグリッドの南東隅の交点座標名をそのまま使用した（ＭＢ51、ＬＧ45……）。（第２図）

第３節　調査経過

調査区は南東－北西に長い略長方形を呈し、この中央東寄りを幅約３ｍの水路が流れており、調査年次等の関係からもこの水路の東側をＩ区、西側をII区として調査を行った。また、発掘調査は第１章第１節で述べたようなことで、２ヶ年にわたるものとなった。

Ｉ区の発掘調査は、昭和55年７月28日から９月22日まで実施した。

調査区はあらかじめ重機で表土を除去していたが、柱穴等の遺構が明確でないため、結局は地山直上まで全面を掘り下げることにした。７月30日、調査区中央部で方 3.5ｍ前後の竪穴状落ち込み、また東部で幅４ｍの堀を検出、堀（ＳＤ16）はほぼ直線で、北北東－南南西の方向



第２図　グリッド配置図

で続いている。８月１日、調査区北部でＳＫ01、02の土壙を検出。これらの土壙は、不定円形～楕円形を呈し、埋土中に挙大～半人頭大の河原石を多く含んでいたが、それほどまとまりのないものであった。２日からＳＸ03、06、ＳＫ07～09等の遺構を検出。ＳＸ03、06は集石遺構であった。４日ごろから調査区西部を中心にして径30cm前後の柱穴が現われ始めたが、これらは切り合いが激しい上に、東側ほどプランの確認が困難な状況にあった。

８月８日までに、ＳＤ16の北辺及び東辺を検出。ＳＤ16は北東部で直角に曲がっており、東辺は50ｍ以上続くことがわかった。また、調査区南部では、幅約２ｍの溝（ＳＤ15）がＳＤ16の東辺に直交するようにあり、ＳＤ16の手前約８ｍで北に直角に折れ曲っていることも判明した。このＳＤ15は断面の精査等で新旧２時期あることもわかった。19日からＳＤ15、16や柱穴土壙等の覆土除去作業を開始。その結果、ＳＤ16東辺のほぼ中央部に上面幅約 3.5ｍの土橋が存在することがわかった。

８月29日から残っている調査区南側の表土剥ぎ及び遺構の検出を行ない、ＳＤ16が、調査区東北隅屈折部から約60ｍ南南西で、西北西に直角に曲がることを確かめた。

９月に入り、柱穴の掘り上げ、堀、溝等の断面の実測、写真撮影を行なったが、作業の途中で、雄勝農林事務所から、９月いっぱいの調査を10月まで伸ばし、水路の西側（II区）をも、1,600㎡ほど調査してほしい旨の依頼があり、協議の結果､原因者負担分のみでこれを行うことになった。このため、９月10日からはII区の遺構検出も併行して行うこととし、Ｉ区の実測と写真撮影を完全に終了したのは９月20日であった。

II区も第１、２層は重機によって除去したが、第３層の暗褐色土には予想以上に鉄分が含まれており、これがため遺構の検出ははかどらず、結局、第４層地山直上まで全面を表わすこととした。

Ｉ区の精査等と併行しながら10月１日までにII区の東側約1,600㎡について地山直上まで表わした。その結果、Ｉ区で発見した堀跡（ＳＤ16）は全体の形としては矩形ではなく、北辺が長く、南辺が短い略台形を呈することがわかった。そして、西辺にはやはりその中央に東辺と同じ土橋があるが、これは東辺のそれとは異なり、やや外側に張り出している。また、Ｉ区の堀の内側にある溝跡（ＳＤ15）はII区にも続いており、やはり堀の内側で、北辺までには達しておらず、全体としては、北に開くコの字形を呈していることもわかった。

柱穴はII区の東端でＩ区の柱穴群に連続すると思われるようなものも発見されたが、これとはやや間をおいて、堀の西辺あたりを中心とするような柱穴群が発見された。これらの柱穴群は精査すればする程その数を増し、切り合いも激しく、その後の現場作業を大いに繁雑なものにせしめた。

このようにしながらも、ＳＢ100、ＳＢ302、ＳＢ303、等の建物跡を確認しつつ、堀跡の断面

LH60
LE58
LB55
KG53
MC61
MF61
MH59
NC57
NE56
NG56
NH54
NG52
NE50
NB48
MG46
MD44
MA42
LG41
LD44
LA47
KE51
KF49
KB51
JG49
JE48
JF46
JG44
KA40
KC38
KD36
LE40
LC38
LA36
KG34
SD 140
SD 141
SD 142
SD 300
SD 301
SD 16
SD 15
SD 17
SD 18
SD 111
SK 245
SK 243
SK 209
SK 232
SK 231
SK 227
SK 228
SK 229
SK 230
SK 329
SK 328
SK 233
SK 211
SK 242
SK 157
SK 156
SK 154
SK 150
SK 137
SK 136
SK 149
SK 146
SK 144
SK 143
SK 148
SK 118
SK 322
SK 116
SK 101
SK 112
SK 114
SK 139
SK 147
SK 110
SK 108
SK 326
SK 325
SK 324
SK 321
SK 320
SK 327
SK 124
SK 127
SK 128
SK 135
SK 134
SK 12
SK 23
SK 24
SK 13
SK 09
SK 02
SK 01
SK 03
SK 06
SI 20
SI 11
SI 10
SI 108
SA 314
SA 315
SA 313
SB 311
SB 310
SB 302
SB 303
SB 304
SB 309
SB 100
0
16m

第3図　発見遺構全体図

図、各遺構の平面図などの精査の済んだ遺構の実測を10月29日までに行ない、その後、レベルの確認を同30日までに終えて、同31日、プレハブをそのままにし、次春の調査計画を胸に一まず遺跡を離れた。

昭和56年度の調査は工事の日程等の都合で、周囲の雪解を待たずして、4月13日から開始した。一冬越した遺跡は、精査の済んでいない遺構などにその侘しさをたたえていた。

4月21日までにII区の残り、2,600m²の遺構検出に努める。その結果、SD140堀跡の西側部分には数回にわたって切り合いの見られる矩形の土壙や、小さな柱穴が密集しているが、II区の西部には遺構がまばらで、西端部にSD300、301とした堀跡様の遺構のあることがわかった。4月15日、II区中央東寄りにSI203、204、205とした重複する竪穴住居跡様の遺構を発見。精査したところ縄文時代の竪穴住居跡のように粘土で貼床をしたカマドを持たない方形の竪穴住居跡であることを確認した。SI203の埋土中から珠洲系片口の破片が出土しており、中世後半の竪穴住居跡と考えられた。

調査期間があらかじめ5月13日までと決っていたため、この間、かなりの強雨でも実測等の作業は休まずに行なった。5月11日までに全ての遺構の掘り下げと実測、写真撮影を終えたが遺構の精査、掘立柱建物跡の発見等についてはとても満足のいくものとはなり得なかった。5月13日プレハブの解体、機材の積み込み等を行ない、緊急発掘調査の中味と、遺跡への責任という課題を抱えつつ、美田と化するであろう遺跡を後にした。

第4章　調査の記録

2ヶ年にわたる桐木田遺跡発掘調査で発見した遺構は全て中世後半から近世初期のものである。遺物は前述の時期の他に縄文時代のものが若干出土している。

第1節　中世後半～近世初期の遺構と遺物

発見された遺構は堀跡3条、土橋2基、溝跡11条、掘立柱建物跡12棟、竪穴住居跡9軒、方形竪穴状遺構32基、長方形竪穴状遺構33基、土壙16基、集石遺構5基、などである。これらの遺構はその構造、覆土中からの出土遺物などによって全て中世後半～近世初期の所産と考えられるものである。

1．発見遺構（第3図）

発見した遺構の数は上記の通りであるが、ここではそれらのうちから代表的なものを数例づつ取り上げて述べることとする。

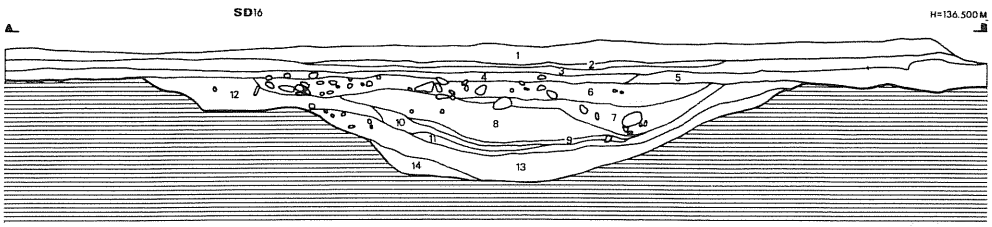
1）　堀跡

いわゆる中世平城などに見られる「堀」などに比べると、むしろ大溝とでも称すべきような規模であるが、全体の形、土橋の存在などによって堀跡としたものである。

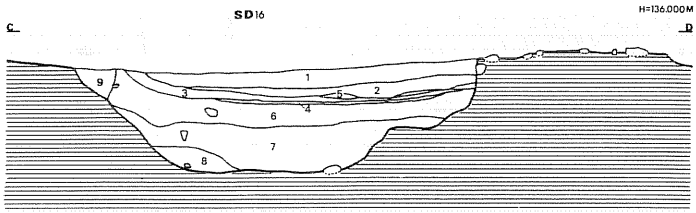
ＳＤ16、140　堀跡、（第3、4図、図版3、4、5、6）

東西に長い調査区の東半分を占める堀跡で、Ⅰ区ではＳＤ16、Ⅱ区ではＳＤ140としたものである。東、西、南、北の各辺はそれぞれ真っ直ぐで、南、北辺と東辺とのなす角度はほぼ直角であるが、西辺が北西方向に若干広がっており、全体としては南を上にして見た場合略台形を呈する。各辺の長さは東辺57.2ｍ、南辺48.8ｍ、西辺50.8ｍ、北辺62.4ｍ。堀断面の形状は一部に薬研様を呈するところもあるが、大部分は箱薬研で、逆台形をなす。上面幅約3.8ｍ、下面幅約1.6ｍ、深さ約1.0ｍ。北辺の西寄り部分は地山そのものが低くなっており、深さ約0.4ｍであった。

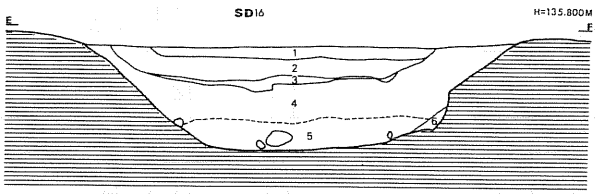
東辺と西辺のほぼ中央部には最初から掘られることのなかった土橋がある。この2つの土橋の中心を結ぶ直線はN61°Ｗ。ちなみに東辺はN34°Ｅ、南辺はN51°Ｗ、西辺はN16°Ｅ、北辺はN62°Ｗである。また、堀跡東－南－西辺の内側2.4～5.6ｍに堀跡とほぼ同じ形状でＳＤ15Ａ、Ｂ（ＳＤ134、135）がある。西辺を除いて両者の間には特に遺構がない。あるいは同時に掘られて、両者の間に土塁状の構築物が存在した可能性もあるが、断面観察等ではそのことを裏付けることは出来なかった。



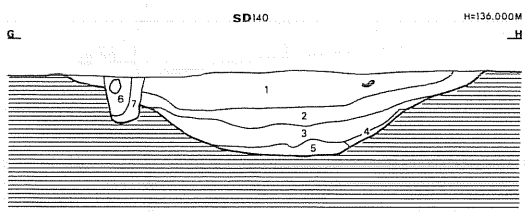
1層　黒褐色土(10YR3/1)　繊維質を含む粒子が細かく弱干粘性をおびている。
2層　黒褐色土(10YR3/1)＋赤褐色土(2.5YR4/6)　第1層と第3層の中間的土層。
3層　黒褐色土(10YR3/1)＋赤褐色土(2.5YR4/6)　第2層より後者の方のまじり具合が多く酸化物も多少含まれる。
4層　暗褐色土(10YR3/4)　酸化物をかなり多く含んでいる。硬くしまっている。
5層　暗褐色土(7.5YR3/4)　酸化物を多少含む、砂質ではそぼそする。小礫を多少含む。
6層　暗褐色土(10YR3/4)　砂質土粒子はかなり大きい炭化物を含む小石を多少含む。
7層　暗褐色土(10YR4/4)　第6層より粒子の大きさは小さく粘性をおびている。中型の石を多少含む。
8層　暗褐色土(10YR3/4)＋赤褐色土(2.5YR4/6)　弱粘質土酸化物、炭化物を含む。
9層　黒褐色土(10YR3/1)　粘質土粒子はかなり細かい、しまっている。酸化物を少々含む。
10層　黒褐色土(10YR3/1)　粘質土第9層よりも酸化物を多く含む。
11層　黒褐色土(10YR3/1)　弱粘質土酸化物、砂質土を多少含む。
12層　暗褐色土(10YR3/4)　やや砂質はそぼそする。所々に明黄褐色の砂質土がまじっている。
13層　暗褐色土(10YR3/4)　弱粘質土酸化物、炭化物を多少含む、硬くしまっている。
14層　褐色土(7.5YR4/6)　やや砂質軟かい、下層に小礫を含む。



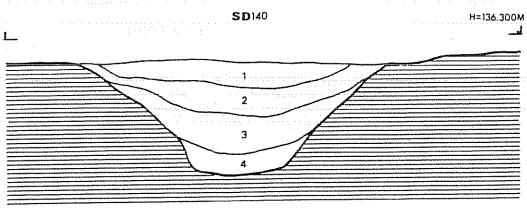
1層　黒褐色土(10YR3/1)　粒子が細かく炭化物小礫を少量含み



1層　黒褐色土(10YR3/1)　粒子が細かく炭化物小礫を少量含み、弱干粘性がある。
2層　黒褐色土(10YR3/4)　粒子が細かく小礫を含む炭化物は見られない。
3層　暗褐色土(7.5YR3/4)　粒子が細かいが砂が混り合っている。遺物は見られない。
4層　黒褐色土(10YR3/2)　粒子が細かく砂質、土壌が混入している。遺物は見られない。
5層　黒色土(10YR2/1)　粒子が細かく粘性がある。又遺物繊維質が混っている。炭化物等は見られない。
6層　黒色土(10YR3/1)　粒子が細かく弱干の粘性を伴う。又繊維質が混入している。炭化物等の遺物は見られない。
7層　黒色土(7.5YR3/1)　粒子が細かく粘性が強い。礫が混入している。遺物は見られない。
8層　黒褐色土(7.5YR3/1)　粒子が細かく粘性がある。繊維質の混入は見られないが小礫が混入している。
9層　黒褐色土(7.5YR3/2)　粒子が粗く砂質土壌である。弱干炭物を含んでいる。



1層　暗褐色土(7.5YR3/4)　粒子が細かく、粘質の土、少量の炭化物と小さな礫を含む。
2層　黒褐色土(7.5YR3/2)　1層と比較すれば黒っぽく、粒子、粘質はあまり変化はないがやわらかい。少量の炭化物を含む。礫はほとんどない。
3層　暗褐色土(10YR3/4)　粒子の大きな砂質状の層、弱干2層の土が流れ込んだ状態になっている。少量の炭化物あり、礫はなし。
4層　黒褐色土(10YR3/2)　粒子が非常に細かくやわらかい粘土層、少量の炭化物を含む。木片（枝状のもの）が堆積したようになっている。
5層　黒、色土(YR3/1)　4層と同じ、ただし5層の方が黒っぽい。極く少量の炭化物が含まれる。4層と同様木片は含まれているが4層よりは少ない。
6層　4層とほぼ同じただし砂質状のものが混入しザラザラしている。



1層　暗褐色土(10YR3/4)　砂質土、ほそぼそしている。炭化物を含む。
2層　褐色土(10YR4/4)　1層よりも粘性がある。しまりがよい。
3層　黒褐色土(10YR3/2)　粘質土、かなりしまっている。
4層　3層に地山の土がまじり込んだもの。
5層　黒褐色土(7.5YR3/2)　強粘質土、しまりはよい。
6層　暗褐色土(7.5YR3/4)　に近い黄橙(10YR7/6)　地山がまじっているもの、掘り方。
7層　黒褐色土(10YR3/2)　砂質土、柱アタリ

1層　暗褐色土(10YR3/4)　ほそぼそしている砂質土
2層　褐色土(10YR4/4)　ほそぼそしている砂質土
3層　黒褐色土(10YR3/2)　よくしまっている粘質土
4層　黒褐色土(7.5YR3/2)　3層よりしまりはよくないが粘性が強い。

0　2m

第4図　SD16・140掘跡断面図

堀跡と他の遺構との重複関係はあまりないが、西辺北部で掘立柱建物跡（ＳＢ303)と切り合っている。ＳＫ154やＳＫ158が堀より古く、ＳＢ303の柱穴は堀より新しい。

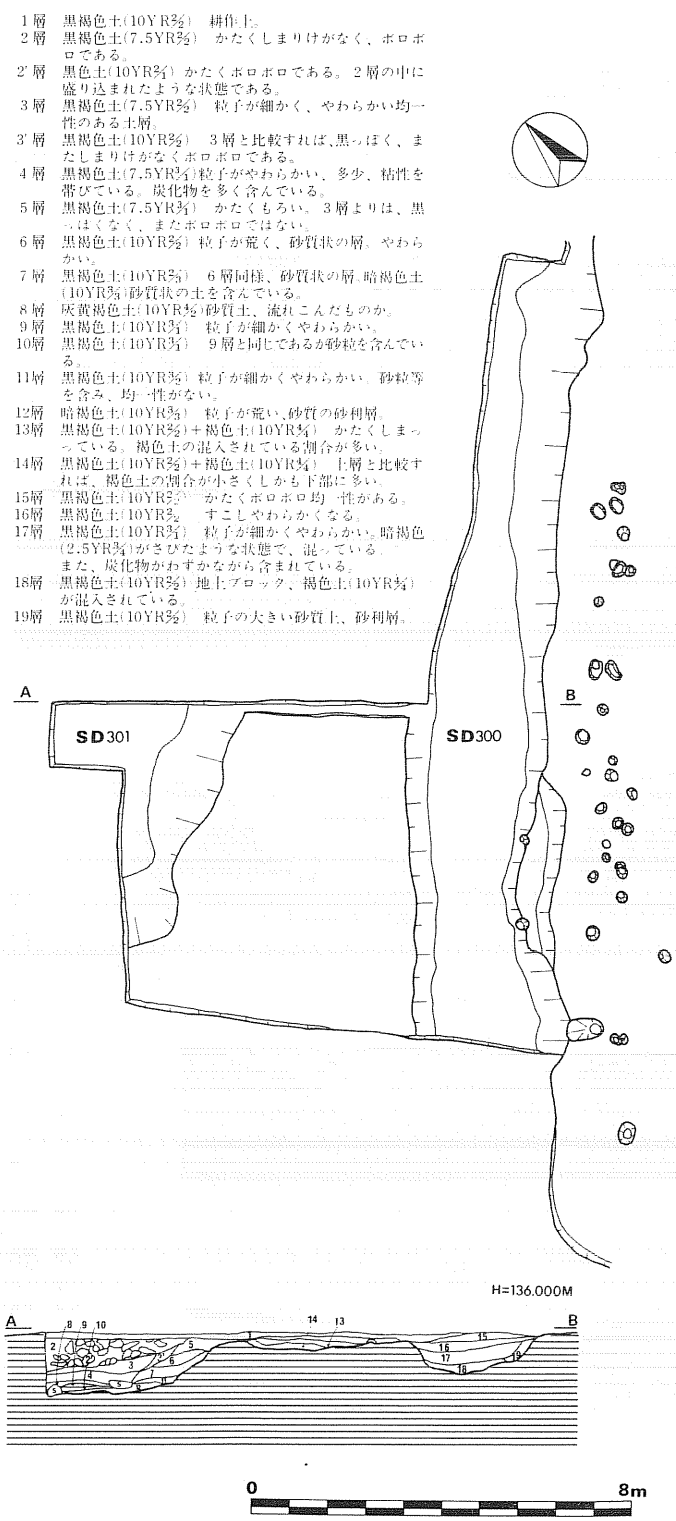
堀跡埋土中から第22、23、24、25図のような遺物が出土している。

ＳＤ300、301堀跡、（第５図、図版６）

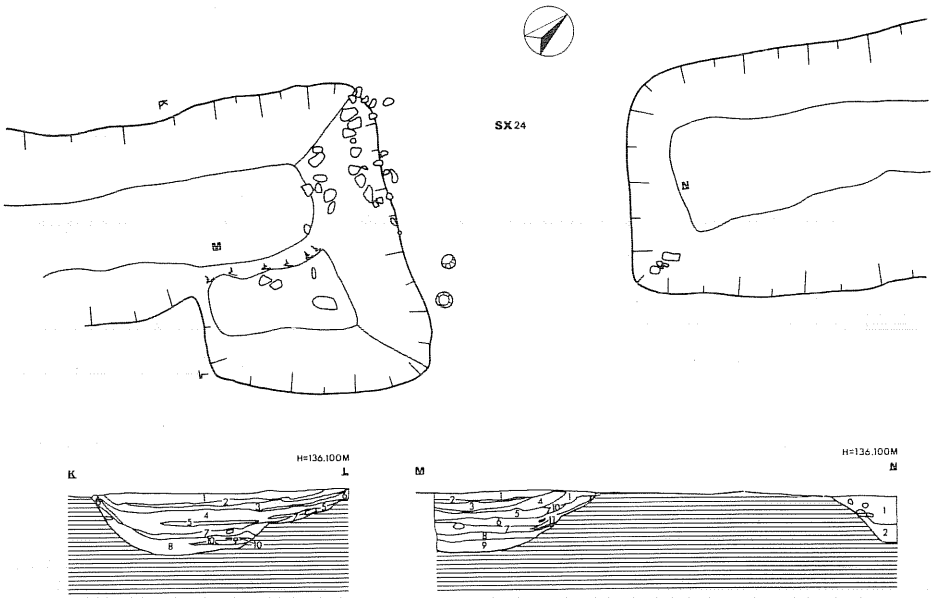
調査区西端部で発見された堀跡。ＳＤ300は上面幅3.0ｍ、底面幅1.2ｍ、深さ0.95ｍで、現在使用されている水路にほぼ並行するが、工事用迂回排水路断面の観察によると、さらに南の方に延びている。ＳＤ301は一部分の調査にしかすぎず、詳細は不明であるが深さ1.4ｍ、上面幅6.0ｍ、以上のものであろう。

ＳＸ24、150土橋、（第６図、図版８）

略台形の堀の東辺と西辺の中央部にそれぞれＳＸ24、ＳＸ150とした土橋がある。２つの土橋は最初から掘られることなく、計画的に配置されたものであろう。

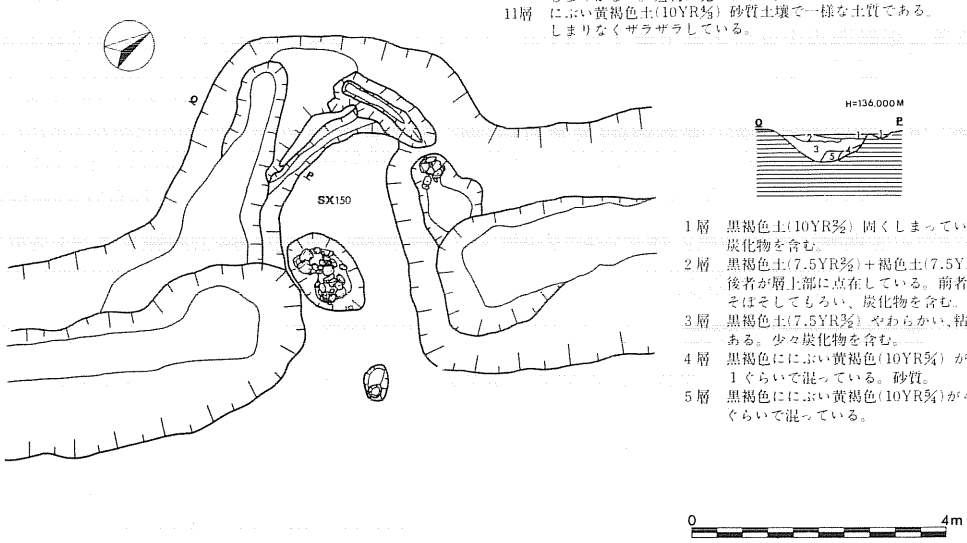


第５図　ＳＤ300、30



1層　黒褐色土(10YR3/2) しまっていて粒子が細かい。小礫炭化物を弱干含む。
2層　暗褐色土(10YR3/4) 砂と土とが混じり合っているが、砂が多く混入してザラザラしており礫遺物は見られない。
3層　黒褐色土(10YR3/2)＋黒褐色土(10YR3/3)〔砂〕とが混じり合って全体的には1層に類似する。又炭化物も弱干含まれる。
4層　黒褐色土(10YR3/2) 粒子が比較的粗く小礫が含まれ軟かい。
5層　黒褐色土(10YR3/2) 砂質土壌である。1層と類似しているが1層の方が赤っぽく炭化物等が含まれているが5層では全く見られない。
6層　黒褐色土(7.5YR3/2) 砂質土壌である。粒子は一様な大きさを示さない。遺物は見られない。
7層　暗褐色土(10YR3/4) 砂質土壌である。小砂を含んでおるが遺物炭化物は認められない。粒子は粗い。
8層　黒褐色土(10YR2/2) 非常に粒子が細かく粘性を伴う。包含物は見られず一様な土質である。
9層　褐色土(7.5YR4/4) 砂質土壌である。小礫を含み木片等の遺物も含む。
10層　黒色土(10YR2/1) 砂質土壌であるが粘質土が混入して弱干粘性も伴う。遺物は見られない。

1層　黒褐色土(10YR3/2) しまっていて粒子が細かい。小礫炭化物を弱干含む。
2層　暗褐色土(10YR3/4) 砂と土とが混じり合っているが砂が多く混入している。ザラザラしており礫遺物は見られない。
3層　黒褐色土(10YR3/2)＋黒褐色土(10YR3/3)〔砂〕とが混じり合って、全体的には1層に類似する。又炭化物も弱干含まれる。
4層　褐色土(7.5YR4/4) 砂質土壌で粒子が大きくザラザラしている。炭化物、礫等は見られない。
5層　黒褐色土(10YR3/2) 粒子が比較的粗く小礫が含まれ軟かい。
6層　黒褐色土(10YR3/2) 砂質土壌である。1層と類似しているが1層の方が赤っぽく炭化物等が含まれているが6層では全く見られない。
7層　暗褐色土(10YR3/4) 砂質土壌である。小砂を含んでおるが遺物炭化物は認められない。粒子は粗い。
8層　黒色土(10YR3/1) 砂質土壌であるが、粘質土が混入して弱干粘性も伴う。遺物は見られない。
9層　黒褐色土(10YR3/2) 非常に粒子が細かく粘性を伴う。包含物は見られず一様な土質である。
10層　暗褐色土(10YR3/4) 砂質土壌で粒子も大きくサラサラしてしまりがない。遺物は見られない。
11層　にぶい黄褐色土(10YR4/3) 砂質土壌で一様な土質である。しまりなくザラザラしている。



1層　黒褐色土(10YR3/2) 固くしまっている。炭化物を含む。
2層　黒褐色土(7.5YR3/2)＋褐色土(7.5YR4/4) 後者が層上部に点在している。前者はほそぼそしてもろい、炭化物を含む。
3層　黒褐色土(7.5YR3/2) やわらかい、粘性がある。少々炭化物を含む。
4層　黒褐色ににぶい黄褐色(10YR5/4) が1：1ぐらいで混っている。砂質。
5層　黒褐色ににぶい黄褐色(10YR5/4)が4：1ぐらいで混っている。

0　4m

第6図　ＳＸ24・150土橋

東辺の土橋ＳＸ24は、上面幅が内側で4.5ｍ、外側で3.2ｍを計り、上面は平坦である。この土橋に付属すると思われるようなものは特に検出されなかったが、外側基部に径20cmのピットが２個あった。

ＳＸ150は上面の幅1.7ｍ、長さ４ｍの土橋。西端が掘跡西辺の本来想定される線よりも外側（西側）に1.2ｍ張り出した溝によって画されている。

ＳＸ24とＳＸ150の中軸線はＩ区中央西端部で約17°の違いでもって交わり、その部分にはこの堀跡内の中心建物群があったと見られる柱穴群がある。

２）　溝跡

溝跡は全部で11条発見されたが、ＳＤ15Ａ・Ｂ、ＳＤ134、135など以外には、幅もせまく浅いものである。

ＳＤ17はＳＸ24土橋の内側、堀跡とほぼ直角に交る溝跡である。土橋からの道路の北端を画する溝のようにも見えるが、反対側にはない。

ＳＤ111は堀跡西辺あるいはＳＤ134などに並行して走る溝であるが、やはり途中で途切れている。この溝の東側に掘立柱建物跡などが多いことから、それらの西を限るようなものであるかもしれない。

ＳＤ15Ａ・Ｂ、ＳＤ134、135　溝跡（第７図、図版７）

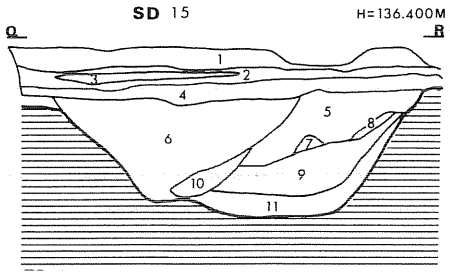
Ｉ区で発見されたＳＤ15Ａ・Ｂ（ＳＤ15ＡがＳＤ15Ｂより古い）とII区で発見されたＳＤ134、135とはそれぞれ、ＳＤ15ＡはＳＤ134に、ＳＤ15ＢはＳＤ135に接続する溝跡であろう。これらの溝跡は略台形の堀跡の東・南・西辺の内側に堀跡とほぼ同形に掘られており、第３図に示した部分以外、特に東辺の北半分と北辺にはその痕跡が全く認められなかった。

ＳＤ134はほぼ中央に最初から掘られることのなかった土橋様の部分を持つ。この土橋様遺構の位置は堀跡西辺中央にある土橋（ＳＸ150）よりも５～６ｍ南である。また、ＳＤ15Ｂの北端においても溝が一度とぎれて、ＳＤ18に連続するようにも見える。この位置もＳＸ24土橋の内側で、２～３ｍ南である。ＳＤ134はＳＫ144を切っている。

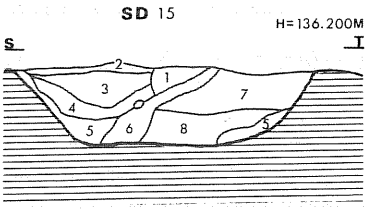
ＳＤ15Ａは上面幅1.2～1.5ｍ、下面幅0.6～0.7ｍ、深さ0.4～0.6ｍ、ＳＤ15Ｂは上面幅1.0～1.3ｍ、下面幅0.3～0.5ｍ、深さ0.2～0.5ｍで、箱薬研堀。ＳＤ134は上面幅0.8～1.5ｍ、深さ0.3～0.6ｍの薬研堀である。

３）　掘立柱建物跡・柱穴群

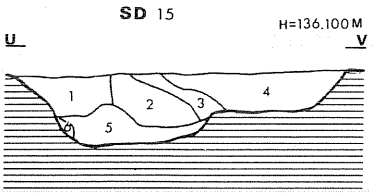
一辺50～60ｍの略台形の堀跡の中央部分（東部柱穴群）と、堀跡の西辺をはさむ部分（西部柱穴群）の２地域を中心にして掘立柱建物跡あるいは柱列になると思われる柱穴群がある。柱穴は最も集中する部分になると４×４ｍのグリッド内に60個以上という多さで、それぞれの切り合いも激しく、掘立柱建物跡にした場合、数回～10回前後の建て替えが想定される。また、



1層　暗褐色土(7.5YR3/3)　弱砂質土、酸化鉄を多く含む。
2層　極暗褐色土(7.5YR2/3)　ややしまっている上部に酸化鉄を含む。
3層　褐色土(7.5YR4/4)　弱粘質土しまりがない。
4層　暗褐色土(7.5YR3/4)　やわらかい炭化物を少々含む。
5層　暗褐色土(10YR3/4)　ぼそぼそしている。
6層　褐色土(7.5YR4/6)　やや粘性をおびている。
7層　黒褐色土(7.5YR3/2)　ぼそぼそしてもろい。
8層　暗褐色土(7.5YR5/6)　しまりがよい褐色土(砂質土)がまじっている。

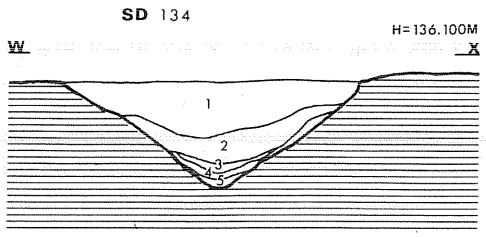


1層　耕作土、暗褐色土(10YR3/3)
2層　明赤褐色土(5YR5/6)　しまりがよい、酸化鉄を多く含む。
3層　明赤褐色土＋暗褐色土酸化鉄を多く含む。
4層　黒褐色土(10YR3/3)　酸化鉄の方の量が多い。
5層　黒褐色土(7.5YR3/3)　ぼそぼそしてもろい。
6層　暗褐色土(7.5YR3/3)　弱粘質土酸化鉄を多量に含む。
7層　黒褐色土(7.5YR3/2)　砂質土を含む。
8層　黒褐色土(7.5YR3/2)　酸化鉄を少々含む。
9層　暗褐色土(7.5YR3/4)　しまりがよい。
10層　暗褐色土3/4砂質土を含む、酸化鉄を含む。しまりはよい。
11層　暗褐色土(7.5YR3/4)　9層よりしまりがよく褐色土(砂質土)がまじっている。

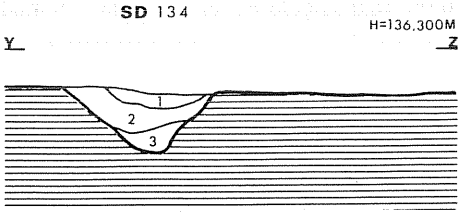


1層　黒褐色土(7.5YR3/2)　ぼそぼそしてもろい。
2層　暗褐色土(7.5YR3/3)　上層はしまっているが下層はやわらかい。
3層　褐色土3/4セクション①の褐色土(7.5YR4/4)　やや粘性をおびていると同じであるが酸化鉄、砂質土などを含む。
4層　褐色土(7.5YR3/4)　弱粘質土しまりがない。炭化物を少々含む。
5層　暗褐色土(7.5YR3/4)　しまりがよい。褐色土(砂質土)がまじっている。
6層　褐色土(7.5YR4/4)＋黄褐色土(10YR5/6)

1層　褐色土(10YR4/6)＋暗褐色土(7.5YR3/4)に1位の割合でまじっている、しまっている。
褐色土(7.5YR3/3)　砂質土非常によくしまっている。
2層　暗褐色土(10YR3/4)　砂質土非常によくしまっている。



1層　褐色土(10YR3/6)＋暗褐　土(7.5YR3/4)に1位の割合でまじっている、しまっている。
褐色土(7.5YR3/3)砂質土、非常によくしまっている。
2層　暗褐色土(10YR3/4)砂質土、やわらかくぼそぼそする。
3層　暗褐色土(10YR3/3)2層よりもっとやわらかくぼそぼそする。
4層　3層＋明褐色土(7.5YR5/6)　後者はかたいかたまりとなって混えしている。
5層　暗褐色土(10YR3/4)＋黄褐色土(10YR5/6)地土まじっている。



1層　暗褐色土(7.5YR3/3)　砂質土、炭化物を含む。
2層　褐色土(7.5YR4/4)　1層よりもやや粘性はあるが砂質土少々炭化物を含む。
3層　暗褐色土(10YR3/3)弱粘質土しまりがよい。

第7図　SD15A・B、SD134・135溝跡断面図

これらの柱穴は堀跡や溝跡、竪穴状遺構を切っているものが多い。

掘立柱建物跡及び柱穴列の軸線方向は堀跡の各辺及び、矩形の竪穴状遺構の軸線方向と一致するものがほとんどである。

柱穴の規模は大小さまざまで、大きいもので径0.4～0.6mの円及び楕円形、深さ0.6～0.8m、小さいものでは径、深さともに0.1～0.15mくらいのものまである。

掘立柱建物跡は全部で11棟、そのプランを確認した。ここではその代表的なもの数例について報告する。

ＳＢ100　掘立柱建物跡（第８図、図版11）

土橋（ＳＸ150）の内側正面ＳＤ134溝跡をまたぐようにしてある５間×１間の掘立柱建物跡である。ほとんど同じ場所での建て替えが行われており、新しい建物の規模は桁行５間 10.96m（南から2.15＋2.20＋2.13＋2.21＋2.27m）、梁間１間5.08mで、古い建物がこれよりもわずかに大きい。新旧両建物の柱アタリがわかる。いづれも丸で、新しいのは径20cm前後、古いのは径25cm前後である。また新しい建物の掘方内には柱アタリの周囲に河原石をつめている場合もあった。新しい建物の柱穴P_1から第27図28、P_{11}から同図27の遺物が出土している。桁行方向はN24°Ｅ。柱掘方の一部がＳＫ136、137方形竪穴状遺構を切っている。

ＳＢ302　掘立柱建物跡（第８図）

西部柱穴群の北西にある桁行４間8.92m（南から2.23＋2.22＋2.23）×梁間4.43mの掘立柱建物跡。この建物も新旧２時期あるようで、ほぼ同じ位置での建て替えが行われている。柱掘方は小さく径0.3～0.4mの円形、深さ0.3～0.4mで、掘方内に数個の河原石を入れ、根固めとしているのが特徴的である。桁行方向はN30°Ｅ。

ＳＢ310　掘立柱建物跡（第８図、図版13）

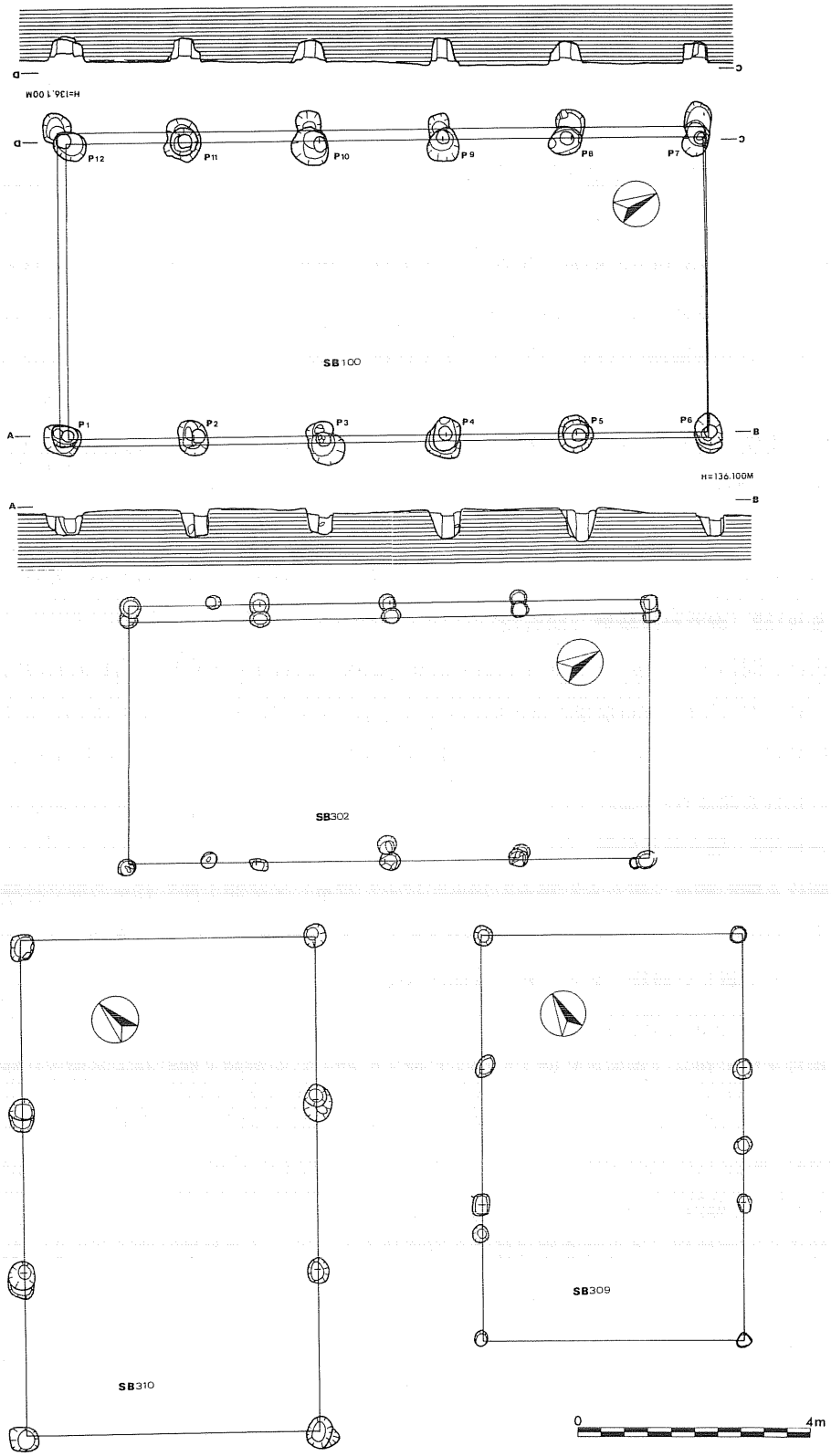
調査区北西隅部で発見された掘立柱建物跡。桁行３間8.53m（南から2.81＋2.91＋2.81m）×梁間１間5.03mを計る。この建物の周囲には他の建物と異なり柱穴がほとんどなく、１つだけ離れて存在するという感じである。やはり柱掘方内に数個の河原石が入るものもある。桁行方向はN42°Ｅ。

ＳＢ309　掘立柱建物跡（第８図）

ＳＢ302の北北東にある掘立柱建物跡。桁行３間7.00m（南から2.33＋2.32＋2.35m）×梁間１間4.47mである。桁行方向はN29°Ｅ。

東部柱穴群（第９図、図版９）

堀（ＳＤ16、140）の内側ほぼ中央部にある柱穴群で、その西部は使用されている用水路のため調査出来なかった。これらの柱穴群は柱穴と柱穴との切り合いが激しく、埋土中に数個の河原石を入れているものも多い。柱穴の平面形の大部分は円形で、大きいもので径0.4～0.7m、



第８図　ＳＢ100・302・309・310掘立柱建物跡

深さ0.5～0.8m前後、ほぼ垂直に掘られている。

柱穴群は本来的にはいくつかの矩形の建物になると思われるが、現段階ではうまく対応する柱が見当らず、単に柱列だけの確認となった。主なものはSA312、313、314、315などである。これらの柱列の掘方は本遺跡中の柱穴の中でも大きくしっかりしたものである。各柱列の柱間と方向は以下のとおりである。SA312：南から2.22+2.15+2.01+2.03m、N37°E。SA313：南から2.32+2.14+2.83m、N38°E。SA314：南から2.25+2.25+2.31+2.33+2.23m、N38°E。SA315：南から2.39+2.47+2.33+2.55+2.70m、N38°E。そして、これらの柱列の方向はSD16堀跡の方向（N51°W）とほぼ直交する。

SB311とした1間×1間の建物は、あるいは大きな建物の一部かもしれないが、この4個の柱穴の規模が大きく深いため、組み合わせてみた。この建物の方向もN38°Eである。

西部柱穴群Ⅰ（第10図、図版10）

堀西辺北西部を中心にしてある柱穴群のうち、堀内側の群を西部柱穴群Ⅰとした。ここでも規則性を持つ柱穴列は多いが（SA316など）、対応する柱列がうまく見つからない。

SB153　掘立柱建物跡（図版12）

桁行5間10.63m（南から2.07+2.17+2.15+2.07+2.17m）×梁間1間4.95mの掘立柱建物跡。柱掘方は長径0.8m前後の楕円形のものと、径0.6m前後の円形、深さは0.6～0.7m、数個の河原石を入れているものもある。また掘方はSD134溝跡を切っており、SD134よりも新しい。桁行方向はN30°E。

SB303　掘立柱建物跡（図版12）

桁行4間8.89m（南から2.26+2.19+2.17+2.27m）×梁間1間5.42mの掘立柱建物跡。柱掘方は径0.6～0.7mの円形、深さ0.5～0.6mで、SD160堀跡、SD134溝跡を切っており、これらよりも新しい建物である。桁行方向はN30°E。

SB304　掘立柱建物跡

桁行4間8.42m（南から1.97+2.03+1.95+2.47m）×梁間1間5.48mの掘立柱建物跡であるが、桁行はあと2間（3.91m）北側に延び、桁行6間の建物である可能性もある。桁行方向はN27°E。

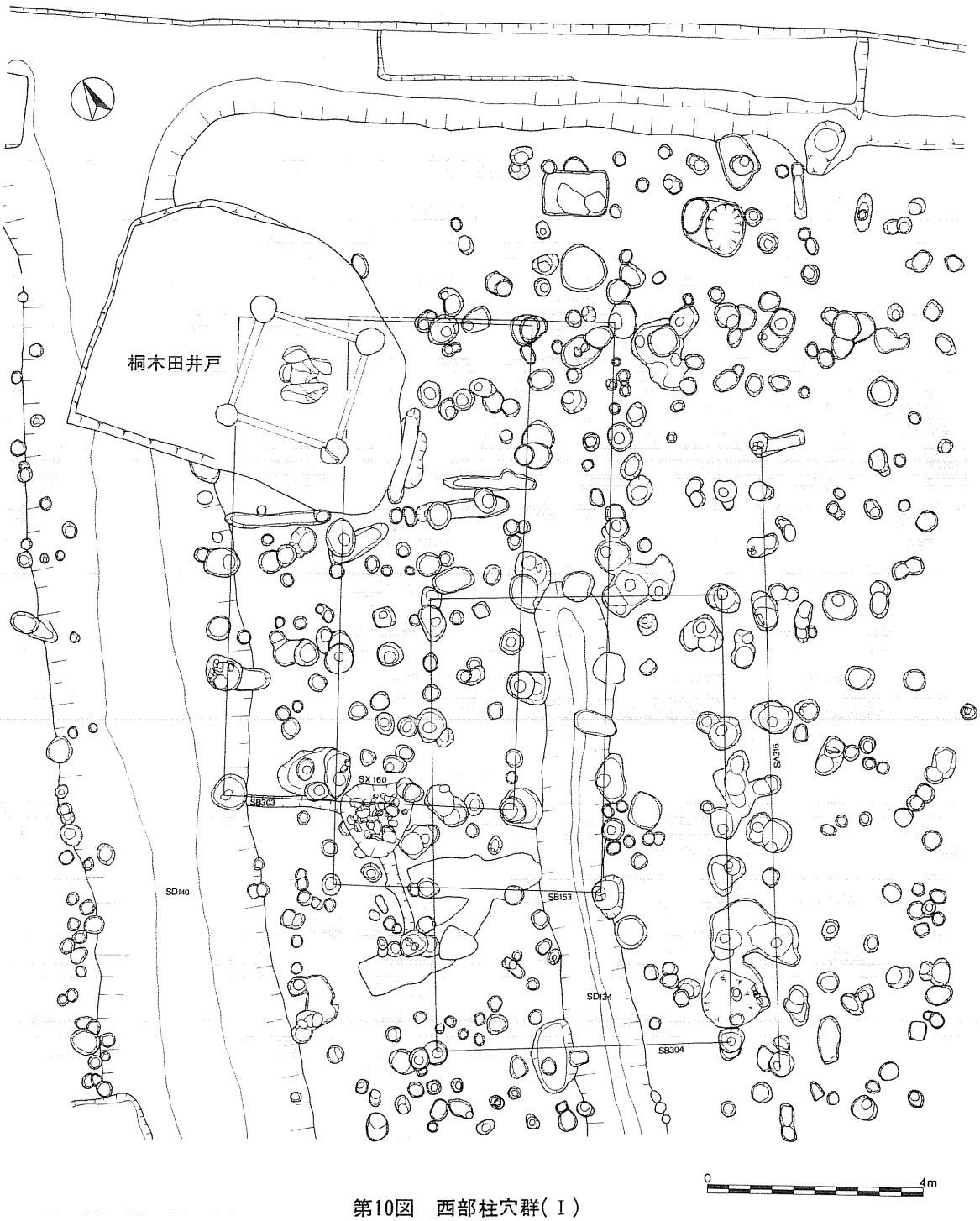
SA316　柱列

柱穴5本の柱列。さらに北側に延びる可能性もあるが、その柱間は南から2.29+1.81+2.32+1.91mである。桁行方向はN30°E。

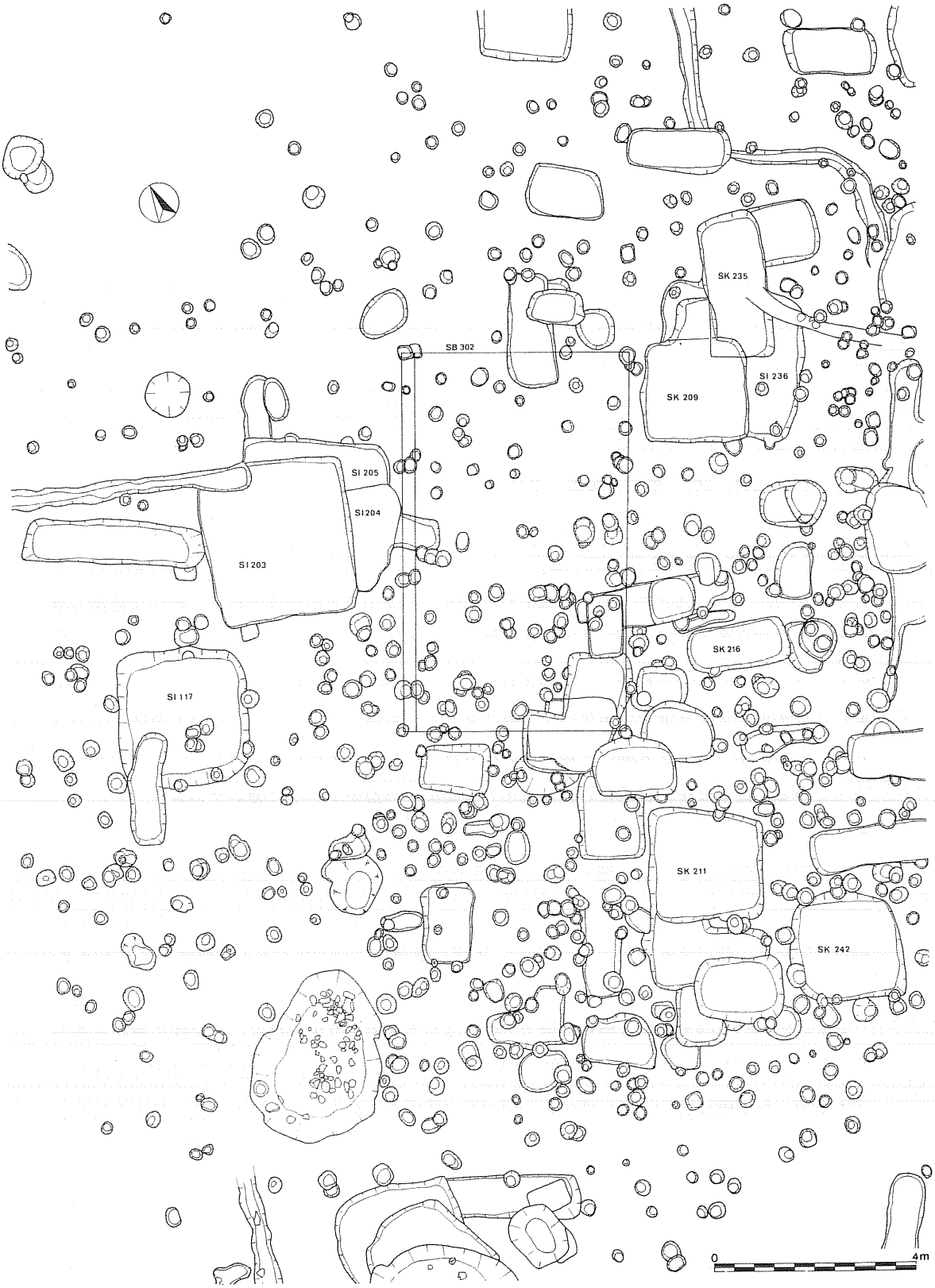
西部柱穴群Ⅱ（第11図、図版10）

主に堀跡（SD140）西辺の西側に集中する柱穴群である。東部柱穴群あるいは西部柱穴群Ⅰとは柱穴の規模において大きな違いがある。すなわち前2者には径0.6～0.8m前後の柱掘方が

第9図　東部柱穴群



第10図　西部柱穴群(Ⅰ)


SB 302
SK 235
SI 236
SK 209
SI 205
SI204
SI 203
SK 216
SI 117
SK 211
SK 242
0
4m

第11図　西部柱穴群(Ⅱ)

存在したが、この地域では大部分が径0.3m、深さ0.3m前後の比較的小さな掘方しかない。また、図でわかるように、矩形、長方形の竪穴状遺構との切り合いが激しいということもこの地域の特徴であろう。具体的に建物跡とすることができたのはＳＢ302くらいのものであるが、柱列はこのＳＢ302の桁行方向に平行、あるいは直交すると思われる。

4）　竪穴住居跡（第12、13、14図）

中世の竪穴住居跡が９軒発見された。

一辺の長さが2.5～3.0mの方形で、深さが0.15～0.5m、四隅あるいは四隅とその中間に柱穴があり、床面の一方の隅に焼土とか灰の分布する竪穴状遺構をその形態から考えて竪穴住居跡としたものである。ＳＩ203、204、205、108、20、10、11、236、117、がそれである。これらの竪穴住居跡は入口部は持たない。また、これらの遺構の軸線方向は掘立柱建物跡あるいは、略台形の堀跡の方向とほぼ同じである。

ＳＩ 203、204、205　竪穴住居跡（第12図、図版14、15）

西部柱穴群IIの北西部にある竪穴住居跡で、ＳＩ205が最も古く、同一の場所で、ＳＩ204、ＳＩ205と２回建て替えを行っている。

ＳＩ205は１辺が2.6mの方形で、幅0.1～0.2m、深さ0.1mの壁溝が廻る。柱穴は壁溝の中にあり、各辺に各々３本づつ計８本ある。壁はほぼ垂直で、地山上面から床面までの深さは約0.5mである。ＳＩ205の構築された地山は0.4mくらい掘ると砂利混じりとなる。このため、床面には黄褐色粘質土を混ぜた黒褐色土を厚さ２～４cmに貼りしめている。炉は北東隅0.6×0.8mの円形にある。床面を８cmほど鍋底状に掘り込んでおり、その中に、焼土、灰などが互層になっている。埋土は炭化物を含む黒褐色土と黄褐色土の混土で一気に埋めている。
東辺、西辺の方向の平均はN33.5°Eである。

ＳＩ204はＳＩ205を一気に埋めた後に黄褐色粘質土を主体にした土で貼り床とし、ＳＩ205よりも西部を若干大きくしている。東西3.0m×南北2.85mの略方形を呈する。その他はＳＩ205と同様の形態で、炉の位置も変っていない。明確な壁溝はないようである。長軸方向はN54.8°W。

ＳＩ203はＳＩ204を一気に埋めた後で、厚さ２～５cmの貼り床を行ない、全体の角度を若干ずらして造った竪穴住居跡である。東西2.8m×南北3.0mの略方形。形態はＳＩ205とほぼ同じであるが、炉が南東隅に位置している。ＳＩ203が使用されなくなった後も一気に埋められたようで、埋土中から第27図29の珠洲系片口鉢破片が出土している。長軸方向はN22.5°E。

その他の竪穴住居跡

ＳＩ108(第12図、図版16)、ＳＩ20（第12図、図版13）ＳＩ10、11（第13図、図版17)、ＳＩ117（第14図、図版18)、ＳＩ236（第14図、図版18）などがある。その形態はＳＩ203、204、205

などと同様であるが、明確な壁溝は検出されなかった。ＳＩ11埋土中から第27図30、31、第28図32～34の遺物が出土している。

5）　方形竪穴状遺構

矩形の竪穴状遺構である。その平面形によってＡ・Ｂの２種類がある。Ａ類：一辺が 1.5～2.0ｍの方形で、深さ0.3～0.7ｍ，垂直に掘られた竪穴状遺構。Ｂ類：1.5～2.0ｍ×2.0～3.0ｍのやや長方形を呈し、深さ 0.5ｍ前後垂直に掘られている。Ａ・Ｂ類とも床面あるいは埋土途中に灰・焼土等が円形に認められるものや（ＳＫ155、156、242など）、溝のめぐるもの（ＳＫ12など）がある。また、これらの遺構は一気に埋められたものが多く、、その長軸方向は掘立柱建物跡や竪穴住居跡、長方形竪穴状遺構のそれと略平行である。

Ａ類にはＳＫ12、137（第15図、図版19、20）、ＳＫ116、242、211、（第16図、図版21）、ＳＫ209（第14図、図版18）、ＳＫ231、155（第17図、図版20）、ＳＫ148（第19図）などがあり、ＳＫ136、124（第15図）は規模の小さいものである。

Ｂ類にはＳＫ158 、156、157（第17図、図版20）、ＳＫ154、23（第18図）、ＳＫ230（第 18図、図版22）、ＳＫ223、225、226（第16図、図版21）、ＳＫ235（第14図、図版18）などがある。

ＳＫ157から第28図36、ＳＫ154から第29図38の遺物が出土している。

6）　長方形竪穴状遺構

長さ3.0～7.0ｍ、幅0.6～0.9ｍ、深さ0.5ｍ前後で、垂直に掘られた竪穴状遺構である。これらの長軸方向は掘立柱建物跡、竪穴住居跡、方形竪穴状遺構などのそれと一致するものが多い。また、これらは断面観察によれば、一気に埋められており、埋土途中に灰、焼土などが層をなして分布するものもある。ＳＫ149、229、227、228、233、（第19図、図版22）、ＳＫ146、232、（第20図）などがこれである。

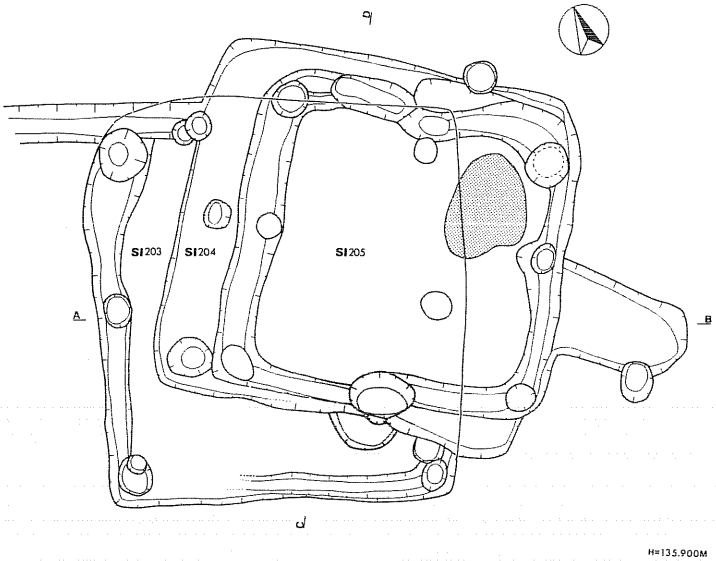
7）　土壙

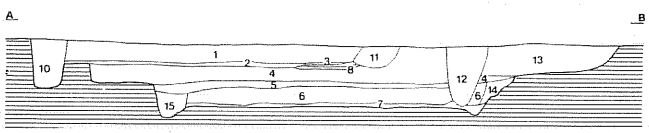
不定形で河原石や陶器片が投げ込まれたような土壙がある。ＳＫ02（第20図）ＳＫ09、127（第21図、図版23）などである。

ＳＫ09から第29図40、42、第30図43の遺物が出土している。

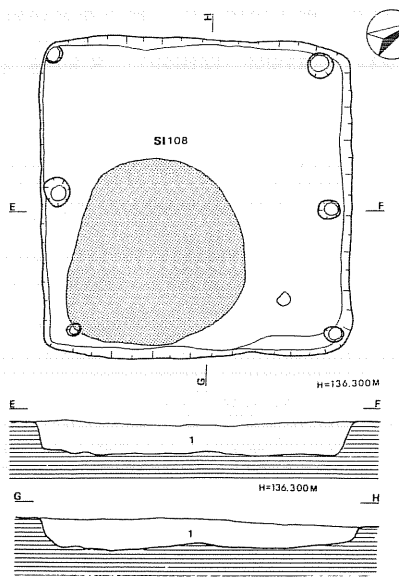
8）　集石遺構

土壙の中に故意に自然石を集めたもので、ＳＸ03、06、13（第22図、図版23、24、25、26）などがある。ＳＸ03はむしろ組石遺構とでもすべきものである。長さ 0.4ｍ、幅0.25ｍ前後の河原石を各辺３～５個縦に並べ、内法で0.7～0.8×0.9ｍ の長方形の空間ができるようにし、その各辺の石の上に他の河原石を乱積したものである。内部からは遺物等は特になく、上部と積んだ石の間から青緑釉青磁の小破片が出土している。ＳＸ06から第29図39、41の遺物が出土している。

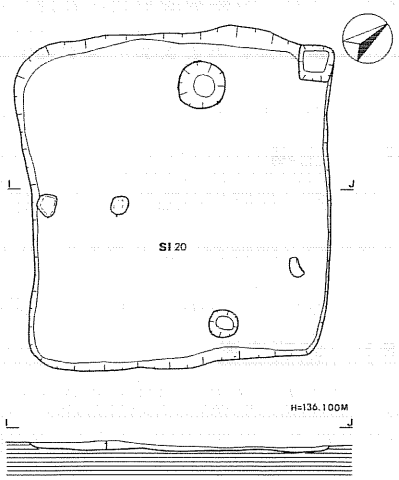




1層　黒褐色土(7.5YR3/3)　粒子が細かく、固くしまっている。褐色土(10YR4/4)が点在している。ただし、黒褐色土の割合と比較すると非常に少ない。又炭化物がわずかながら含まれている。
2層　黒褐色土(10YR3/2)　1層より若干黒ぼくザラザラしたものが混入している。そして、やはり褐色土が混入している。
3層　褐色土(10YR4/4)　非常に固くしまっている。貼り床的な趣きがある。
4層　黒褐色土(7.5YR3/3)　1層より褐色土の割合がふえる。
5層　黄褐色土(10YR5/6)　固くしまっていて貼り床と思われる。若干粒子の細かい黒褐色土(10YR3/3)を含んでいる。
6層　褐色土の割合が6：4ぐらいで入り混っている。5層ほどではないが比較的固くしまっている。炭化物も少し含んでいる。
7層　黒褐色土(10YR3/3)　粒子が細かくやわらかい。また、多少粘性を帯びる。わずかに黄褐色土(10YR5/6)を含んでいる。炭化物、小レキごくわずかにあり。
8層　黒褐色土(7.5YR3/3)　やはり褐色土が点在する。
9層　黒褐色土(7.5YR3/3)　多少やわらかい、黄褐色土をわずかに含む。
11層　黒褐色土(7.5YR3/3)　ボロボロでしまりがない。褐色土をわずかに含む。また、炭化物も含まれる。
12層　黒褐色土(7.5YR3/3)　非常にやわらかく褐色土をわずかに含む。
13層　黒褐色土(7.5YR3/3)　やわらかい他層より褐色土の割合が大きくなり均一的に混っている。炭化物も含む。
14層　黄褐色土(10YR5/6)　かたくしまっている。
15層　黒褐色土(10YR3/3)　やわらかくしまりがない。多少粘性あり、灰オーブ色土(7.5Y5/2)の含んでいる、炭化物あり。
16層　黒褐色土(7.5YR3/3)　やわらかくしまりがない。褐色土をわずかに含む。
17層　黒褐色土(7.5YR3/2)　しまりがなく、ボロボロである。褐色土がわずかに混入。
18層　黒褐色土(10YR3/3)＋黄褐色土(10YR5/6)比較的かたい。
B層よりは黒褐色土の割合が多く下にいくほど黄褐色土がふえてくる。上部に炭化物の2cmほどのかたまりあり。
19層　黒褐色土(10YR3/3)＋黄褐色土(10YR5/6)やわらかくボソボソしている。黒褐色土は多少粘性もあり、B層より黒褐色土の割合が多い。炭化物あり。

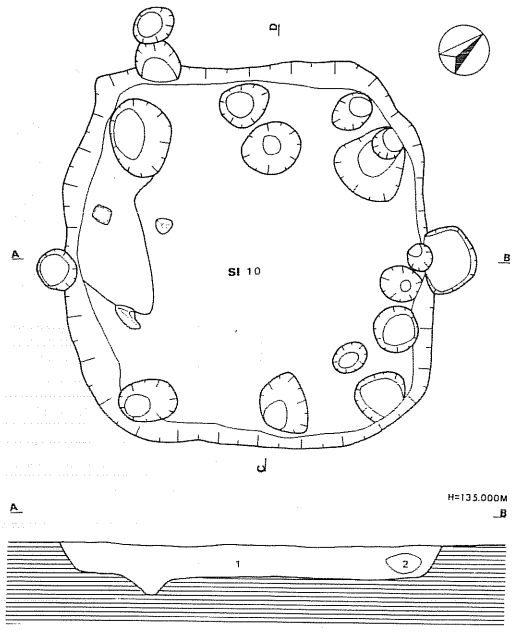


1層　黒褐色土(10YR3/3)＋褐色土(10YR4/6)　L粒子が細かくボロボロ、L地山ブロック、粒子が細かくしまっている。黒褐色土と褐色土が入り混っていて、同時に埋められたもの。礫はほとんどない。小量の炭化物を含む。

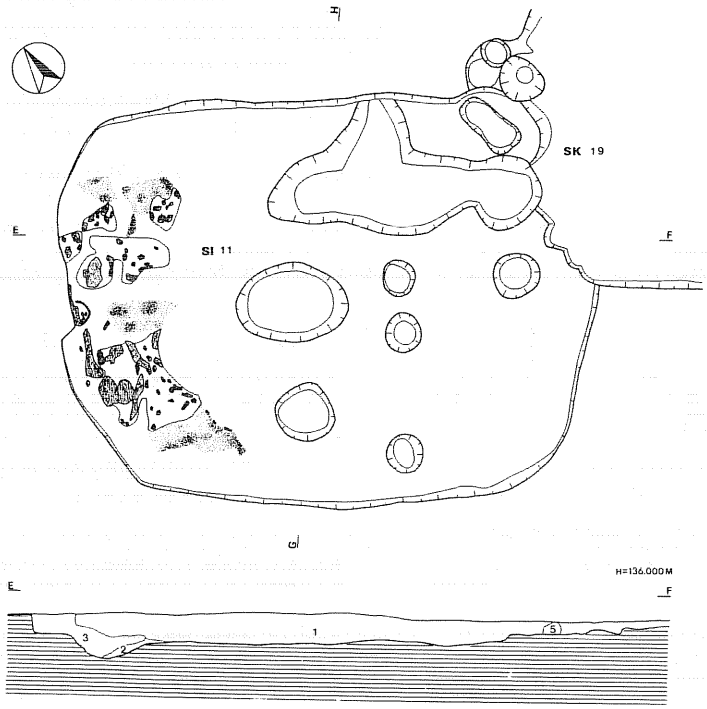


1層　黒褐色土(7.5YR3/3)　炭化物を若干含んでいる。粒子は比較的大きくボソボソしている。

第12図　SI 20・108・203・204・205竪穴住居跡



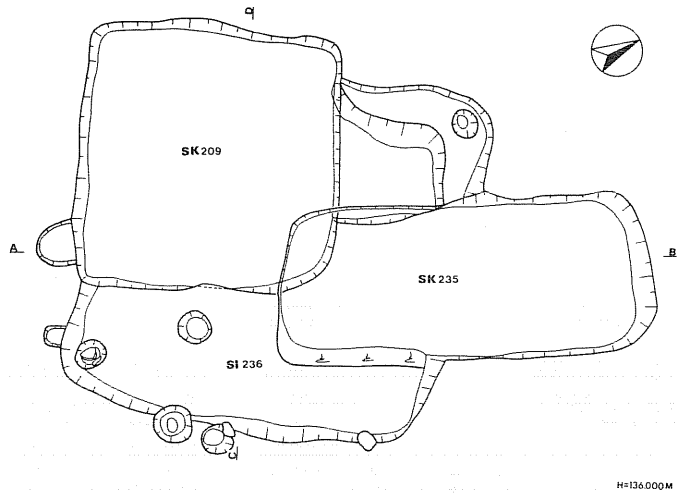
1層　(7.5YR3/1(極暗褐色土)+7.5YR3/(褐色土)砂質でサラサラしている。炭化物を含んしまっている。粘性は弱んどない。攪乱された土壌の様。
2層　(7.5YR3/(暗褐色土)若干の粘性が見られるが、それほど強くない。炭化物等遺物は含まれない。

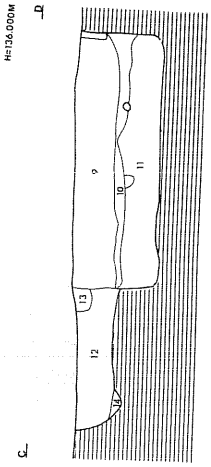


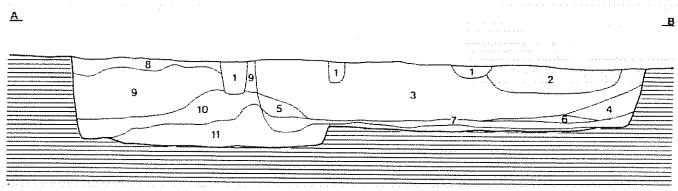
1層　暗褐色土(10YR3/3)粒子が細かく砂質状、非常に多くの炭化物を含み多少の礫を含む。
2層　暗褐色土(10YR3/4)砂質状ではあるが、1層よりは粒子が粗い。炭化物は全く含まれない。
3層　暗褐色土(10YR3/3)：1層と比較すると粘性があり、しまっている。多少の炭化物を含む。
4層　暗褐色土(10YR3/3)：1層とほぼ同様である。
5層　明褐色土(7.5YR5/6)：非常に硬くしまっている焼土。

0　2m

第13図　SI 10・11竪穴住居跡







1層　黒褐色土(10YR3/2)　粒子は細かく、かたくしまっている。粘性はなし、炭化物を少し含んでいる。

2層　黒褐色土(10YR3/2)＋黄褐色土(2.5Y5/4)　黒褐色土と黄褐色土がごちゃまぜになっている。総体的に黄褐色土がわずかに多い。土質はかたくボロボロ炭化物を含んでいる。

3層　黒褐色土(10YR3/2)＋黄褐色土(2.5Y5/4)　2層と同様であるが、黒褐色土の割合が多くなる。2層よりはやわらかくなるが、やはりボロボロである。炭化特を含む。

4層　黒褐色土(10YR3/2)＋黄褐色土(2.5YR5/4)　3層と同じであるか、黄褐色土が若干多くなる。またやわらかく多少多少粘性を帯びてくる。

5層　にぶい黄色土(2.5Y5/4)＋黒褐色土(10YR3/2)＋オリーブ灰色土(10Y5/2)　黄色土と黒色土が入り混っているところにオリーブ灰色土が入ってきている。やわらかくもろい。

6層　黄褐色土(2.5Y5/3)　粒子が荒く、砂質状の層かたくしまっている。

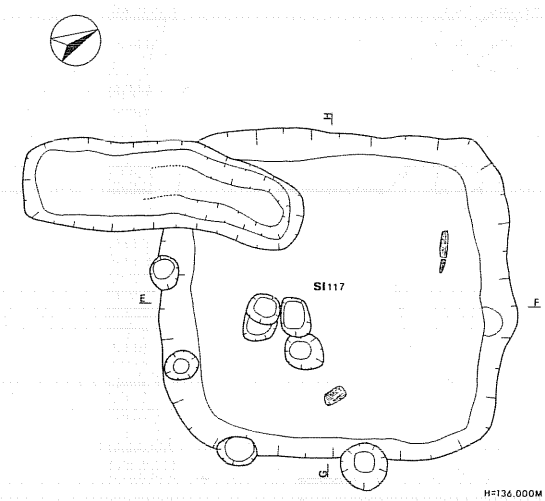
7層　黒褐色土(10YR3/1)＋オリーブ灰色土(10Y5/2)　黒褐色土はやわらかく、粘性がある。オリーブ灰色土は比較的粒子が荒い。砂質層。

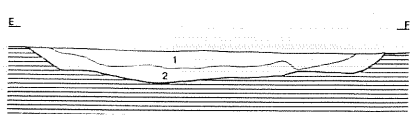
8層　褐色土(10YR4/6)　粘性はほとんどでないが、しまりはかなりある。黒色土粒子(10YR2/1)が2%混入、炭化物若干混入。

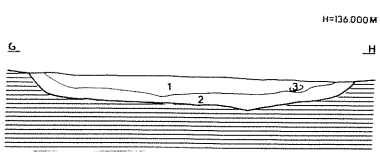
9層　黒褐色土(10YR3/2)　粘性があって、ややしまっている。にぶい黄橙色土粒子(10YR5/4)－(5%)暗褐色土粒子(10YR3/3)－(3%)がまばらに混入、炭化物2%混入。

10層　灰黄褐色土(10YR5/2)　黄褐色土粒子(10YR5/6)－(3%)混入、粘性は9層より強く、しまりがある。炭化物2%混入。

11層　褐灰色土(10YR4/1)　粘性はかなあるが、しまりはさほどなくソフトである。また黒褐色土粒子(10YR3/2)や、にぶい黄橙色土粒子(10YR5/4)などが、まばらに2%位混入している。また炭化物を少し含んでいる。







12層　暗褐色土(10YR3/4)　粘性があり、ややしまっている、黒褐色土粒子(10YR3/2)にぶい黄褐色土粒子(10YR5/4)、にぶい黄橙色土粒子(10YR5/4)等が入りまじっている。炭化物2%混入。

13層　黒褐色土(10YR3/2)　粘性は、ほとんどないが、かなりしまっている。炭化物、微量に混入。

14層　暗褐色土(10YR3/3)　粘性がかなりあるが、しまりはなく、11層より、ソフトである。にぶい黄橙色土粒子(10YR5/4)が混入。炭化物若干混入。

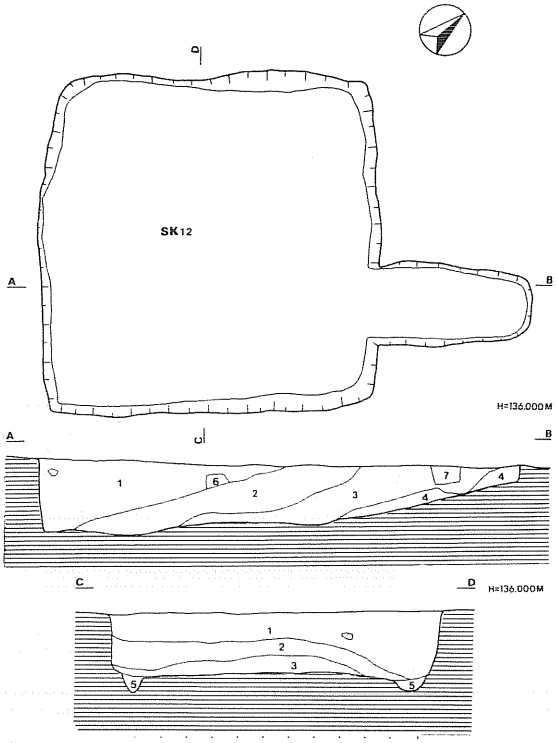
1層　黒褐色土(10YR3/4)　粒子が比較的細かく、ボロボロ一様性はない。小量の炭化物を含む。

2層　黒褐色土(10YR3/2)　粘子が細かく、粘性を帯びる。大きな炭化物のかたまりを含む。

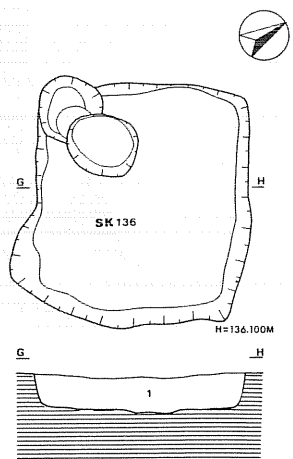
3層　炭化物。

0　2m

第14図　SI 117・236竪穴住居跡、SK209・235土壙

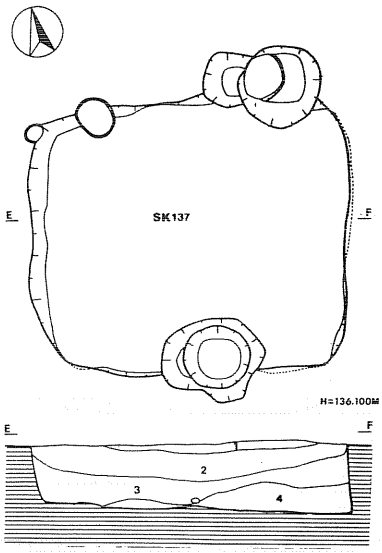


1層　明褐色土(7.5YR5/6)　非常に硬くしまっている。粒子が細かくサラサラしている。包含物なし。
2層　褐色土(7.5YR4/6)＋黒褐色土(10YR3/2)：硬いが粒子は細かく酸化した鉱物(礫を含む。)を含んでいる。
3層　褐色土(10YR4/4)＋黒褐色土(10YR3/2)：2に比べ若干粘性があり、軟い。(豆粒大の石を含む)
4層　にぶい褐色土(7.5YR5/4)と黒褐色土少量と混合している。全体的にはやや粘性を持ちしまっている。河原石を含んでいるが、遺物は見られない。
5層　にぶい褐色土(10YR5/4)が褐色土(7.5－5/6)と混り合ってしまっている。
＋黒褐色土(10YR3/2)ほぼ一様な土色である。中に大きな(長径10cm程度)の河原石を含んでいる。
6層　褐灰(10YR4/1)＋褐色土(7.5YR5/6)(若干)が混り合っている。全体的に褐灰色で、灰層で若干炭化物も含んでいる。

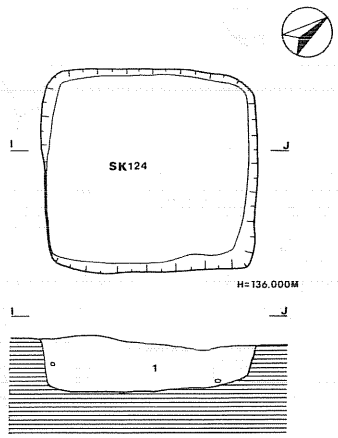


1層　褐色土(10YR4/4)：粒子が大きくザラザ

1層　褐色土(10YR4/4)：粒子が大きくザラザラしている。砂質状、黒褐色土(10YR3/2)がわずかに混入している。炭化物は見当らない。



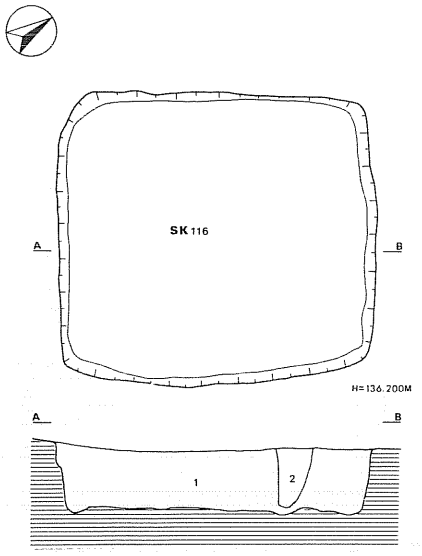
1層　明褐色土(7.5YR5/6)　非常に硬くしまっている。粒子が細かくサラサラしている。包含物なし。
2層　褐色土(7.5YR4/6)＋黒褐色土(10YR3/2)：硬いが粒子は細かく酸化した鉱物(礫を含む。)を含んでいる。
3層　褐色土(10YR4/4)＋黒褐色土(10YR3/2)：2に比べ弱干粘性があり。軟い。(豆粒大の石を含む)。
4層　にぶい褐色土(7.5YR5/4)と黒褐色土少量と混合している。全体的にはやや粘性を持ちしまっている。河原石を含んでいるが、遺物は見られない。
5層　にぶい褐色土(10YR5/4)が褐色土(7.5－5/6)と混り合ってしまっている。
＋黒褐色土(10YR3/2)ほぼ一様な土色である。中に大きな(長径10cm程度)の河原石を含んでいる。
6層　褐灰(10YR4/1)＋褐色土(7.5YR5/6)(若干)が混り合っている。全体的に褐灰色で、灰層で若干炭化物も含んでいる。



1層　黒褐色土(10YR3/2)　粒子が細かく土質は一様でない。褐色土(10YR4/4)が混入しているがその混入の仕方は一様でない。細かい礫が割に多くまじって、炭化物は極く少量であるが、混入している。

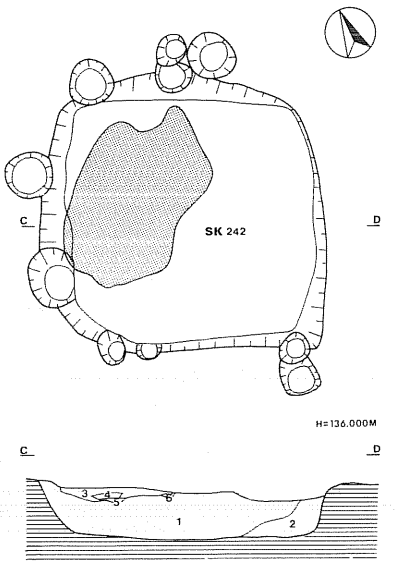
0　2m

第15図　ＳＫ12・124・136・137土壙



1層　黒褐色土(10YR3/2) 地山ブロック褐色土（10YR4/6)にぶい黄褐色土(10YR5/4) が撹乱されたように混入している。明褐色土(7.5YR5/6) も含む一様性がない。粒子は細く、粘性がない。礫、炭化物を少量含む。

2層　柱穴黒褐色土(10YR3/2) 1層のように他の土は混入されていない、ボソボソしている。炭化物を含む。



1層　暗褐色土(10YR3/4) やや粘りてしまりあり。黄褐色土粒子（10YR5/6)等がまばらに入りまじっている。炭化物を含む。尚層上部は、混入物があり、酸化鉄の為赤味をおびているが、層下部は若干黄褐色土粒子(10YR5/6)が混入している。

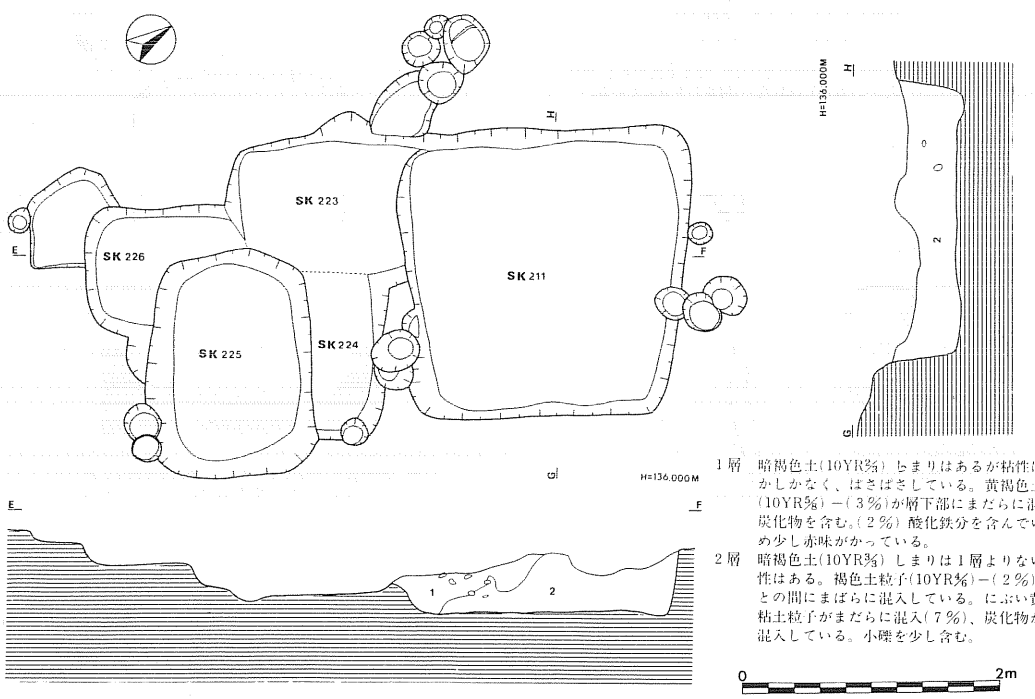
2層　黄褐色土(10YR5/6) 砂質性でさらさらしており、しまりもさほどない。尚、酸化鉄の為、若干層上部は赤味をおびている。
黒色土粒子(10YR3/2)少量混入又、炭化物を若干含む。

3層　赤褐色土(5YR4/6)粘性はほとんどないがしまりはかなりある。灰黄褐色(10YR5/2)一層上部には灰のかたまりがまばらに混入している。また酸化鉄を含んでいるため赤味をおびている。

4層　暗褐色土(10YR3/4) 粘性は少しあり、しまりはほとんどなく、もそもそしている。第3層の灰粒子が混入している。

5層　黒色土(10YR3/2) もそもそしている層で、炭化物、灰粒子等がかたまっている。

6層　赤褐色土(5YR4/6) 粘性はほとんどなくしまっている。

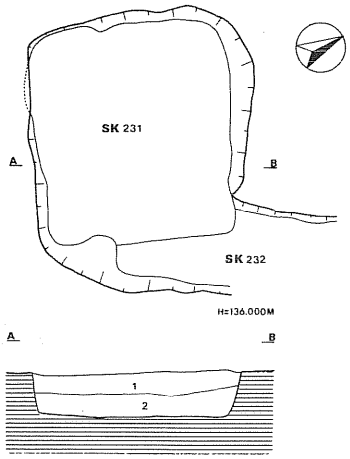


1層　暗褐色土(10YR3/4) しまりはあるが粘性はわずかしかなく、はさばさしている。黄褐色土粒子(10YR5/6)－(3%)が層下部にまだらに混入。炭化物を含む。(2%) 酸化鉄分を含んでいるため少し赤味がかっている。

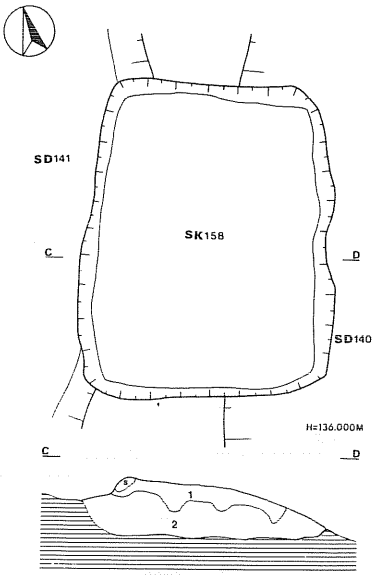
2層　暗褐色土(10YR3/4) しまりは1層よりないが粘性はある。褐色土粒子(10YR4/6)－(2%)が1層との間にまばらに混入している。にぶい黄褐色粘土粒子がまだらに混入(7%)、炭化物が2%混入している。小礫を少し含む。

0　2m

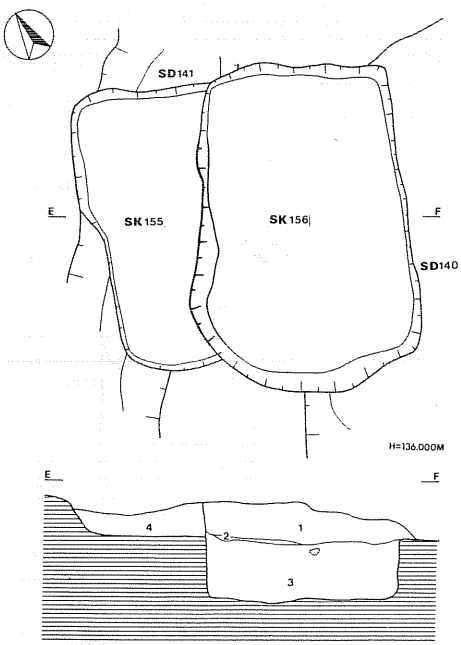
第16図　ＳＫ116・211・223・224・225・226・242、土壙



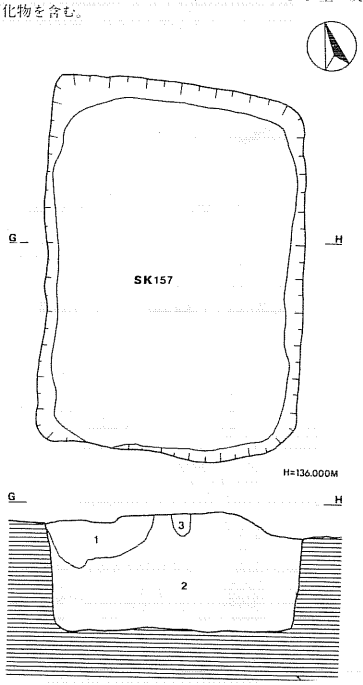
1層　黒褐色土(10YR3/4)　粘性少しあり、しまりもある。
　　またやわらかい黒褐色土粒子(10YR3/2)－(3%)
　　褐色土粒子(10YR4/6)－(5%)炭化物2%混入。
2層　褐色土(10YR4/6)　1層より粘性あるがボソボソしてている。しまりは1層よりない。黒褐色土粒子((10YR3/2)－(5%)まばらに混入。炭化物1%。



1層　黒褐色土(10YR3/4)　粒子が細かく、ボソボソして硬い。炭化物を少量含む。褐色土(10YR4/6)がわずかに混入している。
2層　褐色土(10YR3/4)＋暗褐色土(10YR3/4)　褐色と暗褐色が均一的に混入されている。粒子が大きくボソボソしている。1層よりは、多少硬いようである。少量の炭化物を含む。



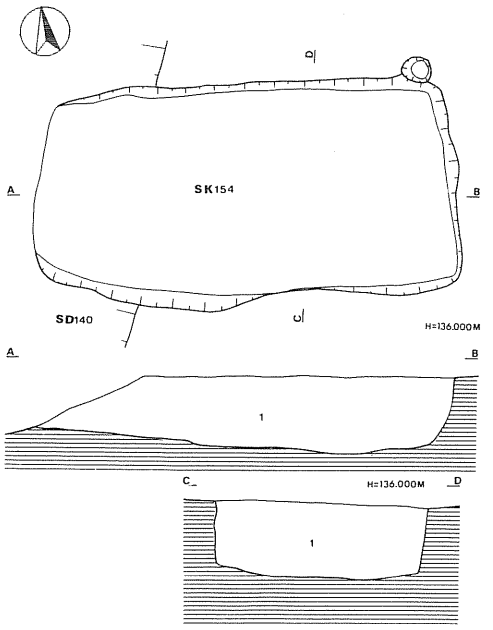
1層　黒褐色土(10YR3/4)＋褐色土(10YR4/6)　黒褐色土と褐色土が均一的に混入されている。黒褐色土の割合が褐色土より大きいが、下層に行くにつれて褐色土の割合は大きくなる。
　　黒褐色土は粒子が細かくボソボソ、小さな礫を含み、また炭化物も小量含む。
2層　黒色土(10YR1.7)　灰状の層、粒子が細かくやわらかい。
3層　褐色土(10YR4/6)＋黒褐色土(10YR3/4)　1層と比較すれば褐色土と黒褐色土の割合は逆転し、褐色土が大きくなる。しかも褐色土だけが層状になっている部分もある。そして1層同様、下層にいくほど、褐色土の割合は大きくなる。小さな礫及び小量の炭化物を含む。
4層　黒褐色土(10YR)＋にぶい黄褐色土(10YR5/4)　1'層よりは均一的でないが、二種の1がかたまって混入されている。また黒褐色土(10YR3/2)が部分的に混入されている。下層に行くにつれ黄褐がふえる。若干の炭化物を含む。



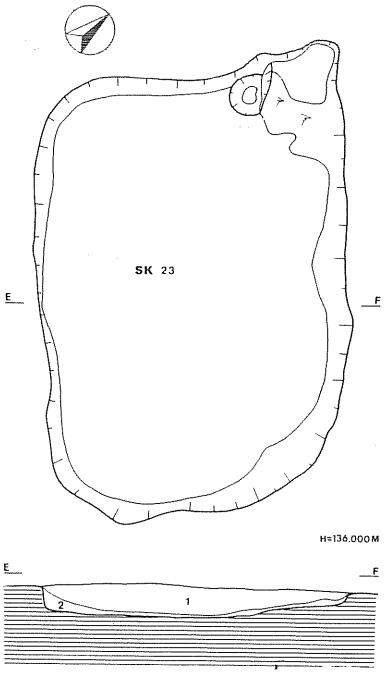
1層　暗褐色土(10YR3/4)＋にぶい黄褐色土(10YR5/4)　暗褐色土は粘性が多少あり、砂を含んでいるような状態、黄褐色土は粒子が大きくザラザラしている。二種の土が均一的に混入されている。炭化物を少量含む。
2層　黒褐色土(10YR3/4)＋褐色土(10YR4/6)　黒褐色土と褐色土が均一的に混入されている。
　　黒褐色土の割合が非常に大きい。小さな礫を含み、炭化物を含む
3層　黒褐色土(10YR3/4)　ボロボロしている。

0　2m

第17図　ＳＫ155・156・157・158・231土壙

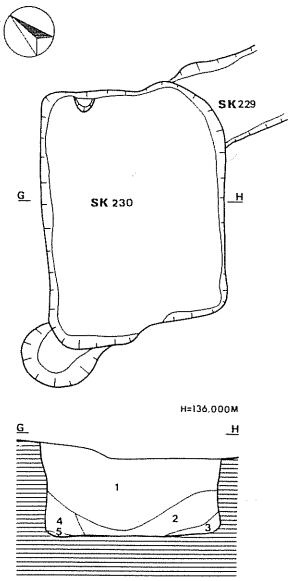


1層　黒褐色土(10YR3/4)　黒褐色土を主体に褐色土(10YR4/6)が5%～10%一様に混入されている。ただし、下に行くほど褐色土の割合は大きくなる。黒褐色土は粒子が細かくボロボロしている。小さな礫は含まれ、炭化物は含まれ、所々に大きな(2cm程度)のかたまりもある。



1層　黒褐色土(10YR3/2)　黒色土と砂とが混入している炭化物を微量含む。粘性なくザラザラしている。

2層　褐色(7.5YR4/4)　粒子の細かい砂質土壌で一様である。炭化物等は含まれずザラザラしている。



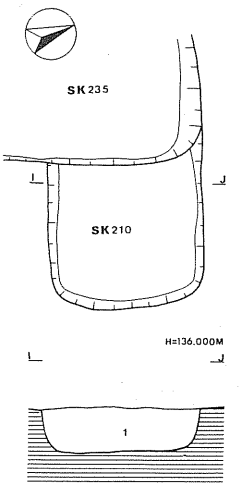
1層　黒褐色土(10YR3/2)　下の方ほどやわらかくなり、しまりがない。褐色土(10YR4/6)まだら状に混入されている。炭化物も少し含む。

2層　黒褐色土(10YR3/4)　やわらかくもろい、黒褐色土と褐色土がごちゃごちゃにまじっている。しかし1層よりは褐色土の割合が多くなる。炭化物あり、小さな石も若干含む。

3層　褐色土(10YR4/6)　粒子の大きい砂質土、若干黒褐色土を含んでいる。

4層　褐色土(10YR4/6)＋黒褐色土(10YR3/4)　2層よりさらに褐色土が多くなる。やわらかい。炭化物ある。

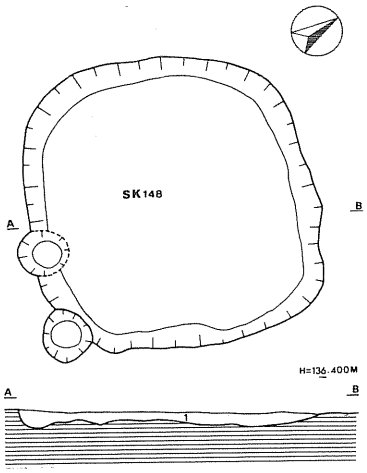
5層　黒褐色土(10YR3/2)　粒子が細かくやわらかい。ブロック状。



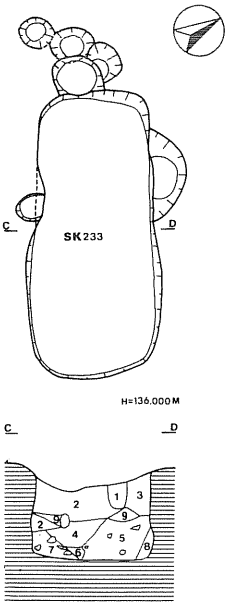
1層　黒褐色土(10YR3/2)　やや粘性があり、しまりもある。にぶい黄橙色粒子(10YR6/4)、褐色土粒子(10YR4/6)等がまばらに入り混っている。なお酸化鉄分を含むため、やや赤味がかっている。炭化物若干混入。

0　2m

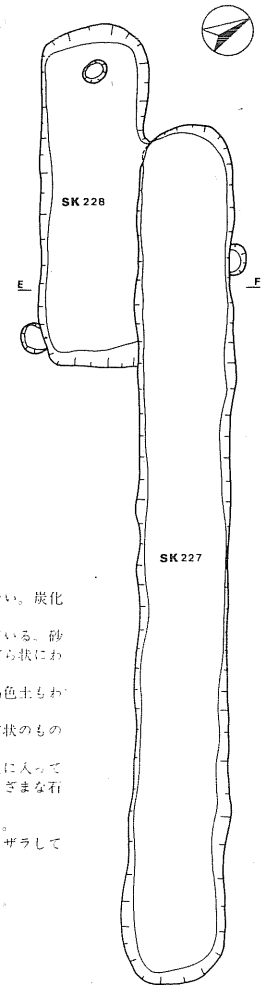
第18図　SK23・154・210・230・235土壙



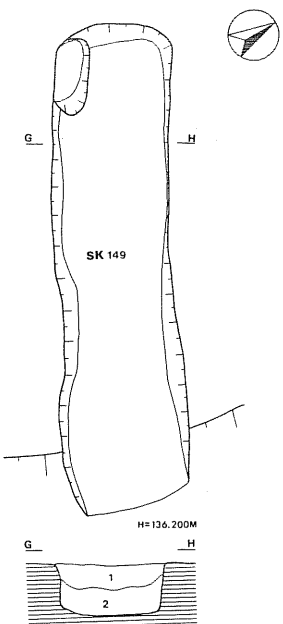
1層　黒褐色土(10YR3/4) 粒子が細くサラサラ1層より炭化物を多く含む。下部ににぶい黄褐色土(10YR5/4)が多少混入されている。



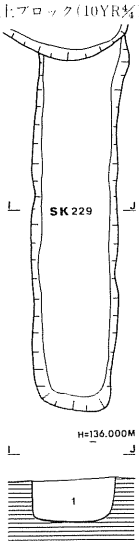
1層　黒褐色土(10YR3/2) ボソボソしてしまりがない。炭化物あり、ヒットと思われる。
2層　暗褐色土(10YR3/3) 粘性がなくボロボロしている。砂質状のものが混入している。黄褐色土がまだら状にわずかに混入している。
3層　暗褐色土(10YR3/4) 2層より若干かたく黒褐色土もわもわずかに含まれてくる。
4層　黒褐色土(2.5YR3/2) やや粘性を帯び、砂質状のものが混入している。
5層　黒褐色土(10YR3/2) 褐色土が全体にまだら状に入っている。なお褐色土の混入率は低い。大小さまざまな石を含んでいる。
6層　灰色土(5Y4/1) 粒子が荒くザラザラしている。
7層　オリーブ黒色土(5Y3/1) 粒子が非常にザラザラしている。こぶし大の石を含んでいる。
8層　オリーブ黒色土(5Y3/1) 粒子が粗い。
9層　褐色土ブロック(10YR4/4) 粒子が荒くかたい。



1層　褐色土(10YR4/6) 粘性ありてしまあり、黒褐色土粒子(10YR3/2)がまだらに混入(10%)わずかに炭化物を含む。
2層　黒褐色土(10YR3/2) 1層より粘性はあるが、しまりはあまりない。褐色土粒子(10YR4/6)が5%と暗褐色土粒子(10YR3/4)が2%まだらに混入。
3層　黄褐色土(10YR5/6) 粘性はあるが、しまりはさほどなくソフトである。黒褐色土粒子(10YR3/2)が3%と暗褐色土粒子(10YR3/4)が2%混入。
4層　黒褐色土(10YR3/2) 粘性はあるが、しまりはわずかである。褐色土粒子(10YR4/6)及び黄褐色土粒子(10YR5/6)がまだらに混入(合わせて5%)
5層　黄褐色土(10YR5/6) 粘性はあまりなく、しまりもさほどなく、若干砂質性をおびている。黒褐色土粒子(10YR3/2)が3%混入
6層　明黄褐色土(10YR6/6) 粘性若干ありてしまりが少しある。砂質性をおびサラサラしている。(シルト質)



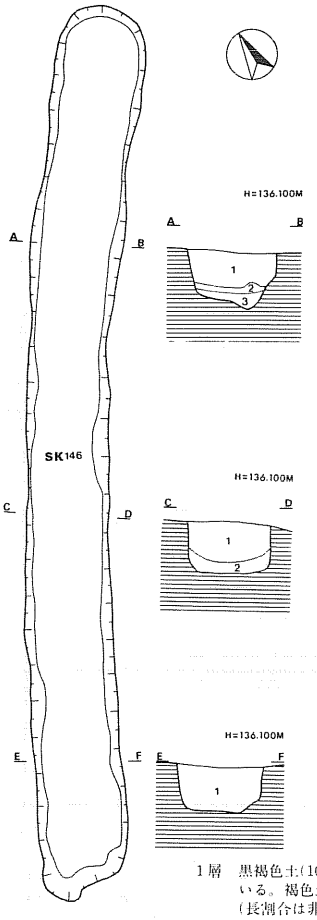
1層　黒褐色土(10YR3/2) 粒子が比較的大きくボソボソしている。褐色土(10YR4/4)が多少混入している。炭化物を含む。
2層　褐色土(10YR4/4)＋黒褐色土(10YR3/2) 1層と比較すると黒褐色土に対する。褐色土の割合が多くなり、そして下層にいくほどそれが増す。粒子が比較的大きくしまりがない。



1層　暗褐色土(10YR3/4) 非常に粘性はあるが、しまりはあまりなくソフトである。黒褐色土粒子(10YR3/2)と黄褐色土粒子(10YR5/6)と褐色土粒子(10YR4/6)がまだらに混入。特に黒褐色土粒子の混入が目立。

0　2m

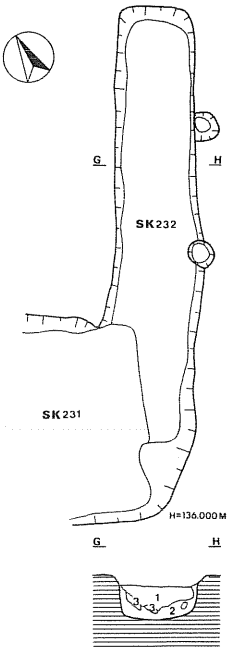
第19図　ＳＫ148・149・227・228・229・233土壙



1層　黒褐色土(10YR3/4) 粒子が細かくサラサラしている。褐色土(10YR4/4)が少量であるが、混入している。炭化物を含む。
2層　褐色土(10YR4/6) 粒子が比較的大きくもろい
3層　1層と同じ

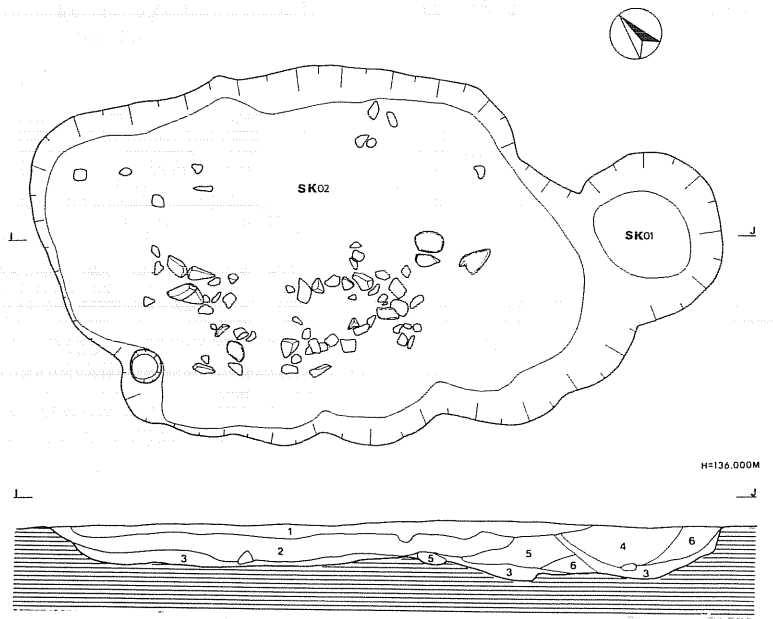
1層　黒褐色土(10YR3/3) 粒子が細かくボソボソしている、にぶい黄褐色土(10YR5/4) がわずかではあるが混入している。炭化物を含む。
2層　黒褐色土(10YR3/3) ＋にぶい黄褐色土（10YR5/4）1層に比較して黄褐色土の割合が大きくない。さらに下るほど、割合は大きくなる。黄褐色土は比較的粒子が大きくやわらかい。炭化物は少量含む。

1層　黒褐色土(10YR3/2) 粒子が細かくサラサラしている。褐色土(10YR4/4)が少し混入している。(長割合は非常に小さい) また少量の炭化物を、含む。



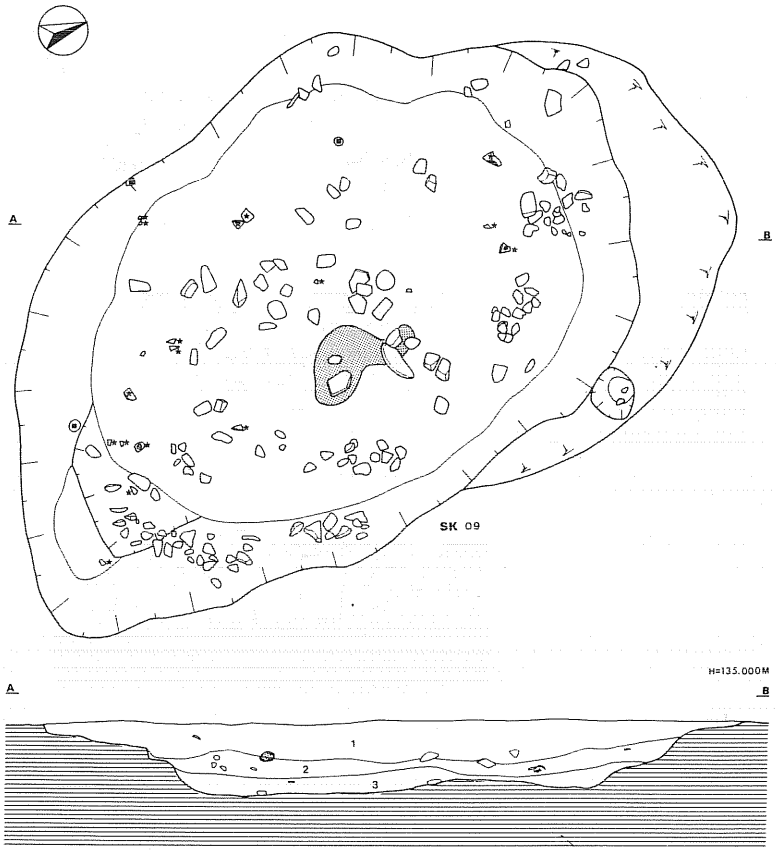
1層　黒褐色土(10YR3/2)＋褐色土(10YR4/4)　黒褐土が混り合っている。ボソボソでしまりがない、炭化物は含まない。
2層　黒褐色土(7.5YR3/4)　粒子が細かくやわらかい。また多少粘性がある。若干褐色土が混っている。
3層　褐色土ブロック

0　2m



1層　黒褐色土(10YR3/2) 硬くしまっているが、サラサラしている。少量炭化物を含む。若干褐色土の砕質を含み、一様でない。
2層　極暗褐色土(7.5YR2/3)しまっているが若干の水分を含む。炭化物を含む。(1よりも) ほぼ一様である。
3層　黒褐色土(10YR3/3)＋暗褐色土(10YR3/4)〔砂質土壌〕大きな礫が混入しているが、硬くしまっており、全体的に砂質である。遺物は含まれない。
4層　黒褐色土(7.5YR3/2)　ほぼ一様な土色で硬くしまっている。ボソボソし、遺物等は含まれない。
5層　黒褐色土(10YR3/4)　一様な土色で、粒子が細く若干粘性がある。包含物は見られない。
6層　暗褐色土(10YR3/4) 砂質で粒子が比較的大きい。また褐色の砂質も若干含まれている。包含物は見られない。

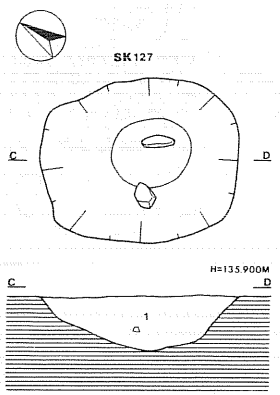
第20図　ＳＫ01・02・146・231・232土壙



1層　極暗褐色土(7.5YR3/3)＋褐色土(7.5YR5/4)〔砂質でサラサラ〕かなりしまっているがかく乱された様で一様な土色を示さない。木炭は混入していないが陶器片が一片出土している。

2層　黒褐色土(7.5YR3/2)　ほとんど一様な土色でかく乱された様子はない。しまっている粒子は細かい。炭化物は見られないが陶器片等が出土し礫が混入している。

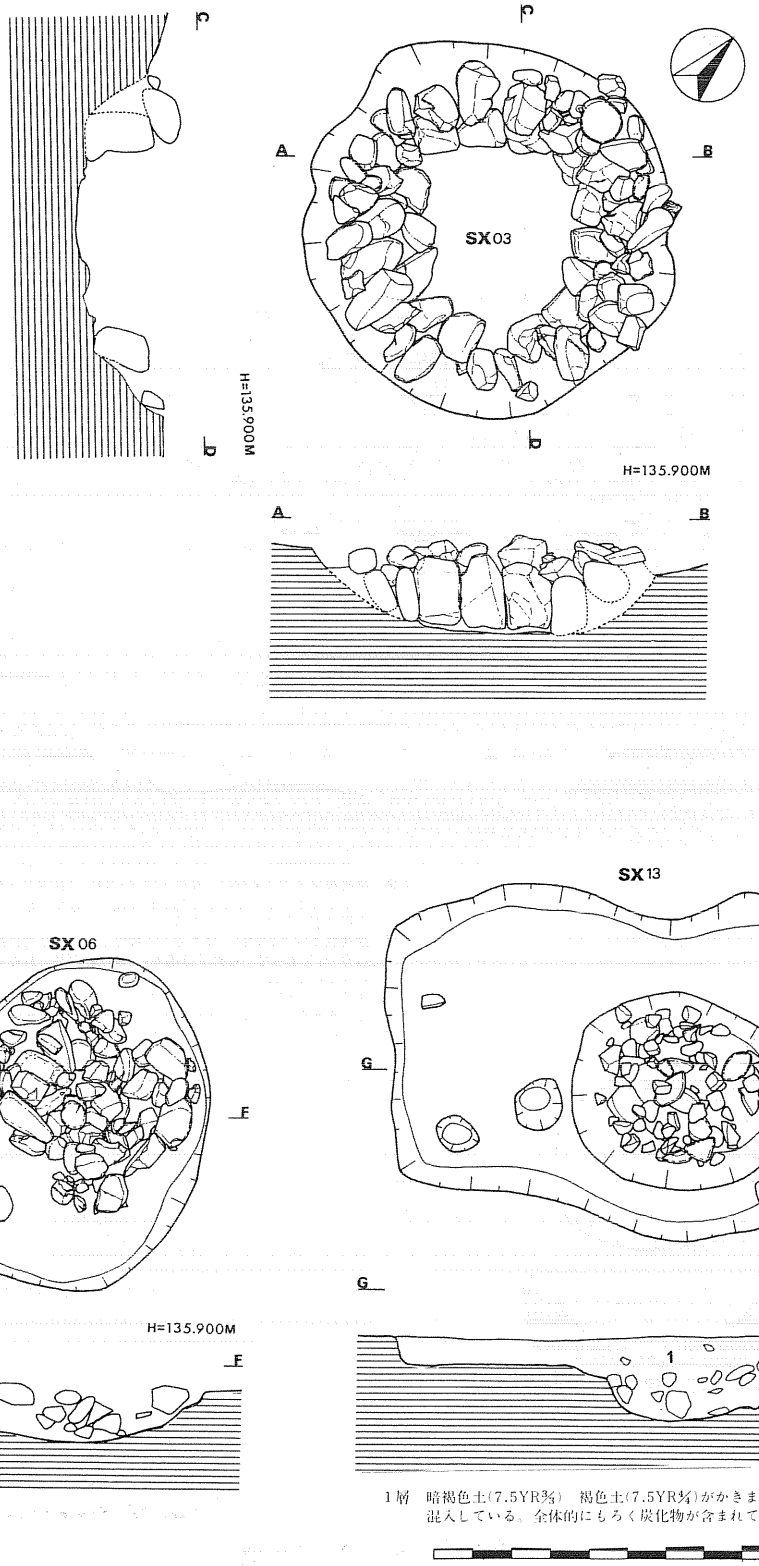
3層　黒褐色土(10YR3/4)＋褐色土(7.5YR5/4)〔砂質でサラサラしている〕黒褐色土に砂質の褐色土が混入している。全体的にしまって粘性がある。又、弱干炭化物が混入し、陶器片が一片出土している。



1層　黒褐色土(10YR3/2)　粒子が細かくサラサラしている。褐色土(10YR5/4)がわずかであるが混入している。少量の炭化物を含む一様性がある。

0　2m

第21図　ＳＫ09・127土壙



1層　暗褐色土(7.5YR3/4)　褐色土(7.5YR4/4)がかきまぜられたように混入している。全体的にもろく炭化物が含まれている。

第22図　ＳＸ03・06・13集石遺構

2．遺構内出土陶磁器

各遺構の埋土中、あるいは柱掘方から出土した陶磁器類を第23図～第31図に一括した。これらの遺物は柱掘方内のものを除いてほとんどがその埋土中からのもので、床面から出土したものはない。以下各遺構別に記述する。

ＳＤ16、140堀跡出土遺物（第23～26図、第30図45、46、図版23、28～31、図版35）

堀跡出土遺物のうち、Ｉ区（ＳＤ16）から出土して図示したのは23、24だけである。７、９、11、14、15、16、17、20、22は堀跡北辺埋土中、堀底面から約20cmの高さのところに黒灰色の灰の分布があり、そこから一括して出土した。

１、２、３、４、５は明白磁染付皿。特に１、２は明青花と言われるものであろう。純白の素地に鮮明な藍色の染付、淡い青味がかった透明感のある乳白色釉が底部を除いて全体を覆う。高台は深いケズリ高台である。見込みには重ね焼きの痕が明瞭に残っている。３、４はややくすんだ素地に浅黄がかった透明感のない灰白色釉が全面にかけられている。高台は低い。３、４内面の染付文様は解網目文とでもいうようなもの。５は素地釉ともに１、２に似ているが、口縁部内側に暗文風の草花文が施されている。

６、７は明白磁染付碗。

８はいわゆる青緑釉の小鉢か。外面は緑釉の下地に萌青色の釉がかかっており、内面は灰橙色を呈する。

９は初期伊万里碗である。

10～17は初期伊万里染付皿。いづれも低い高台で、畳付に砂の付着が見られるものもある。10、12は内面に藍色の釉の染付。13～17は淡い暗緑色がかった色の染付。口縁部下に波状の凹凸が縦に並ぶ。

18は初期伊万里碗。畳付に砂の付着があり、底面に「大明年成」の文字が見える。

19は小型の壺であろう、備前か。肩部と短い口頸部を接合する際の粘土端が内面に波状となって残っている。外面の色調は赤褐色部分と暗青灰色部分とがよくバランスを保っている。

20は唐津系の浅鉢。第38図95とほぼ同じものである。二次的な火熱によるものか内面の一部がうす黒く焦げたようになっている。

21は唐津系の壺。外面と内面口頸部にはやわらかい感じのする乳黄色の釉が厚くかけられている。

22～24は片口鉢。唐津系のものであろうか。幅広の櫛歯工具によるおろし目がある。

ＳＤ111出土遺物（第27図25、図版32）

明青磁鉢。外面の底部を除く部分と内面に乳灰色の釉がかかり、内外面ともに貫乳が主に縦

方向に入っている。

ＳＤ300出土遺物（第27図26、図版32）

青緑釉陶器。器形は碗であろうか。内面に緑釉を下地に青乳色の釉がかかっている。外面は淡い緑釉で青味は少ない。重ね焼きの痕が明瞭である。

ＳＢ100出土遺物（第27図27、28、図版32）

27はＳＢ100掘立柱建物跡のP11埋土中から出土。明白磁染付碗。28はＰ１埋土中出土の片口鉢。内外面とも明灰橙色。胎土の中層とおろし目部分は橙色を呈する。櫛歯工具でのおろし目の１単位は８条か。全体に軟質で地元窯産のものであろうか。

ＳＩ203出土遺物（第27図29、図版32）

珠洲系の片口鉢。口径は約31.5cm。胴部がやや丸味を帯びる器形になるものであろうか。口縁部内面が粘土紐貼付によって肥厚している。内面には櫛歯工具による１単位８～10条のおろし目がていねいに施されている。

ＳＩ11出土遺物（第27図30、31、第28図32～34、図版32、33）

30は内外面に鉄釉をかけた天目碗であろうか。31は初期伊万里瓶か。32は唐津系の皿で、内面見込部ではその下に２本の弧線を対面に描く。33は初期伊万里碗。34は明白磁染付皿と思われる。

ＳＫ125出土遺物（第28図35、図版33）

産地不明。瓶か長頸壺か。外面には細かく流れるような鉄釉、内面には黒っぽい朱と思われる付着物がある。内面に成形痕が残っている。それによると底部を造った後に幅１～３cmの粘土紐を巻き上げ、指頭でおさえ、ロクロ回転による調整を行っているが、胴部上半には指頭痕が明瞭に残っている。

ＳＫ157出土遺物（第28図36、図版33）

越前と思われる中型甕。口縁から肩部にかけ灰釉が流下している。胎土は暗青灰色のいわゆる須恵器色。内面は赤褐色を呈するが、多分外面の胴中央以下も同様の色調と思われる。

ＳＸ211出土遺物（第29図37、図版34）

珠洲系片口鉢の胴部下半破片。頸部で若干薄くなる器形と思われ、胴部でわずかに厚くなる部分から櫛歯工具による１単位12条以上のおろし目が施されている。

ＳＫ154出土遺物（第29図38、図版34）

珠洲系片口鉢の胴部下半破片。１単位７条以上のおろし目が施されている。

ＳＸ06出土遺物（第29図39、41、図版34）

39は唐津系の壺か瓶の破片。内外面には光沢のない暗褐色釉がかけられ、外面には灰釉の流下がある。41は唐津系の皿。

ＳＫ09出土遺物（第29図40、42、第30図43、図版34、35）

40は唐津系の皿。明赤橙色の素地にオリーブがかった灰色の釉がかけられている。削出高台のカブトが明瞭に残っている。42は33図54と同じ形態の明白磁染付皿。43は片口鉢。唐津系のものであろうか。底面、内面は赤褐色、外面は暗青灰色を呈する。内面の特に底面はおろし目がすりへってツルツルしており使用の激しかったことを示している。底部は回転糸切離し、かたくて、よくしまり焼成良好。

ＳＫ112出土遺物（第30図44、図版35）

片口鉢。地元窯産であろうか。外面は浅黄橙色、内面はにぶい橙色を呈し、軟質。胎土に石英等の砂粒を多く含む。おろし目は１単位８条の櫛歯工具による。28、46などと同類である。

ＳＸ160出土遺物（第30図45、46、図版35）

45、46は片口鉢。45は唐津系のものであろうか。46は地元窯の産か。丸味を持つ口縁部直下からおろし目が施されている。

ＳＫ101出土遺物（第30図44、図版35）

地元窯のものであろうか。大甕の胴部破片。内外面ともににぶい橙色。胎土中央部は火熱がとどかなかったか青灰色を呈する。外面は粗いヘラケズリの後植物性繊維束のようなものでナデている。やや軟質。

ＳＫ110出土遺物（第31図48、図版36）

越前であろうか。甕の底部。内外面ともにぶい赤褐色で、胎土は暗青灰色。外面胴部下半はヘラ状工具でていねいにおさえられている。内面底部ではいわゆる灰かぶりの状況が見られる。全体にかたく、よくしまっている。

ＳＫ118出土遺物（第31図49、図版36）

唐津系の高杯であろうか。外面はにぶく、黒い。鉄釉か。杯部内面にはやわらかい感じの乳白色釉がかけられている。

３．その他の遺構外出土陶磁器

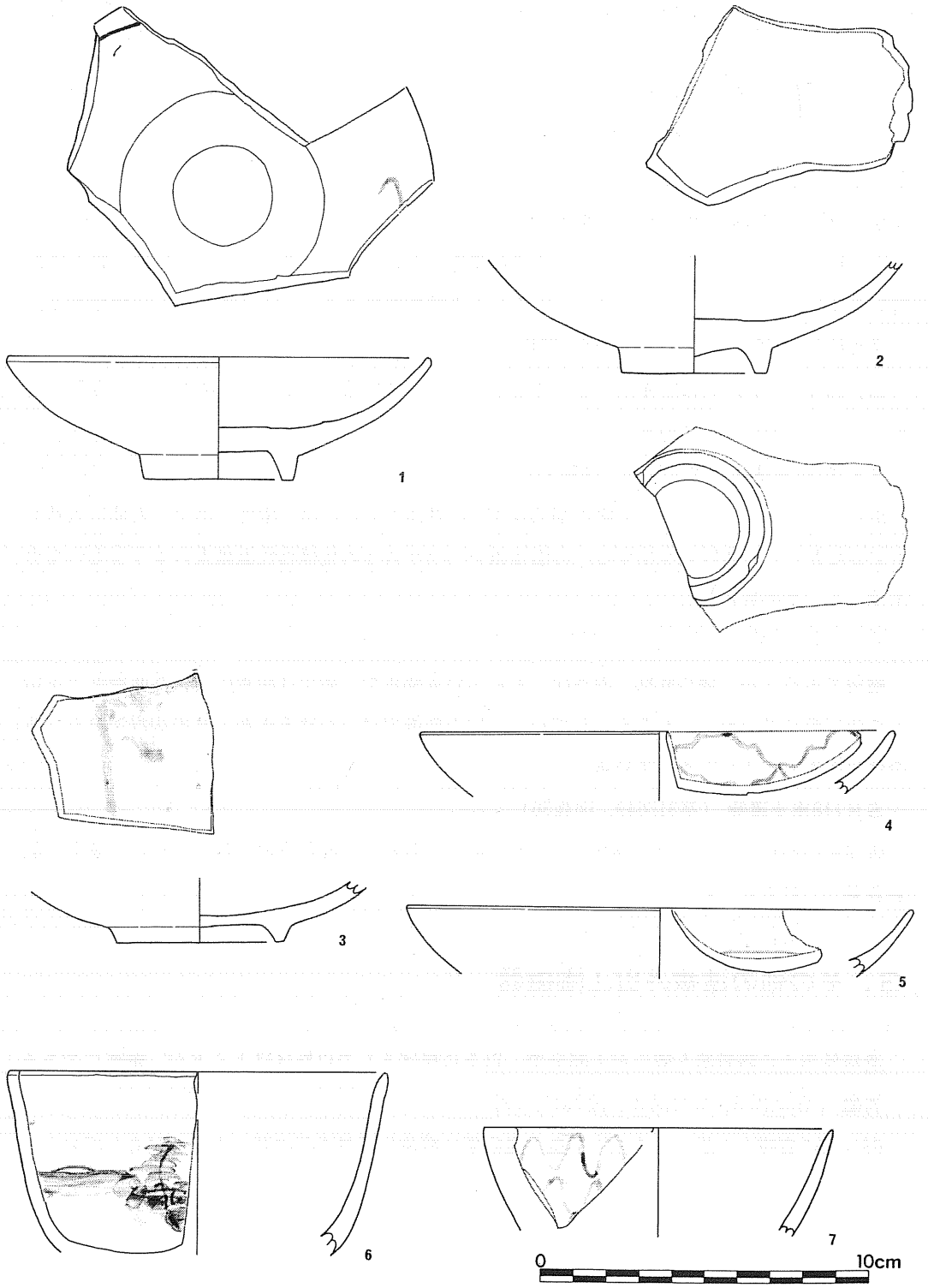
遺構外出土の陶磁器も破片が大部分で、以下に掲げるもの以外はほとんどが、細破片である。

青磁（第32図50、第34図68、図版37、39）

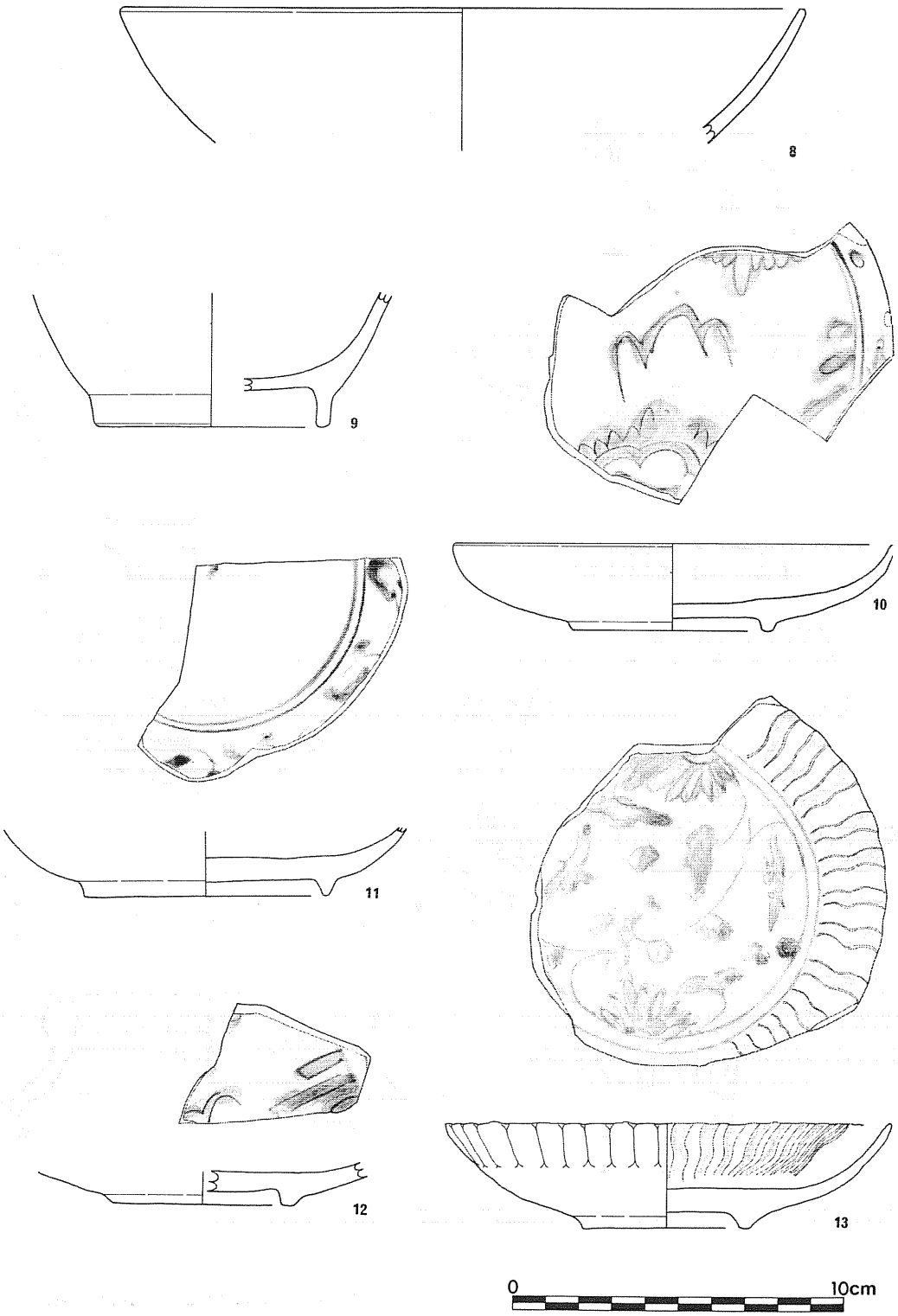
68は明の青磁かと思われるオロシ皿。皿底面に櫛歯状工具を斜に刺しオロシ目としている。オロシ目は数列が同一方向からつき刺されて並び、隣りにはそれが逆方向から施されている。

50は内外面とも透明感のある淡緑青色の釉。内面底に暗文風の文様がある。碗になるのであろうか。

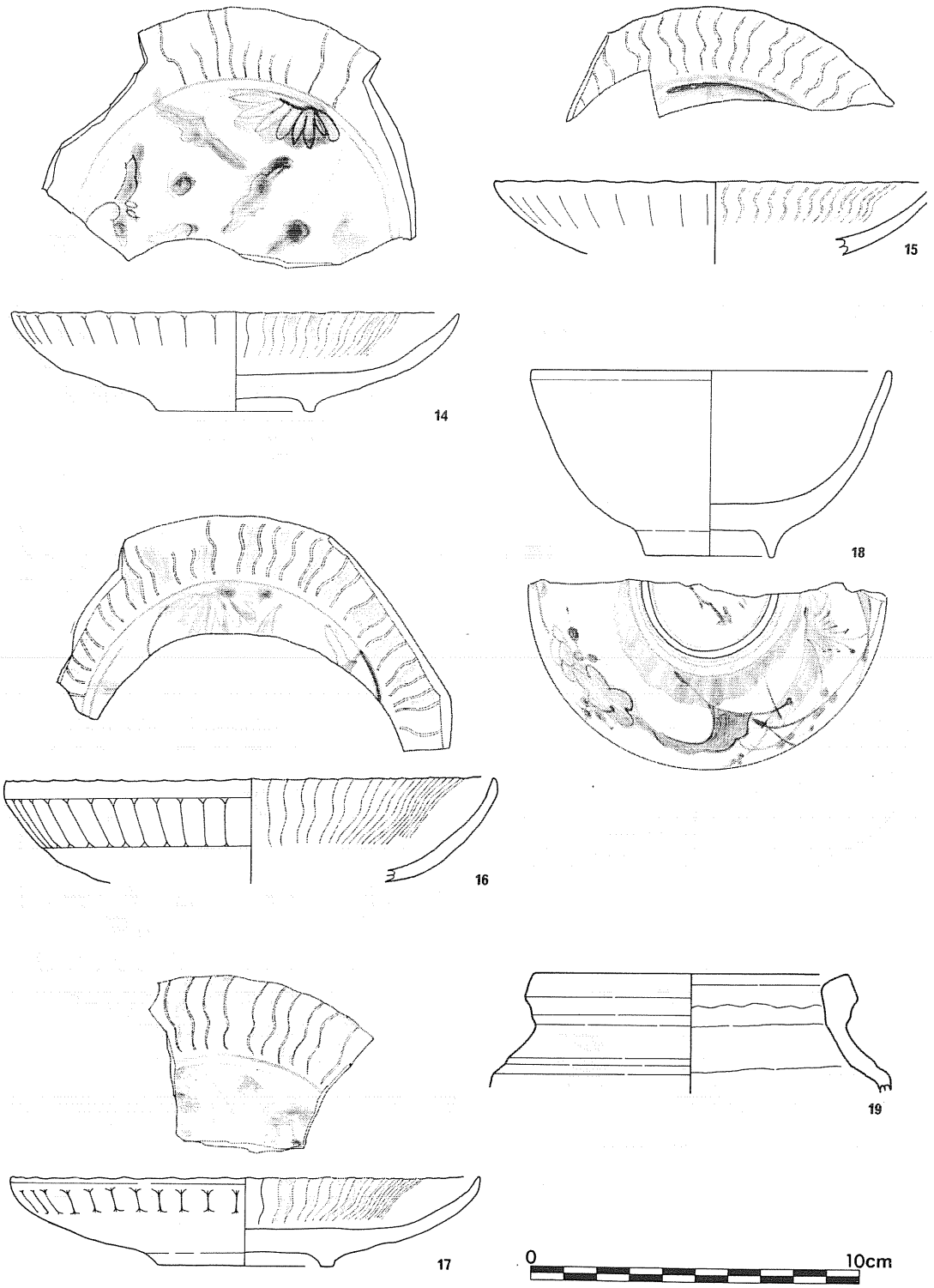
天目（第32図51、52、図版37）



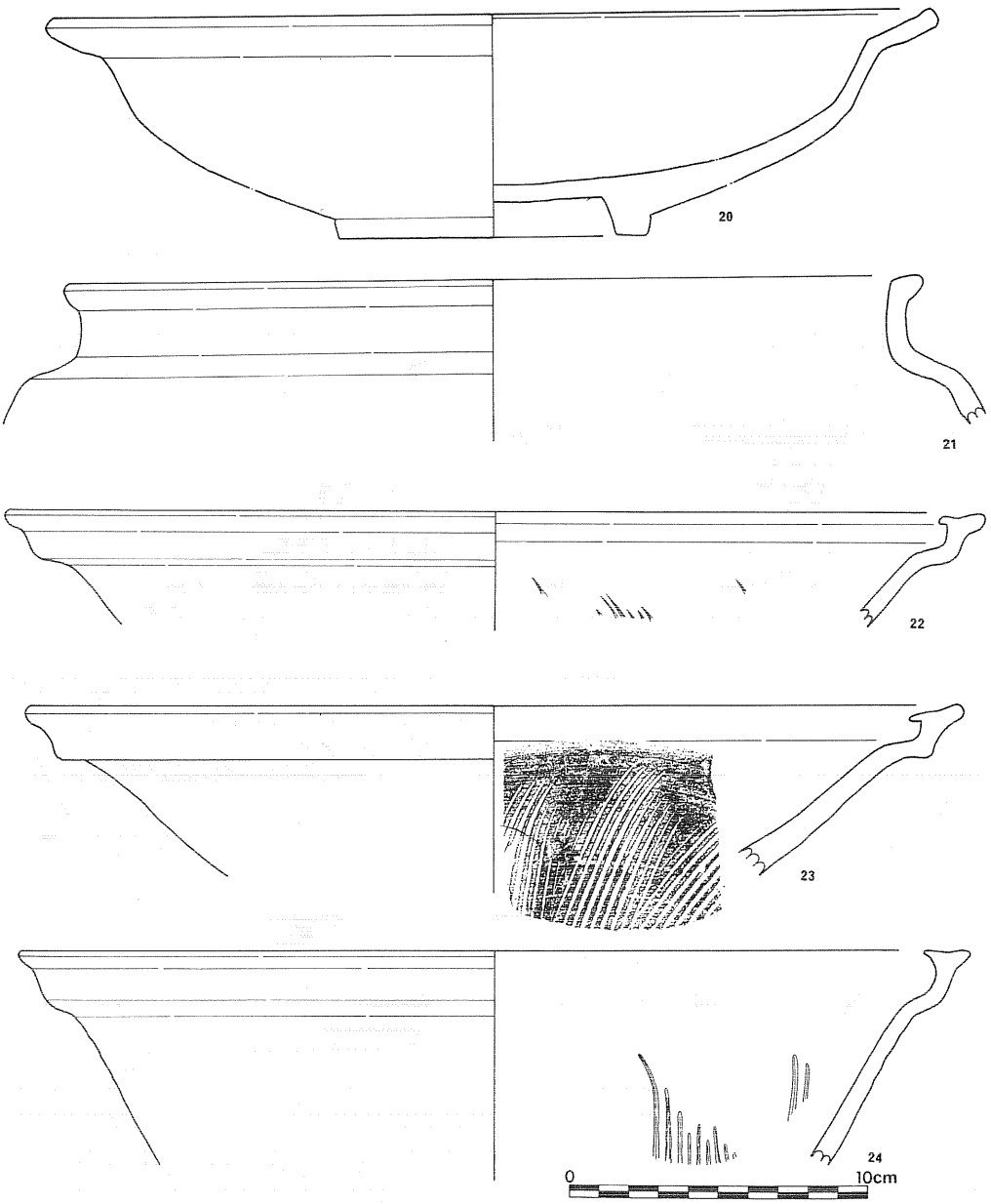
第23図　遺構内出土陶磁器(1)



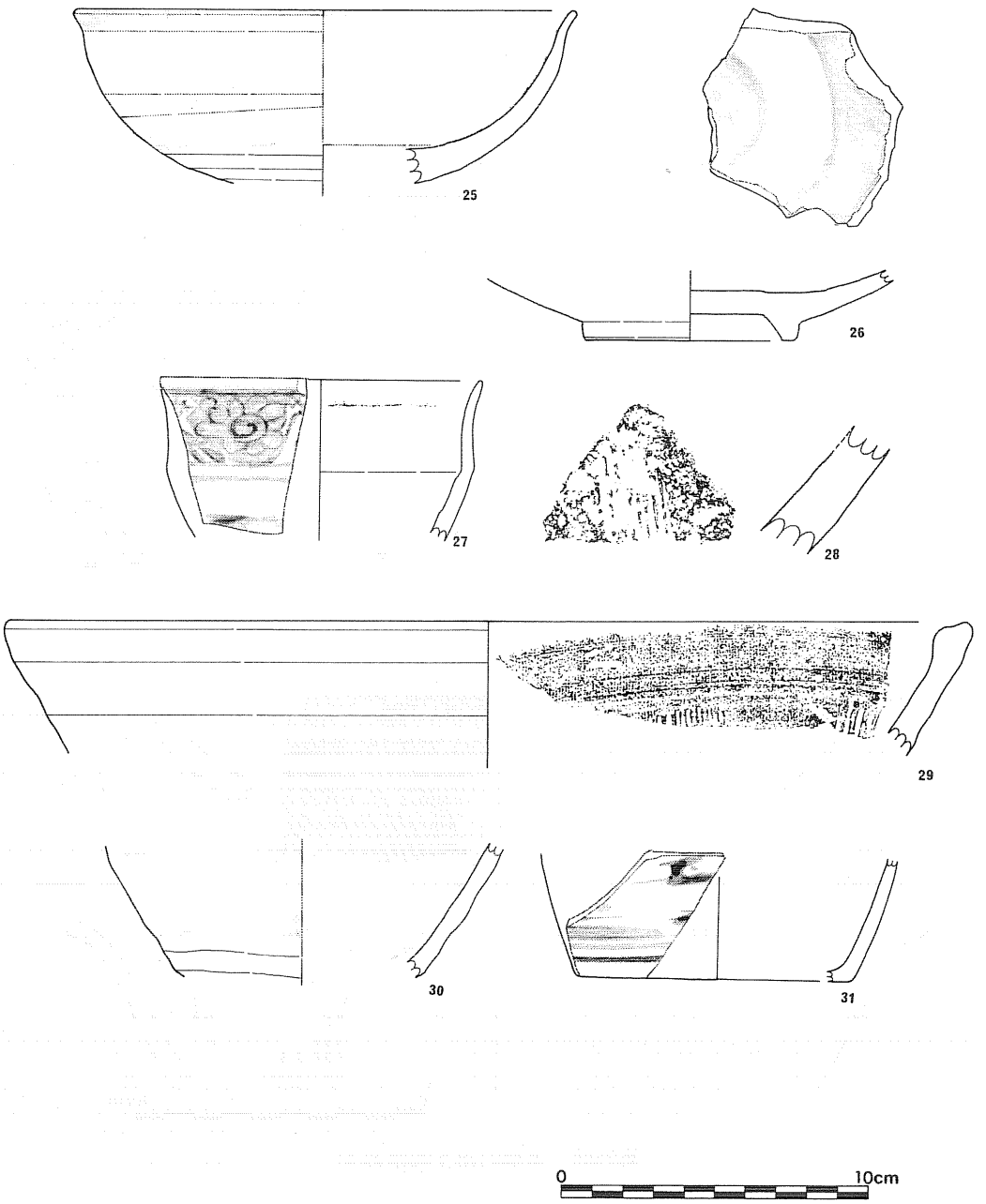
第24図　遺構内出土陶磁器　(2)



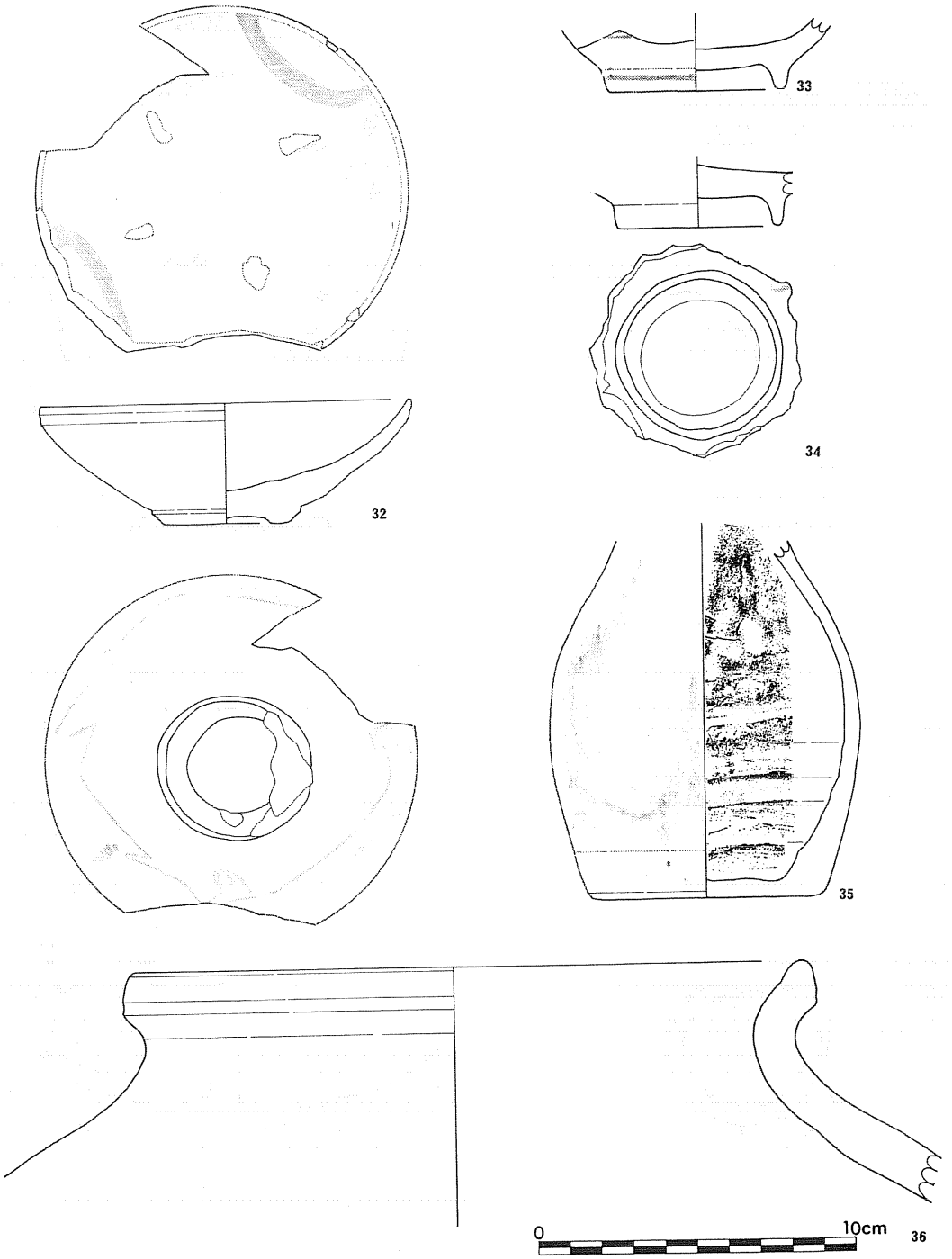
第25図　遺構内出土陶磁器(3)



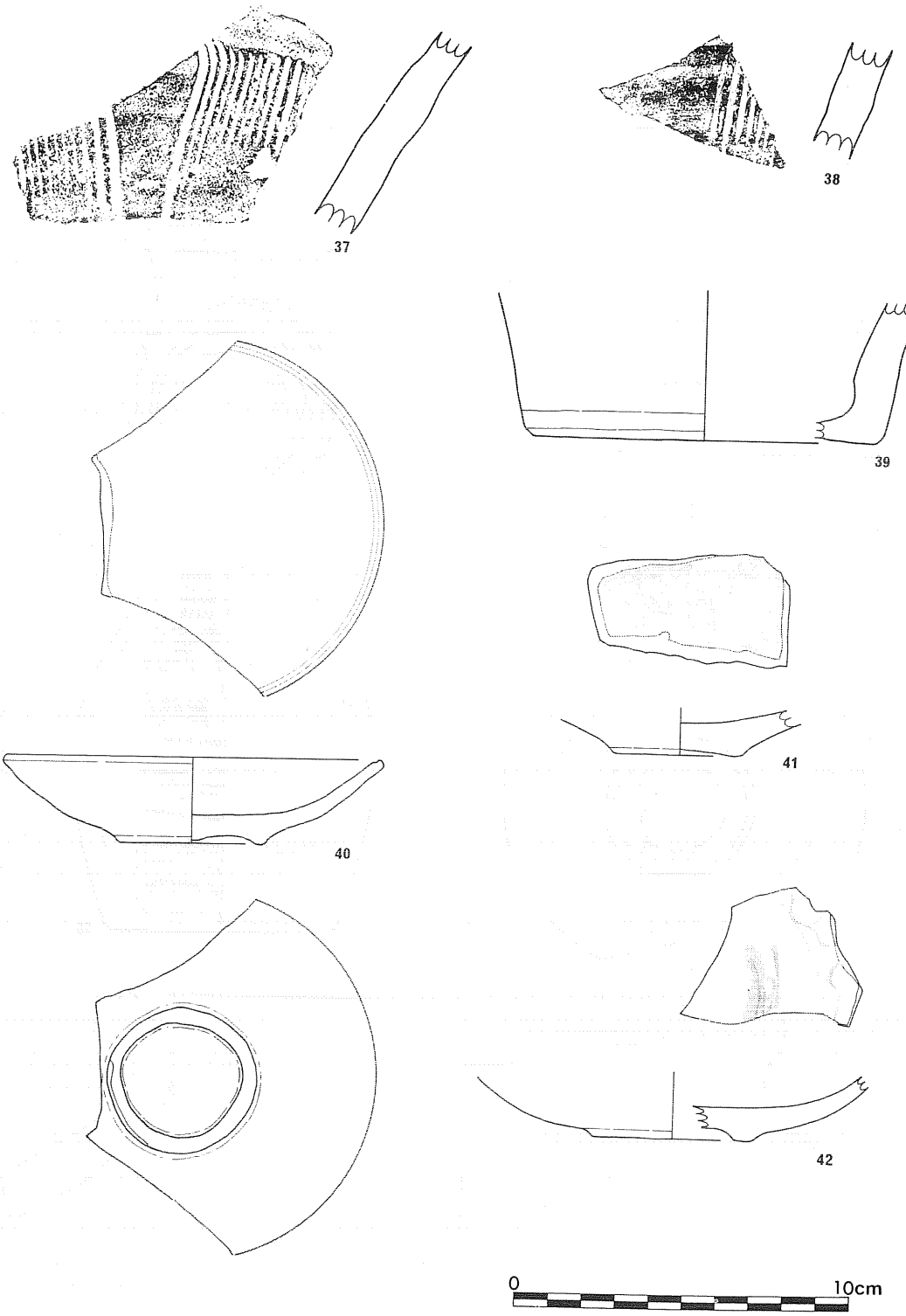
第26図　遺構内出土陶磁器(4)



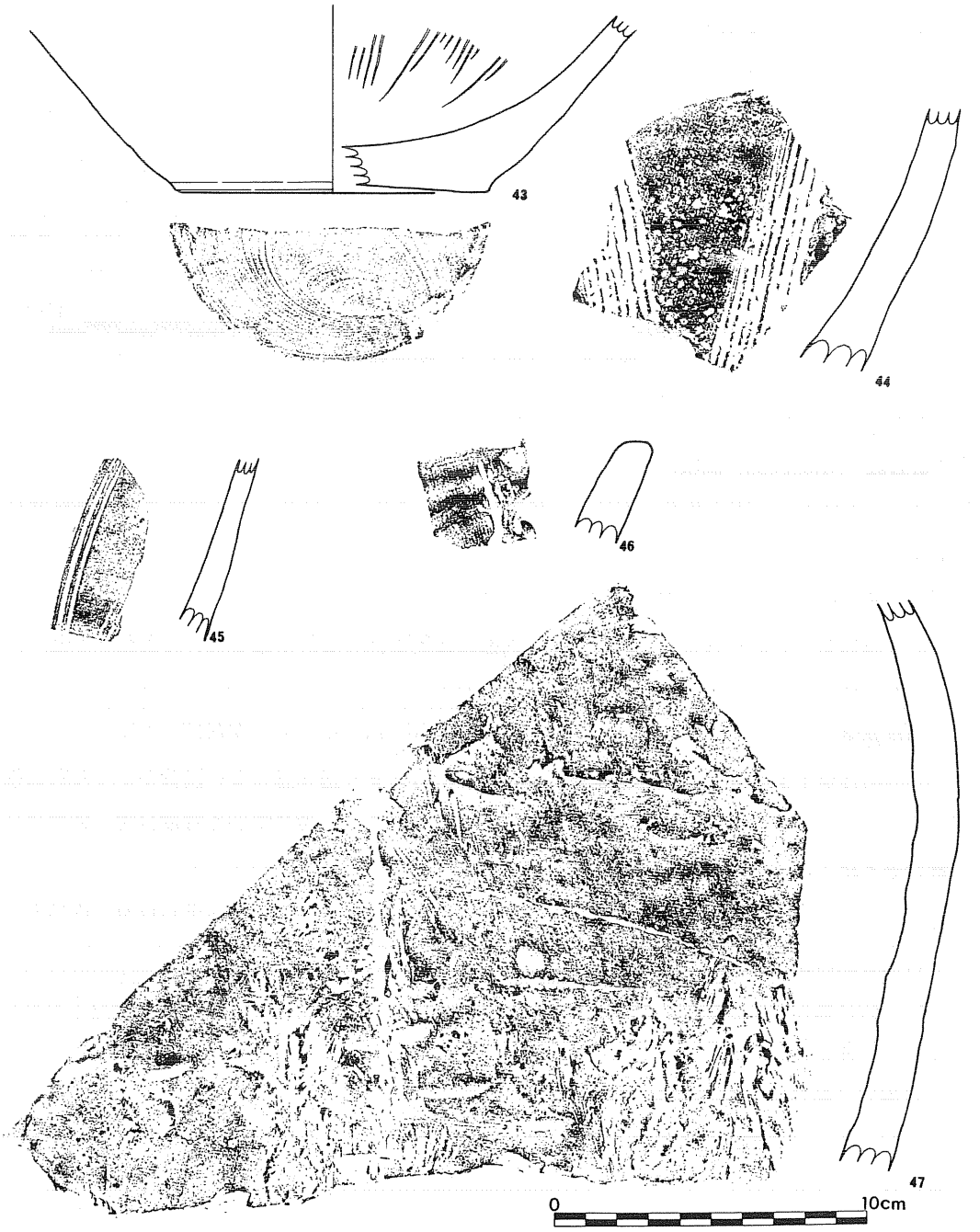
第27図　遺構内出土陶磁器(5)



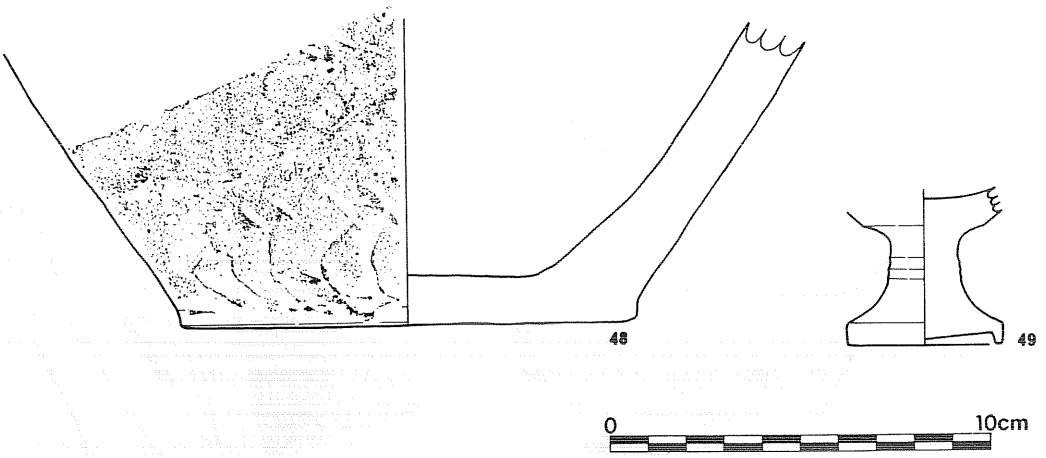
第28図　遺構内出土陶磁器(6)



第29図　遺構内出土陶磁器(7)



第30図　遺構内出土陶磁器(8)



第31図　遺構内出土陶磁器(9)

内外面ともに黒い天目釉。51は碗、52は瓶の口縁部であろうか。

青緑釉（第32図53、図版37）

碗か。内外面とも灰白色釉の下地に、外面は全面、内面は口縁部にのみ緑味の強い青緑釉が施されている。

南方系染付（第32図54、図版37）

皿。内外面ともにやわらかい乳白色釉。内面には焦茶色の染付が施され、外面頸下は縦に凹凸になっている。

明白磁染付（第32図55、56、57、58、第33図59、60、61、62、63、図版37、38）

55～61は皿であろう。62、63は碗か、55、56、57はあまり透明感のない浅黄がかった灰白色釉が全面にかけられている。内面胴部にはくすんだ灰緑色で、波状文的な解網目文、底面には草花文を描く。

58～61は染付の絵柄が前者とほぼ同じ。下地になる釉がやや青味のある乳白色釉。内外面ともに部分的に淡紅色の部分があり、畳付にわずかに砂が付着している。

62、63は底部のみの破片。胎土、釉などは第23図１、２に同じ、高台はケズリ高台であるが皿に比べ非常に高い。

黄瀬戸（輪花皿）（第33図64、図版38）

底部を除いて淡黄緑色の灰釉がやわらかくかけられている。内面の胴部立ち上がり部に輪花様のケズリが施されている。

瀬戸系灰釉陶器（第33図65、66、図版38）

65は碗か。66は皿。65は外面と内面のわずか、66は内外面ともに光沢のある灰釉がかけられている。両者とも細かい貫乳が入っている。

志野灰釉皿（第33図67、図版38）

内外面ともにあまり光沢のない灰釉がかけられている。

唐津系陶器（第34図69～74、第35図75～80、 第38図95、97、図版39、40、41）

69、70、71、73、76、77、78、79、80は皿。低いケズリ高台からやや内向気味に立ち上がり、口縁部で「く」の字形に開き口唇部で丸くおさめられ、口縁内側に一条の沈線をめぐらす器形の皿である。ケズリ高台部分にはいわゆるカブトやチリメン肌がよく残っている。見込み部には重ね焼き道具痕が77のように円形に残るものと、69、70、71、76、78のように３～４つの点となって残るものとがある。内外面にかけられた釉は71、77、79、80が淡緑色、69、70、73、78が灰白色、76が乳白色である。76は高台内面までも釉がかかっている。79、80はおろし皿。おろし目はヘラ状工具の先端を斜位にして施したものである。

75は碗。内外面に青味がかった乳白色釉がかけられている。74、76ともに磁器であるかもしれない。

72、74は小鉢のようなものか、74の釉は75に酷似している。

95は大型の高台付浅鉢。内面には乳白色釉で波状文が描かれている。これは幅約５cmの櫛歯状を呈した工具を胴部と底面にそれぞれ一周させたものである。

97は壺か瓶になるものであろう。内面にはアテ道具痕がよく残っている。アテ道具は約 3.5×2.5cmで外面に円形のイボイボ状の凸起が、６～８個で３～４段ついたもののようである。このため胴部内側は平坦面が横に全体として円形を描くように連続している。胴部外面は刷毛状工具による調整が行われている。

初期伊万里（第36図81～86、第37図87～94、図版41、42）

81はいわゆる伊万里青磁と呼ばれる碗。外面には青味がかった淡緑釉が、口唇部のみ茶色の釉がかけられている。内面には花蝶の染付がある。花は２対の蘭であろうか。高台内の文字は「福」。

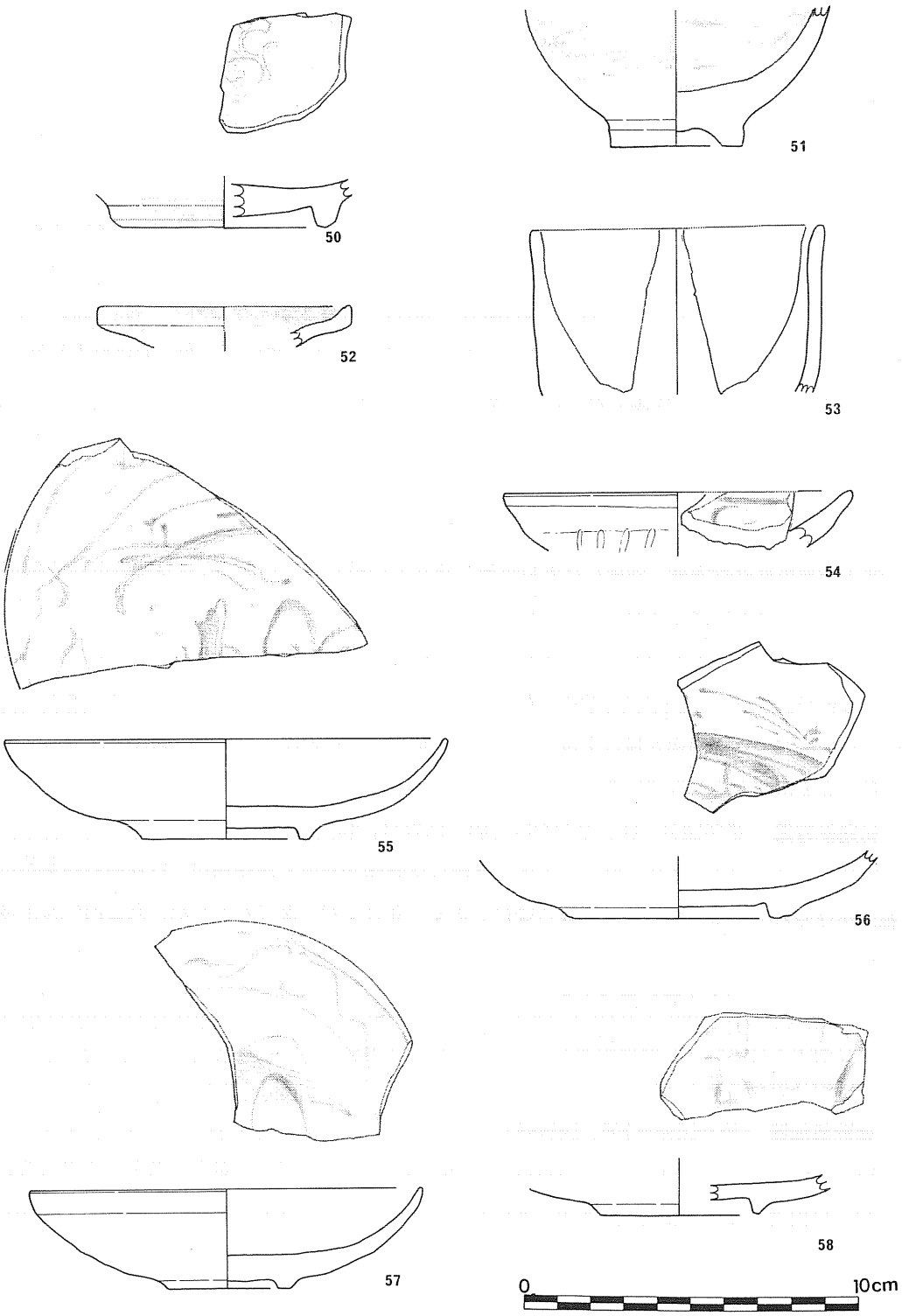
82は第24図10と全く同じ皿である。

84～92までは碗。90、91は胴部から口唇部に直向する。

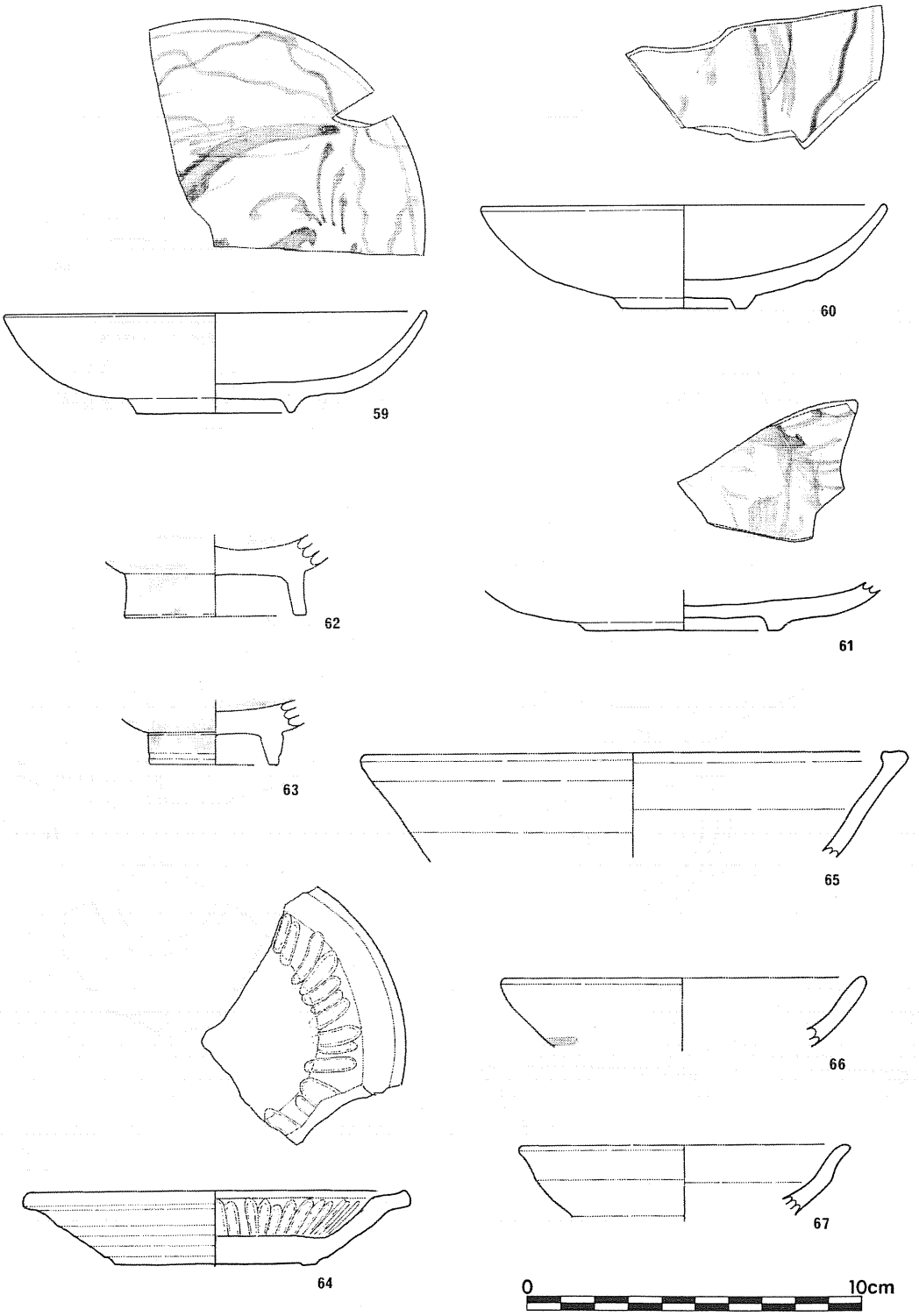
93、94は徳利であろう。

珠洲系陶器（第39図98～105、図版44）

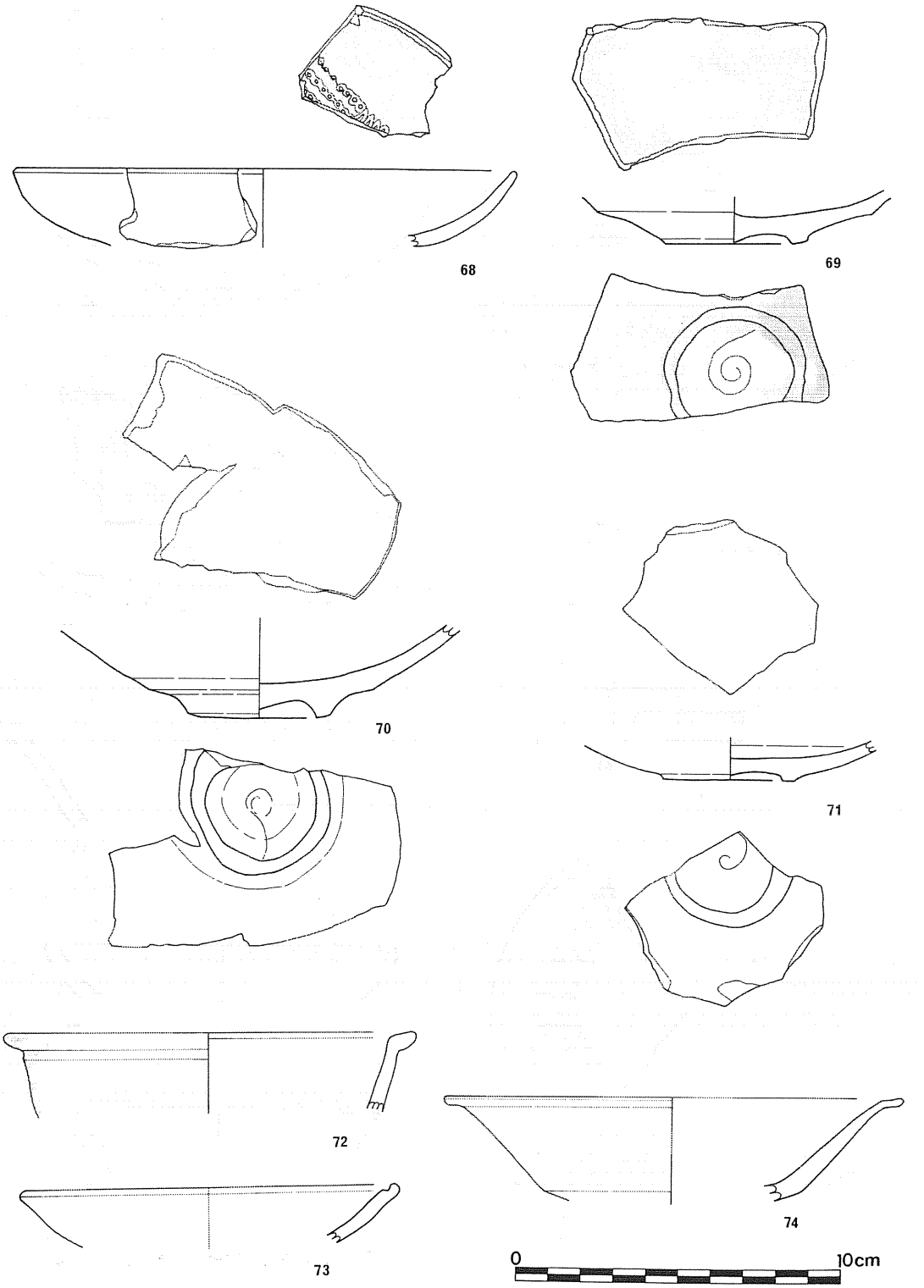
98、100、101は大畑窯産と考えられる片口鉢である。98、101の口縁部は端部をつまんでわずかに内湾させ薄く仕上げており、その結果、外面にゆるい稜を形成している。100の口縁部は98. 101と同様端部をつまみ内湾させているが、その度合が強く、結果として端部内面に突出しており、口縁端は水平になっている。98にわずかにおろし目が見える。色調は98の外面と胎土、101の胎土が灰赤色、98内面と101の内外面、100の外面と胎土が青灰色、100の内面が黒色



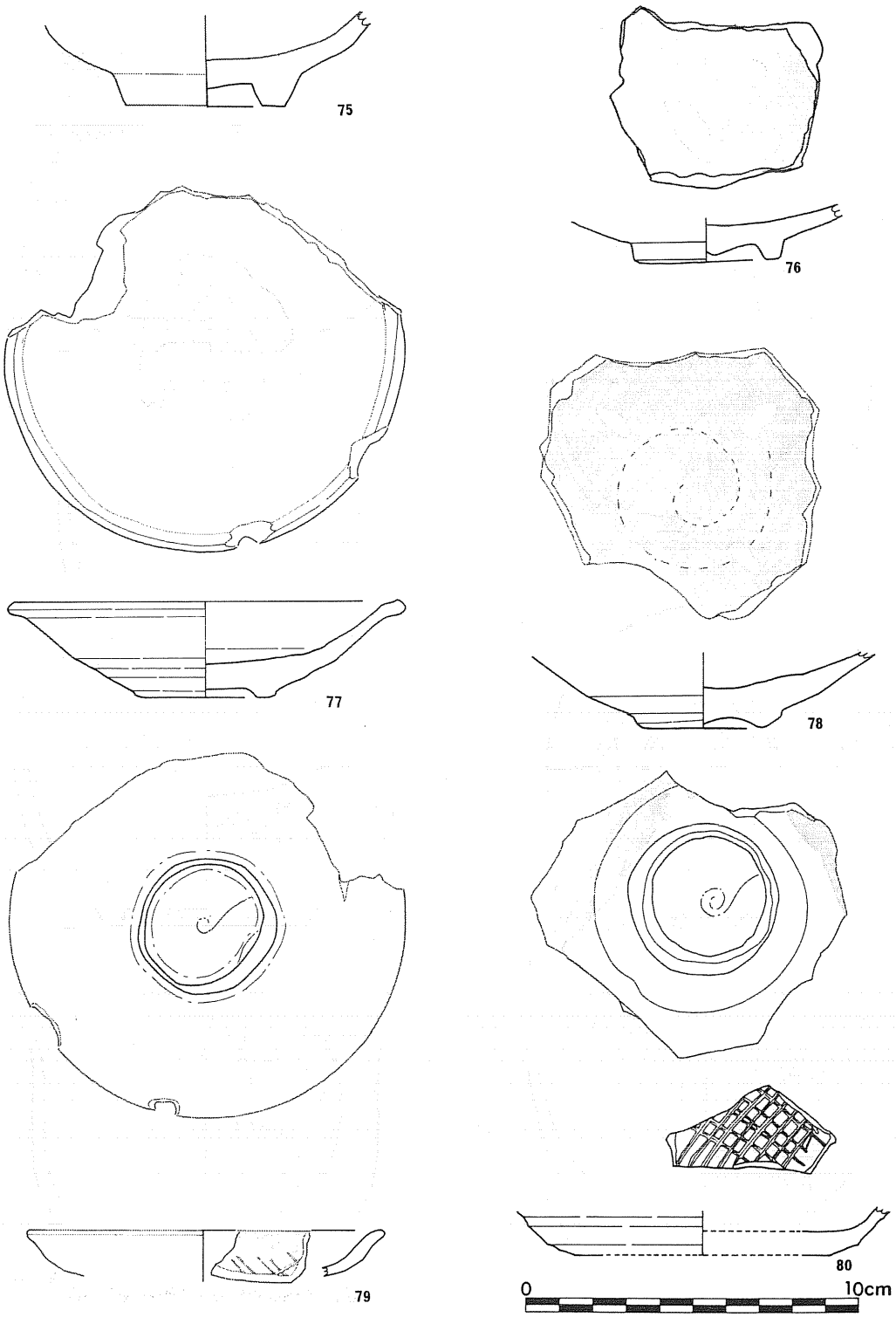
第32図　その他の出土陶磁器(1)



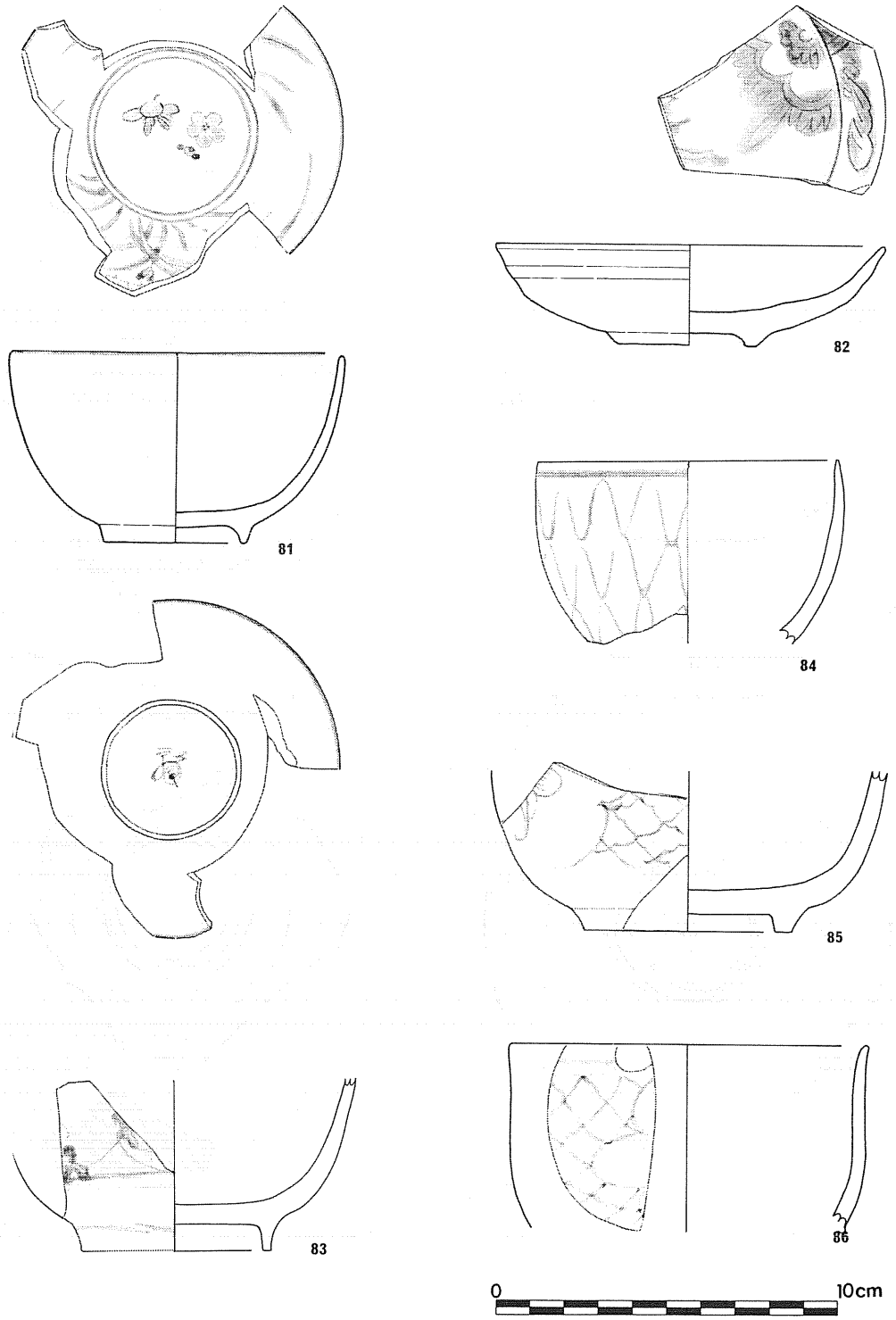
第33図　その他の出土陶磁器(2)



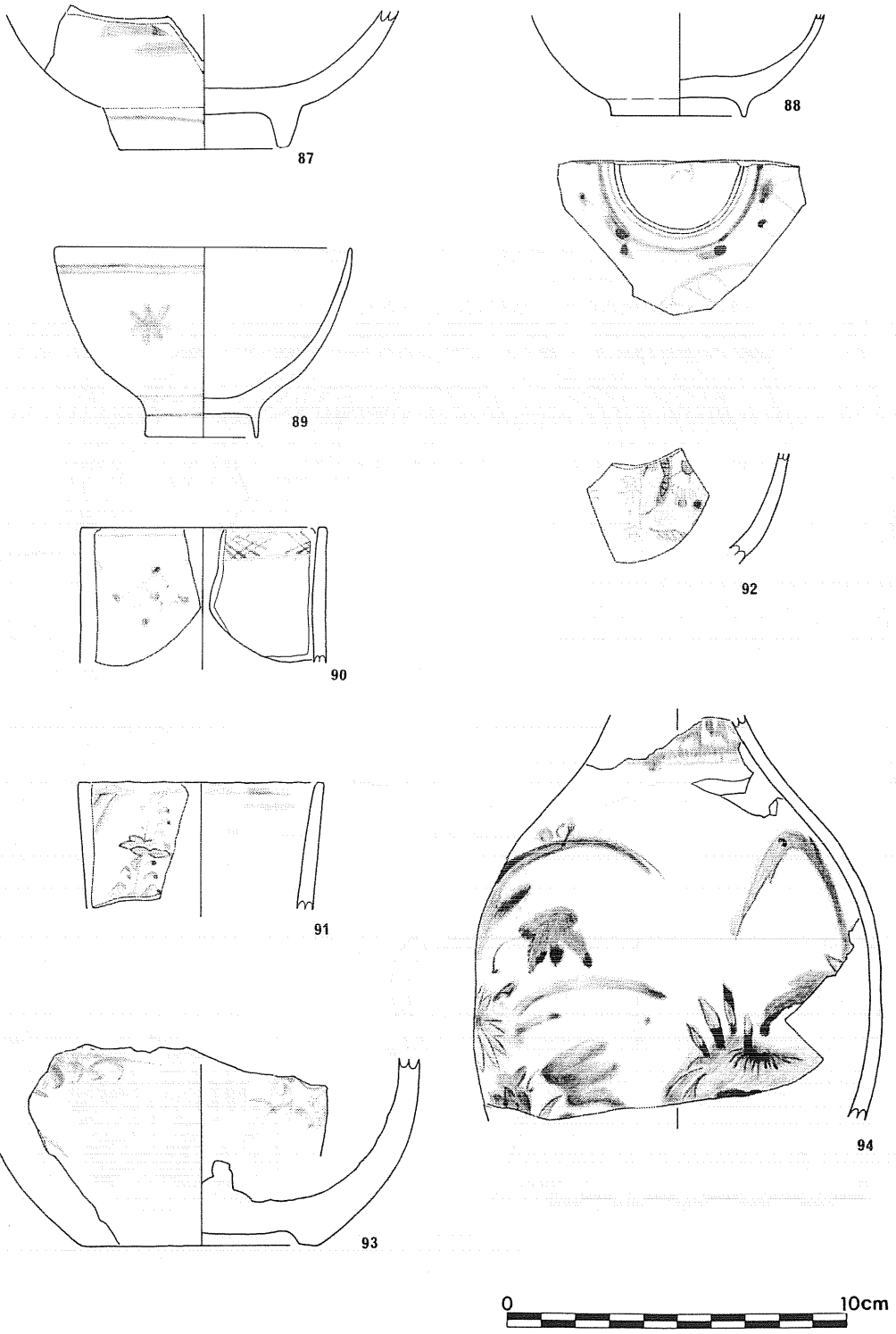
第34図　その他の出土陶磁器(3)



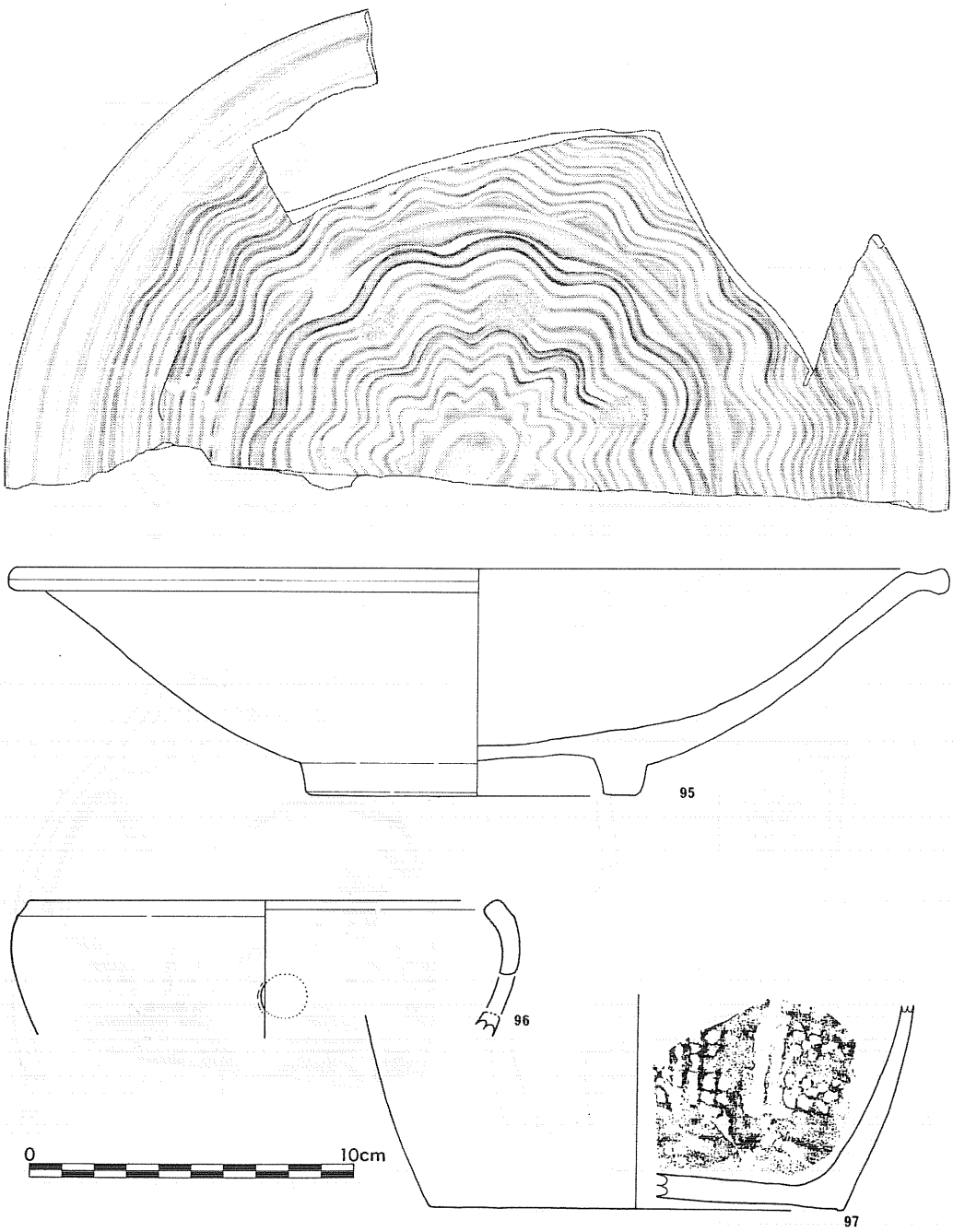
第35図　その他の出土陶磁器(4)



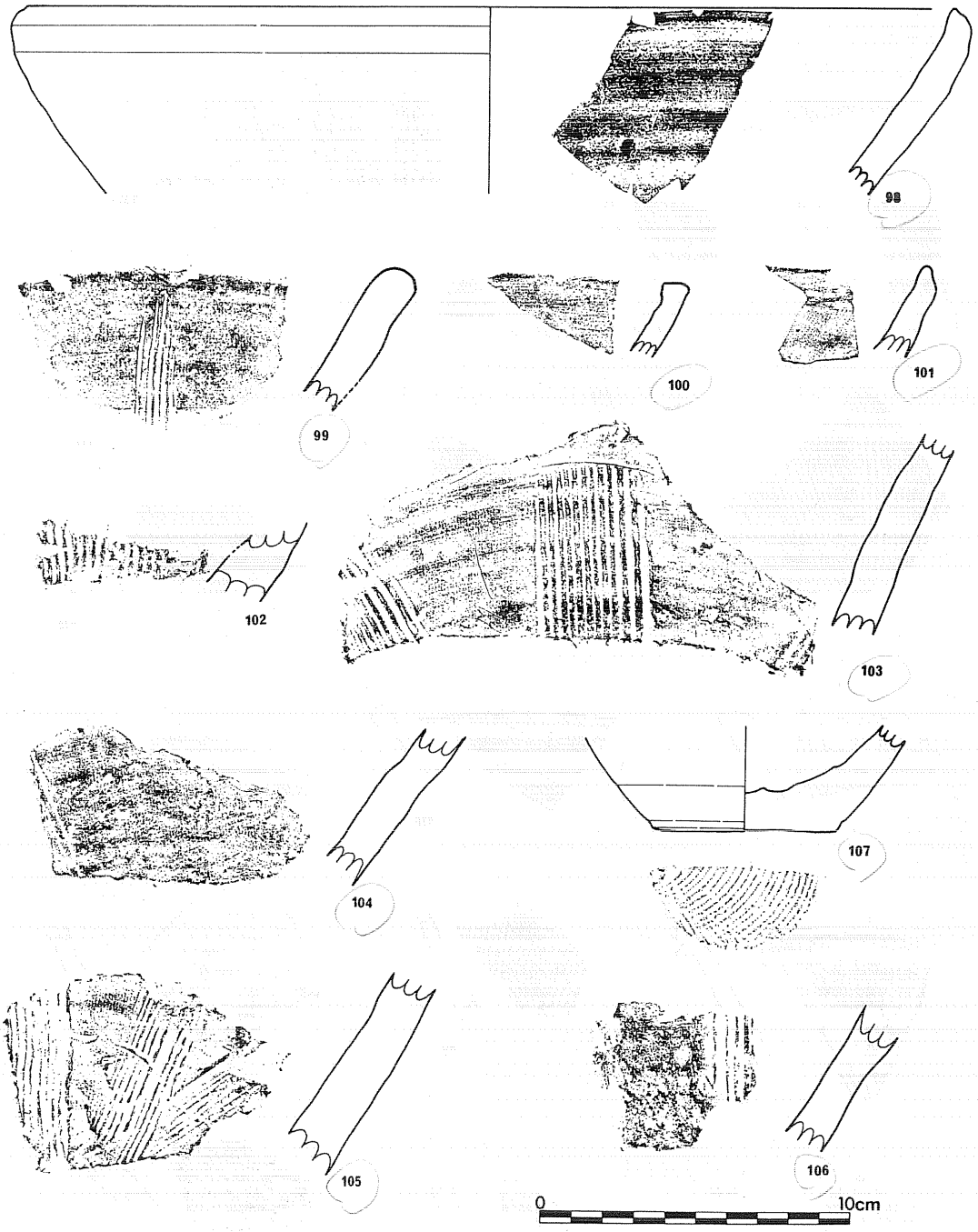
第36図　その他の出土陶磁器(5)



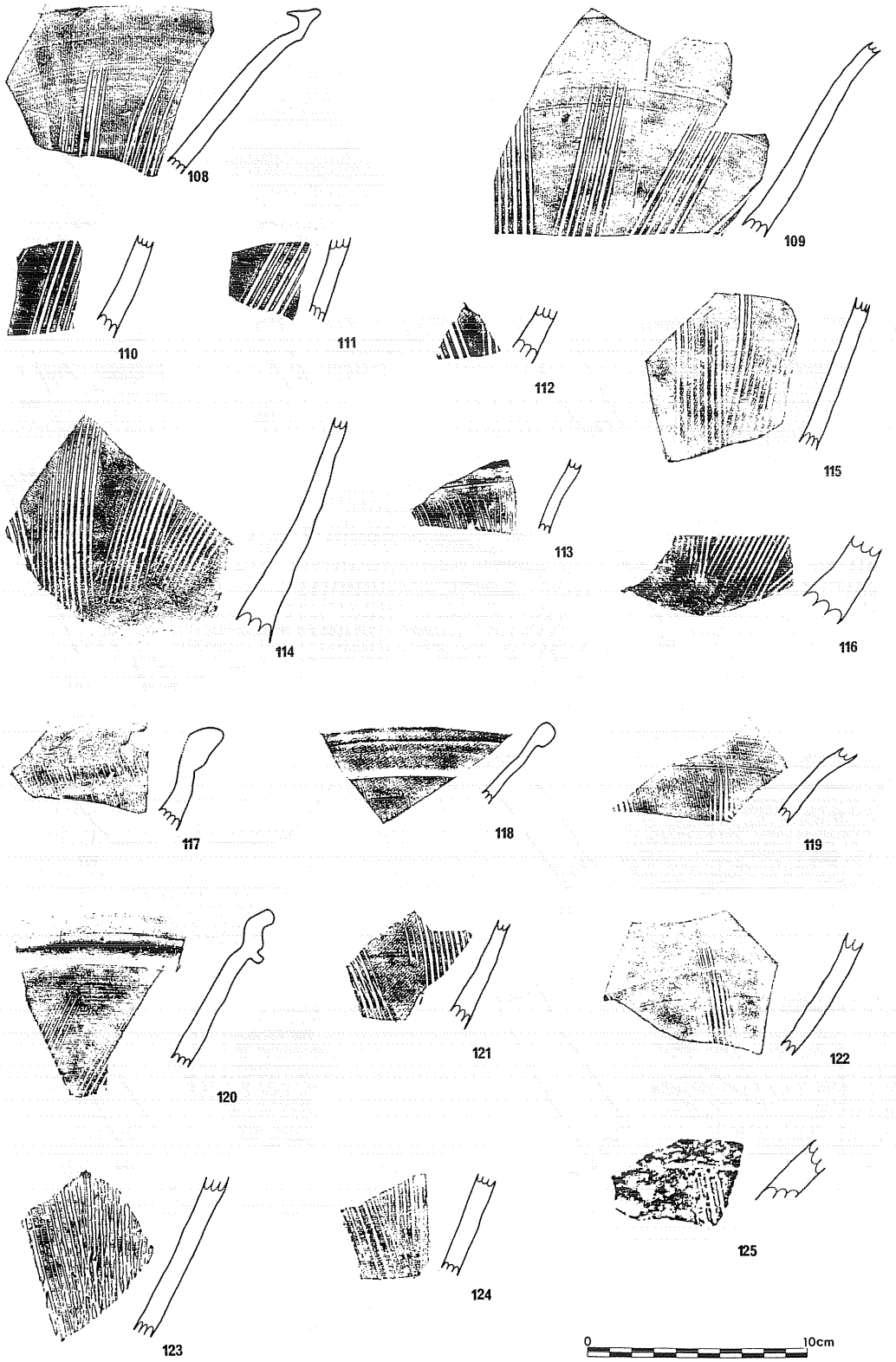
第37図　その他の出土陶磁器(6)



第38図　その他の出土陶磁器(7)



第39図　その他の出土陶磁器(8)



第40図　その他の出土陶磁器(9)

である。107も大畑窯産の壺底部。底部切離しは回転糸切り。内外面青灰色、胎土灰赤色を呈する。

99、102～105はいわゆる珠洲系片口鉢。106は明橙色で他の地元窯産か。

その他の片口鉢（第40図108～125、図版45）

108～116、118～122は唐津系のものであろうか。108、109、114、116、119、120～122は胎土、内外面とも明黄橙～暗黄橙色を呈し、この他は暗褐色～暗青灰色を呈する。114が若干軟質気味なのを除いてかたく焼成良好である。117、118は折り返し口縁。

113、117、123、124は内面のおろし目部分にも刷毛使用による釉がかけられている。これらは江戸中期以降のものであろうか。

おろし目は櫛歯工具によって施されている。その一単位の条は以下のとおりである。108、109 111は6条。119は6条以上。115、122は8条。120は8条以上。114は11条。118、121は11条以上。113は13条以上。117は19条以上である。また、123、124は一単位同志の間隔がなく、重複している。

4. 出土石製品（第41、42、43、44、45図、図版46、47）

遺構内、遺構外出土の硯、砥石、円盤状石製品を一括して石製品とした。

1） 硯（第41図1、図版46）

SD140堀跡埋土中から出土した、泥岩を原材とする細身の硯。陸の中央部分が磨耗してへこみ、海の前部に墨痕が残る。製作時の擦痕であろうか、剝落した縁を除いて全面に極く浅い条線が見える。陸部外縁の高さは3.5cm。

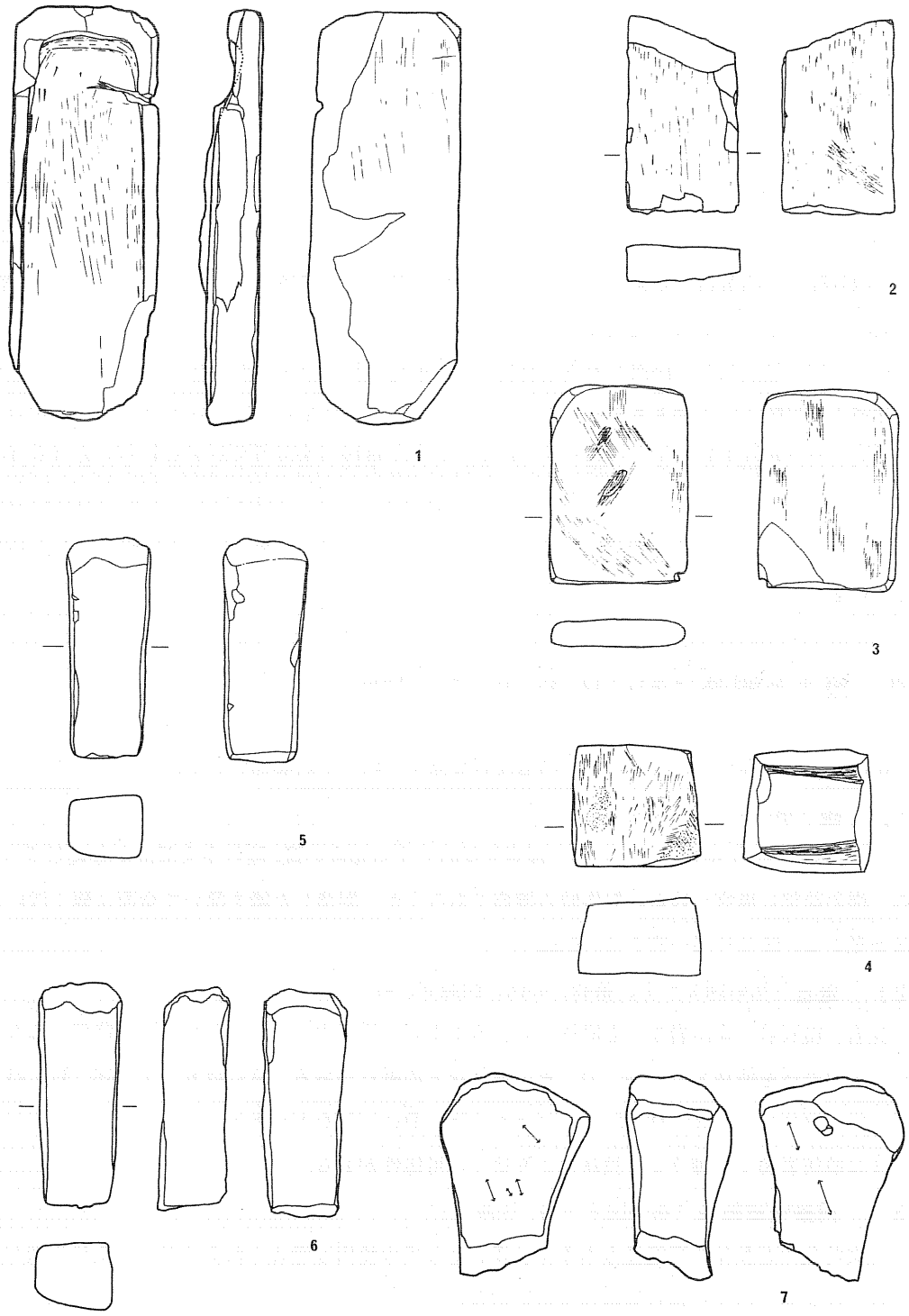
2） 砥石（第41図2～7、第42、43図、図版46、47）

泥岩、凝灰岩、安山岩などを原材とし、A：4面を使用するもの、B：2面を使用するもの C：1面だけを使用するもの、D：その他、などの砥石がある。Aには6、7、16、17、21、22、23、Bには2、3、19、24、Cには4、18、Dには25などがある。

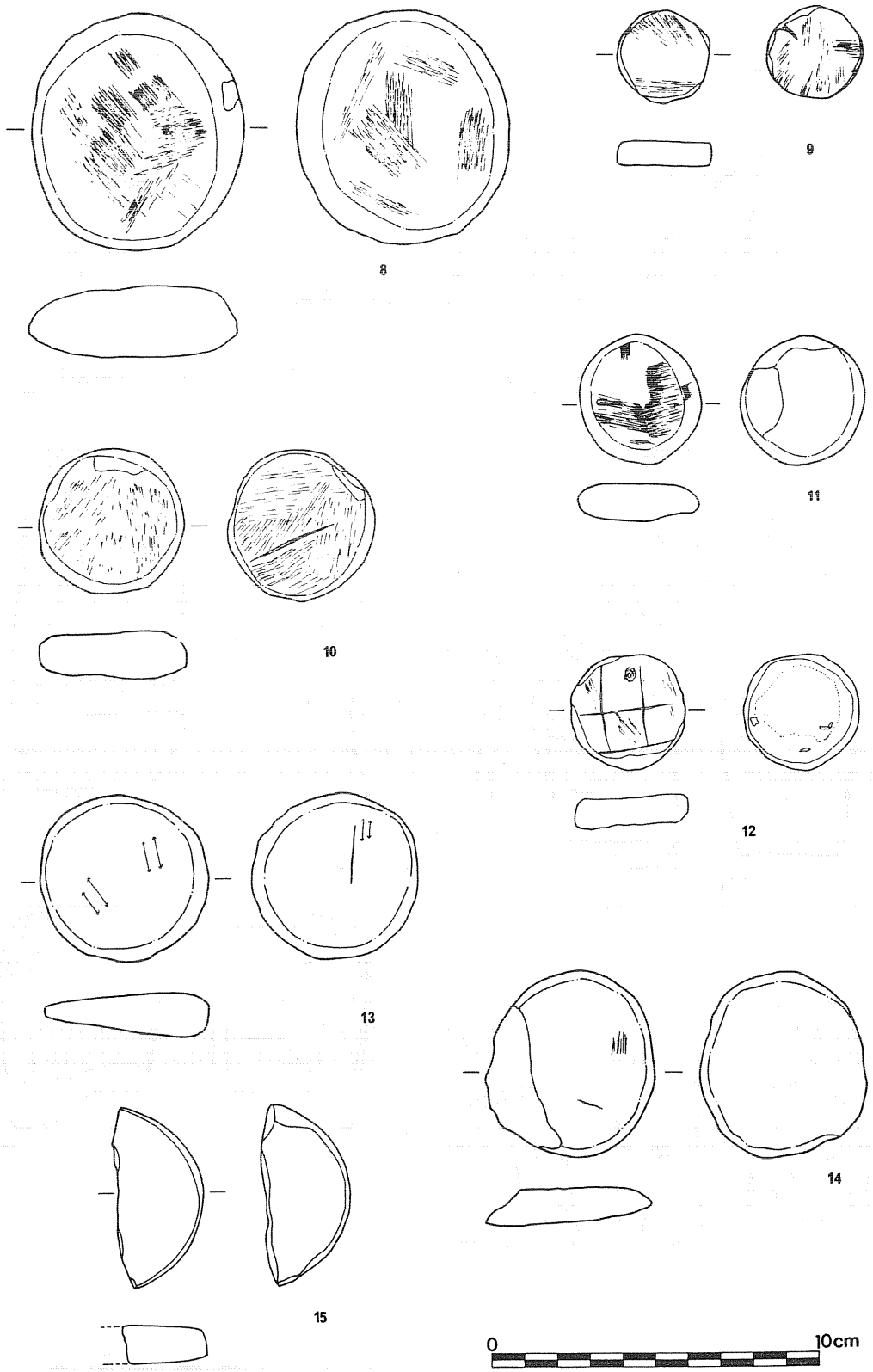
4は凝灰岩製で、擦り切り技法により造った可能性がある。

3） 円盤状石製品（第45図8～14、図版47）

縄文時代の石製品の可能性もあるが、砥石としての使用も考えられるので、ここに掲載した。それぞれ2面、あるいは外周縁に擦痕がある。



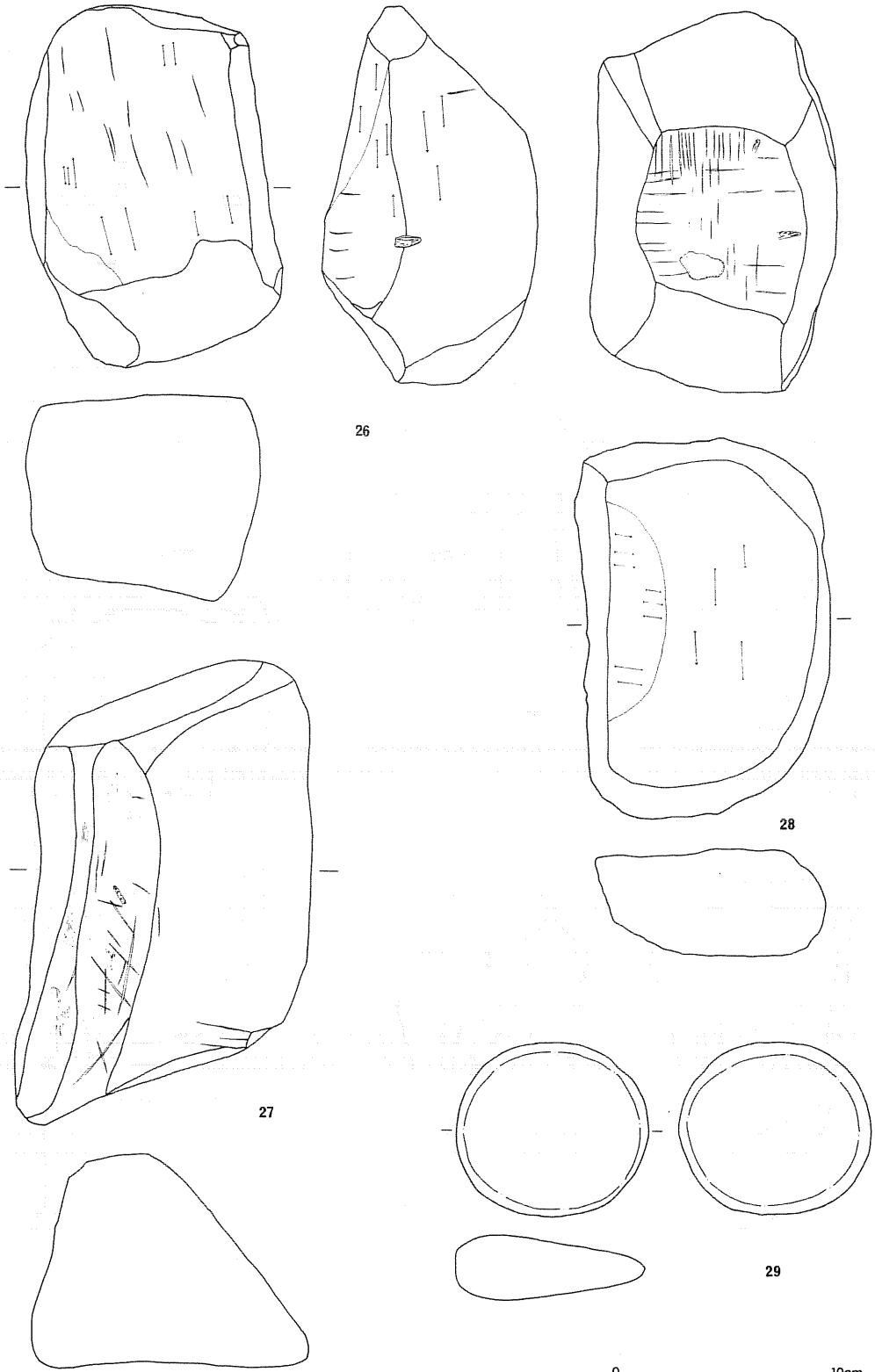
第41図　石製品(1)



第42図　石製品(2)

第43図　石製品(3)

第44図　石製品(4)



第45図　石製品(5)

第2節　縄文時代の遺物

縄文時代の土器、石器が地山直上などから若干出土している。

1）　縄文土器（第46図1～11、図版48）

1は前期初頭の深鉢形土器。直向する胴部から口縁部に至り、こころもち外反する。平口縁であるが、部分的に粘土紐貼り付けによる凸帯が付され、上方から半截した竹管様のものの先端部で刺突が加えられている。器外面には原体ＬＲ縄文が横位に回転施文され、内面にも縄文が施されている。胎土、器内外面とも黒色を呈し、胎土中には繊維混入であろうか気泡が見える。口唇部下3cmに補修孔がある。

2も1とほぼ同じ時期のものであろう。器形・色調・胎土とも1と似ているが、口縁部は粘土紐貼り付けによって肥厚させ、1の施文具と同様のもので、斜位に刺突を加えている。

3、4は前期前半の深鉢形土器。3は口縁部がわずかに外にふくらみ、胴部に向かってすぼむ器形になるものと思われる。小型で薄い。口唇部に粘土紐貼り付けによる小突起、口唇下2.5cmに補修孔がある。3、4とも器外面に撚糸文を施している。

6は前期中頃の深鉢形土器胴部破片。

7、8、9、11は中期後半の深鉢形土器破片。11は底面に網代痕がある。

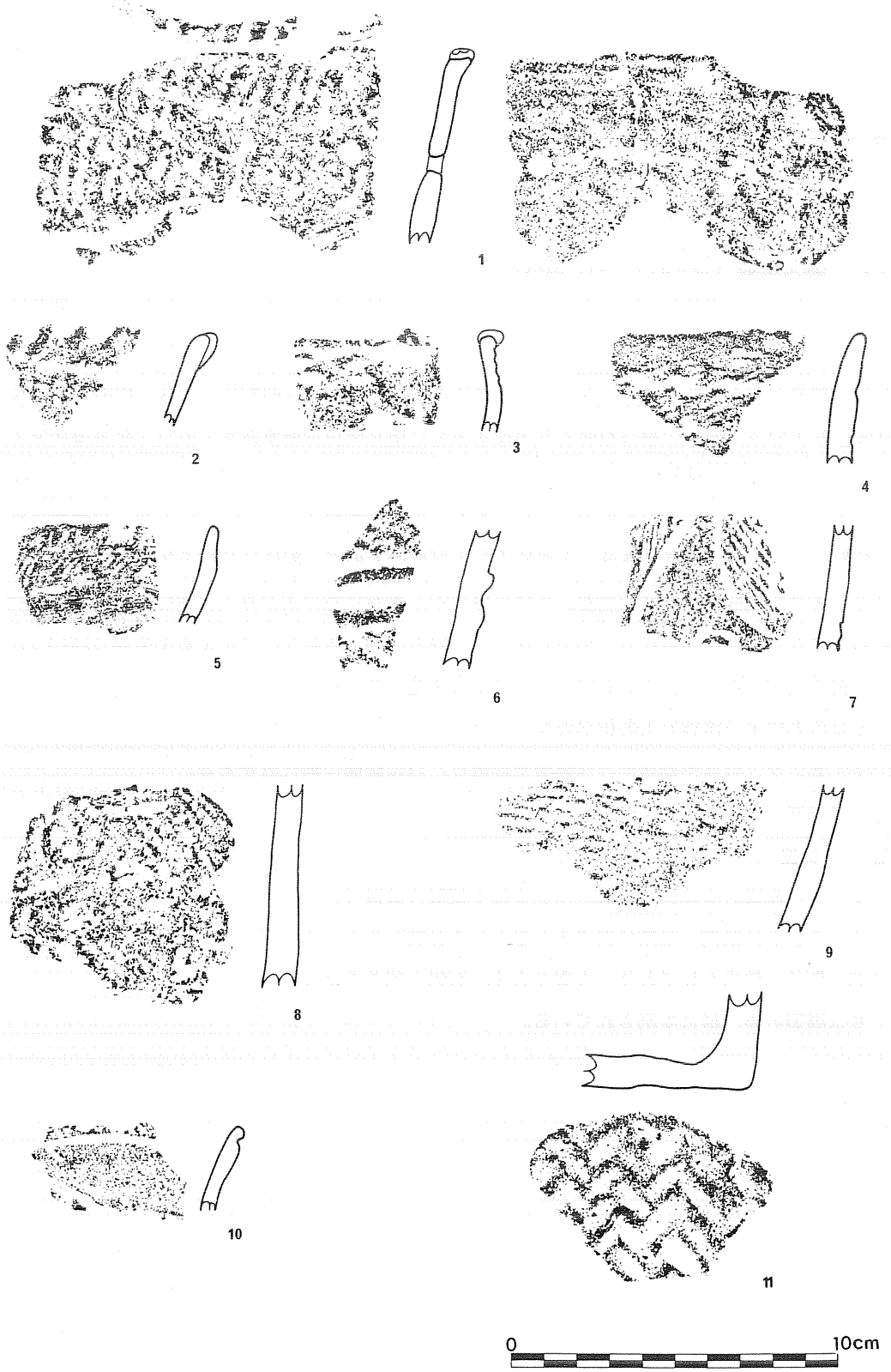
11は晩期の粗製深鉢形土器か。

2）　石器（第47、48図、図版49）

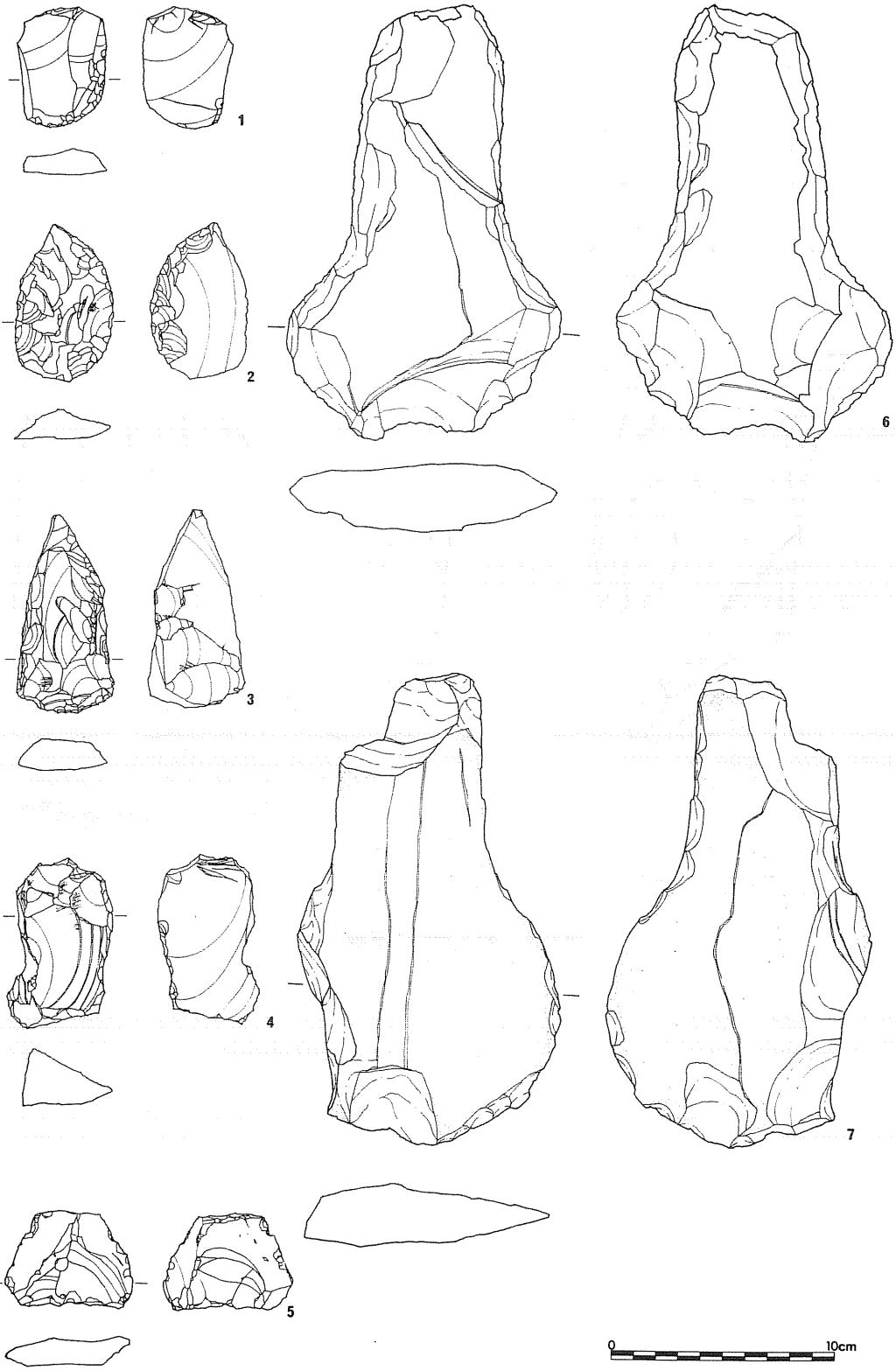
1、2は掻器。3は箆状石器。4、5は不定形の石器である。

6、7、8は後期～晩期に属すると思われる打製石斧で材質は安山岩。いづれも柄の部分と刃部が明確に作出されており、大型である。石鍬を想起させる。

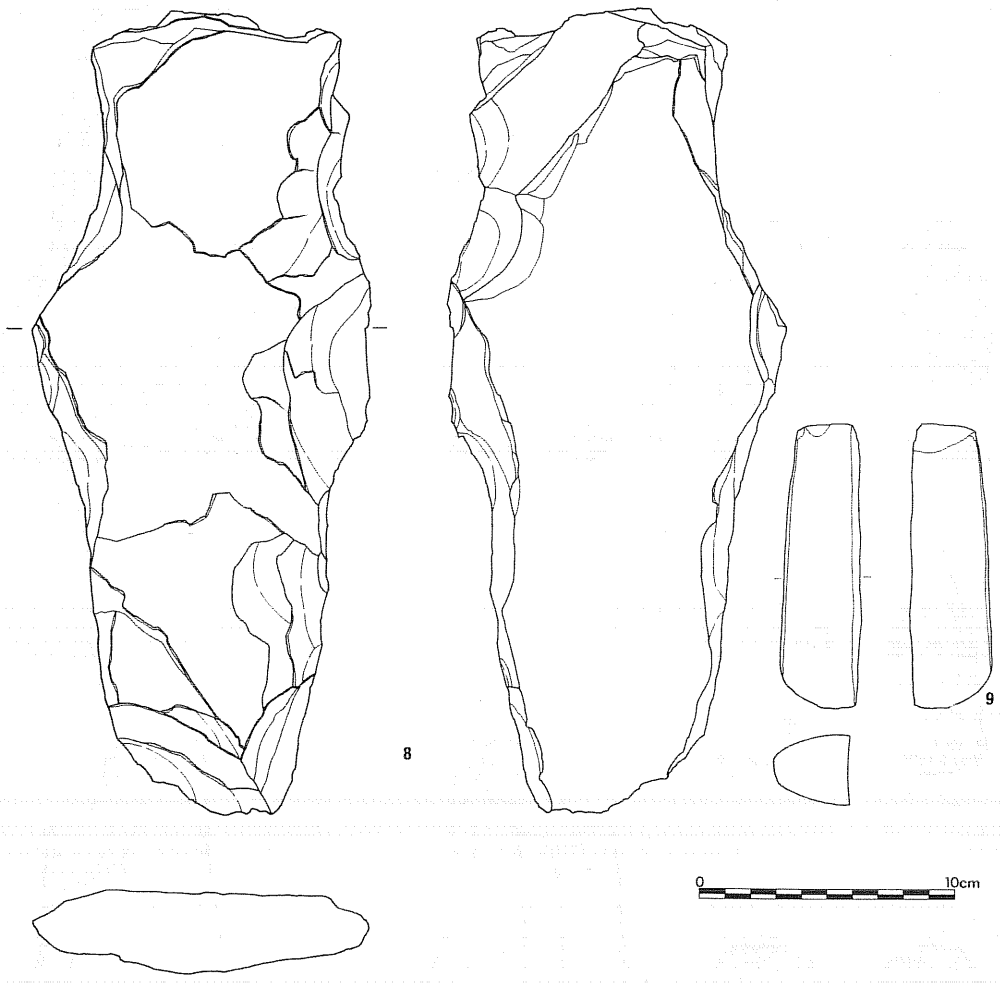
9は磨製石斧。縦に半割されている。



第46図　縄文土器



第47図　縄文時代の石器(1)



第48図　縄文時代の石器(2)

第5章　まとめ

雄勝町桐木田遺跡の昭和55、56年、２ヶ年に渡る発掘調査の結果についてはこれまで述べて来たとおりである。検出遺構やその数、出土遺物量は予備調査(範囲確認調査－昭和54年実施)から予想された遺跡の内容とは大きく異なる内容であった。以下、今回の発掘調査結果についてまとめてみたい。

1)　出土陶磁器について

出土した遺物は縄文時代の土器を除けばいづれも中世～近世初期のもので、古代のものは一点もない。中世～近世の陶磁器は大きく分けて３期に分けられよう。①珠洲系・大畑窯産陶器を中心とする13世紀中頃～14世紀のもの（注１）。②明青磁・黄瀬戸などを中心とする15世紀～16世紀のもの。③明染付・唐津系・初期伊万里を中心とする17世紀以降のもの。

なお、上記の時期以外に江戸時代半ば以降の陶磁器も遺物中に含まれているようである。

2)　各遺構の年代について

遺物の出土状況の項でも述べたように、その遺構の時期を決定的にできるような形での資料は得られなかった。その中でも、いくつかの遺構についてはわずかに手懸りを得ることができたので略述する。

ＳＩ203竪穴住居跡埋土中出土の珠洲系片口鉢は、その器形、おろし目などからして14世紀のものであろうと思われる(注２)。またＳＫ157方形竪穴状遺構の壙底近くの埋土中から出土した越前の大甕と思われるものも14世紀～15世紀の年代を与え得よう。ＳＢ100掘立柱建物跡柱掘方内から出土した明白磁染付碗と地元窯の産かと思われる片口鉢は16世紀のものであろうと思われる。

室町時代前後かと思われる竪穴住居跡などは明確な入口部としての掘り込みもなく、焼土それ自体も単にワラなどを焼いたという程度のものであるが、縄文時代の竪穴住居跡のようなていねいな貼床をして構築されているものもある(注３)。また方形竪穴状遺構や長方形竪穴状遺構の中にはワラ灰のような黒い灰が底面あるいは埋土途中に見られた。これらの遺構の具体的な機能については不明である。

3)　全体の遺構の変遷について

発見された遺構は堀跡、溝跡、掘立柱建物跡、竪穴住居跡、方形竪穴状遺構、長方形竪穴状遺構などである。これらの遺構は相互に重複関係にあるものもあり、各遺構の種類別の変遷の見通しはつきそうである。

まず、堀跡（ＳＤ16、140）と方形竪穴状遺構との関係であるが、ＳＫ154、158はＳＤ140に

切られており、竪穴状遺構の中には堀跡より古いものがある。

堀跡と掘立柱建物跡との関係は、西部柱穴群Ⅰ中のＳＢ303の柱掘方が、ＳＤ140の埋土を切っており、掘立柱建物跡の中には堀跡よりも新しいものがある。しかし、掘立柱建物跡群は主に、２ヶ所（東部柱穴群と西部柱穴群）あり、東部柱穴群の柱列方向は堀跡南辺に直交し、東辺にほぼ平行する。このことは、東部柱穴群の堀跡内の位置からしても、これが、堀跡と同期の所産と考えるのが妥当と思われる。

堀跡とＳＤ15Ａ・Ｂ、134、135溝跡は堀跡の東・南・西辺にほぼ並行する。従って、これら溝跡と堀跡は同期のものか、それ程時間的な差異はないものと思われる。そして、ＳＤ134はＳＫ144方形竪穴状土壙を切っている。

方形竪穴状遺構、あるいは竪穴住居跡と掘立柱建物跡の関係は、ＳＢ100掘立柱建物跡の柱掘方がＳＫ137、136を切ることからもわかるように、少なくとも西部柱穴群においては、掘立柱建物跡の方が新しいものと思われる。

竪穴住居跡と方形竪穴状遺構との前後関係は、ＳＩ236がＳＫ209、235などに切られていることからも、前者の方に古いものがある。

東部柱穴群と西部柱穴群ではその柱列方向に違いがある。すなわち、前者のそれはN38°Eを中心とし、堀跡南辺に直交するのに対し、後者のそれはN30°E前後を中心とするものである。このことは両者の遺跡内での位置、他遺構との重複関係などから、両者間に時間的な差のあることを示しているように思える。

以上のことからすると、桐木田遺跡における各遺構の種類別の変遷は以下のように考えられる。

中世の中頃、竪穴住居跡や方形竪穴状遺構などがある方向性を持って構築された。そして掘立柱建物跡なども存在したかもしれない（注４）。次に１辺50～60ｍの略台形の堀跡あるいはコの字形の溝跡が堀られ、その中央部には掘立柱建物群（東部柱穴群）があった。堀跡あるいは溝跡が埋まった（あるいは埋められた）段階で、堀跡西辺を中心にして掘立柱建物群（西部柱穴群）が建てられる。この時期は江戸時代初め頃であったと考えられる。

以上、若干の推察を混えて今回の桐木田遺跡発掘調査についてまとめてみた。これを、本遺跡とほぼ同時期で、北東約1.5km離れて存在する鵜沼城跡の発掘調査結果（注５）と比較してみると、①鵜沼城跡の中心部には掘立柱建物跡と井戸跡が多く発見されたが、本遺跡には井戸跡がいわゆる「桐木田井戸」一基以外には皆無である。②鵜沼城跡にはなかった中世の竪穴住居跡、竪穴状遺構が本遺跡では多くある、などの点で差異が感じられる。堀跡やその中心部にある柱穴群の規模などの比較にしても、本遺跡は平地にある「やかた」跡というよりもむしろ「や

しき」跡、あるいは集落跡とでもした方が適切であるように思える。

とかく戦乱や中央での出来事にのみ注意の払われて来たこれまでの地方中世史の記述に対して、これらの遺構は当時の庶民の存り様を語りかけているようにも思える。

注１：吉岡康暢　「加賀・珠洲」『世界陶磁全集』３　1977　小学館　の珠洲陶片口鉢の分類をもとにした。

また、大畑窯産の陶器としたものについては、吉岡康暢氏（石川県郷土資料館）に遺物を鑑ていただき御意見をうかがい、小松正夫　『大畑窯跡発掘調査報告書』　南外村教育委員会　1981、７　を参照した。

注２：注１に同じ。

注３：これら竪穴住居跡や竪穴状の遺構は、その埋土の土質、状況、出土遺物などから見ても縄文時代の遺構でないのは確実である。

注４：ＳＤ111溝跡はＳＩ108竪穴住居跡に切られており、この時期にすでにある程度の地区割のようなことが行われていた可能性がある。

注５：『秋田県文化財調査報告書第73集　鵜沼城跡発掘調査報告書』秋田県教育委員会 1980、３

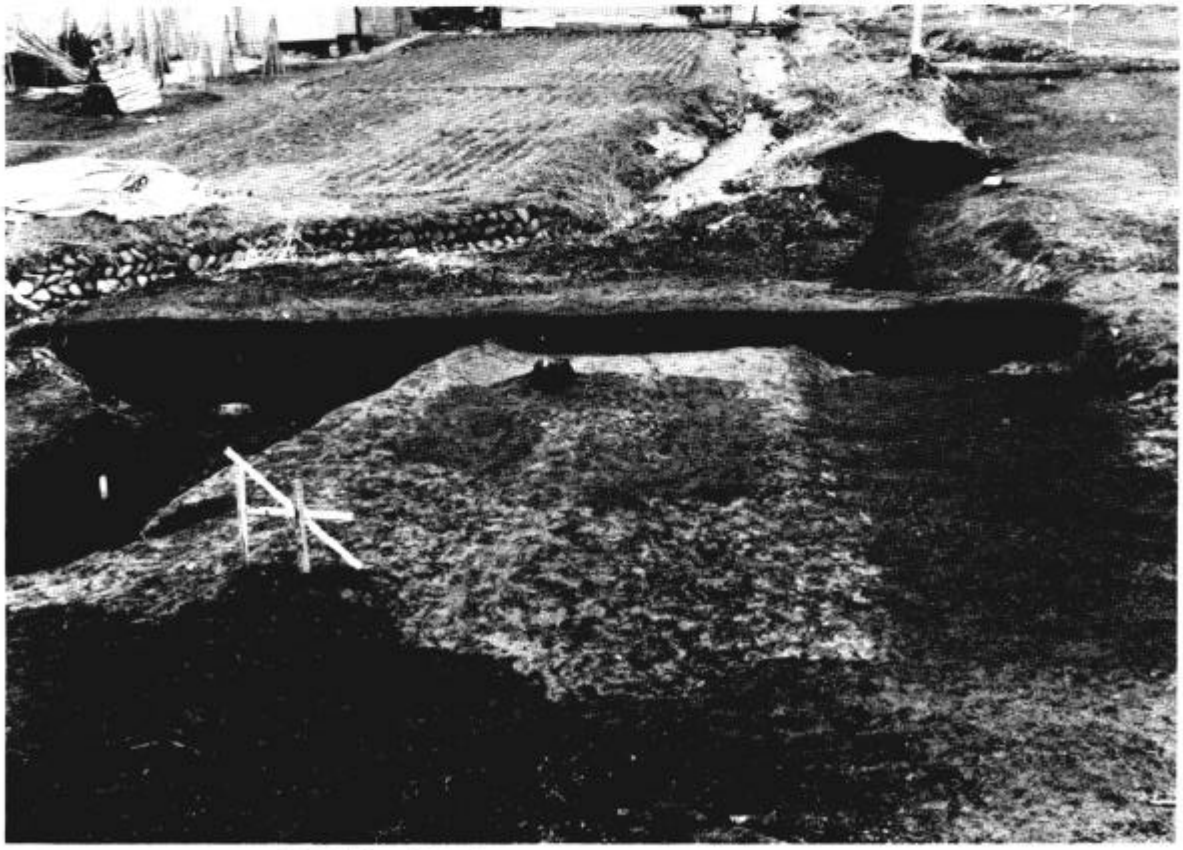
LH60
LE58
LB55
KG53
MC61
MF61
MH59
NC57
NE56
NG56
NH54
NG52
NE50
NB48
MG46
MD44
MA42
LG41
LD44
LA47
KE51
KF49
KB51
JG49
JE48
JF46
JG44
KA40
KC38
KD36
LE40
LC38
LA36
KG34
SD 140
SD 141
SD 142
SD 134
SD 135
SD 111
SD 300
SD 301
SD 16
SD 15
SD 17
SD 18
SX 24
SX 13
SK 118
SK 322
SK 325
SK 324
SK 321
SK 320
SK 327
SK 326
SK 329
SK 328
SK 143
SK 148
SK 146
SK 149
SK 144
SK 136
SK 137
SK 150
SK 154
SK 124
SK 127
SK 128
SK 116
SK 114
SK 112
SK 113
SK 110
SK 108
SK 139
SK 147
SK 12
SK 23
0
16m

第3図　発見遺構全体図

図版1　　上　遺跡遠景（東▶）
　　下　同上

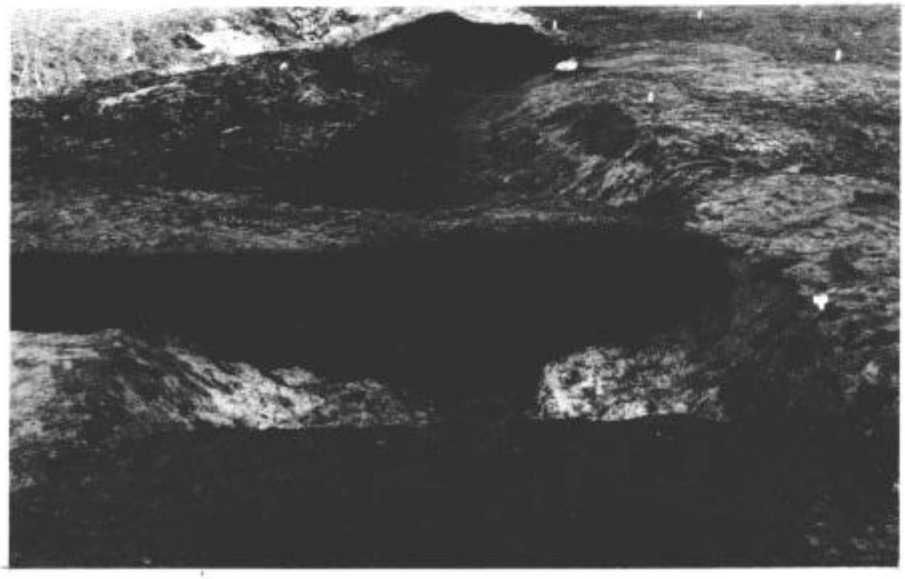
図版2　上　1区全景（南▶）
　　下　SD16堀跡南辺(東▶)

図版3　　上　ＳＤ16東辺（南▶）
　　下　ＳＤ140堀跡西辺（南▶）



図版 4　　上　ＳＤ16堀跡東辺（北▶）
　　下　ＳＤ303・301堀跡（南）

図版5　上　ＳＤ16堀跡断面（南辺）
中　ＳＤ16堀跡断面（東辺）
下　ＳＤ16堀跡断面（北辺）

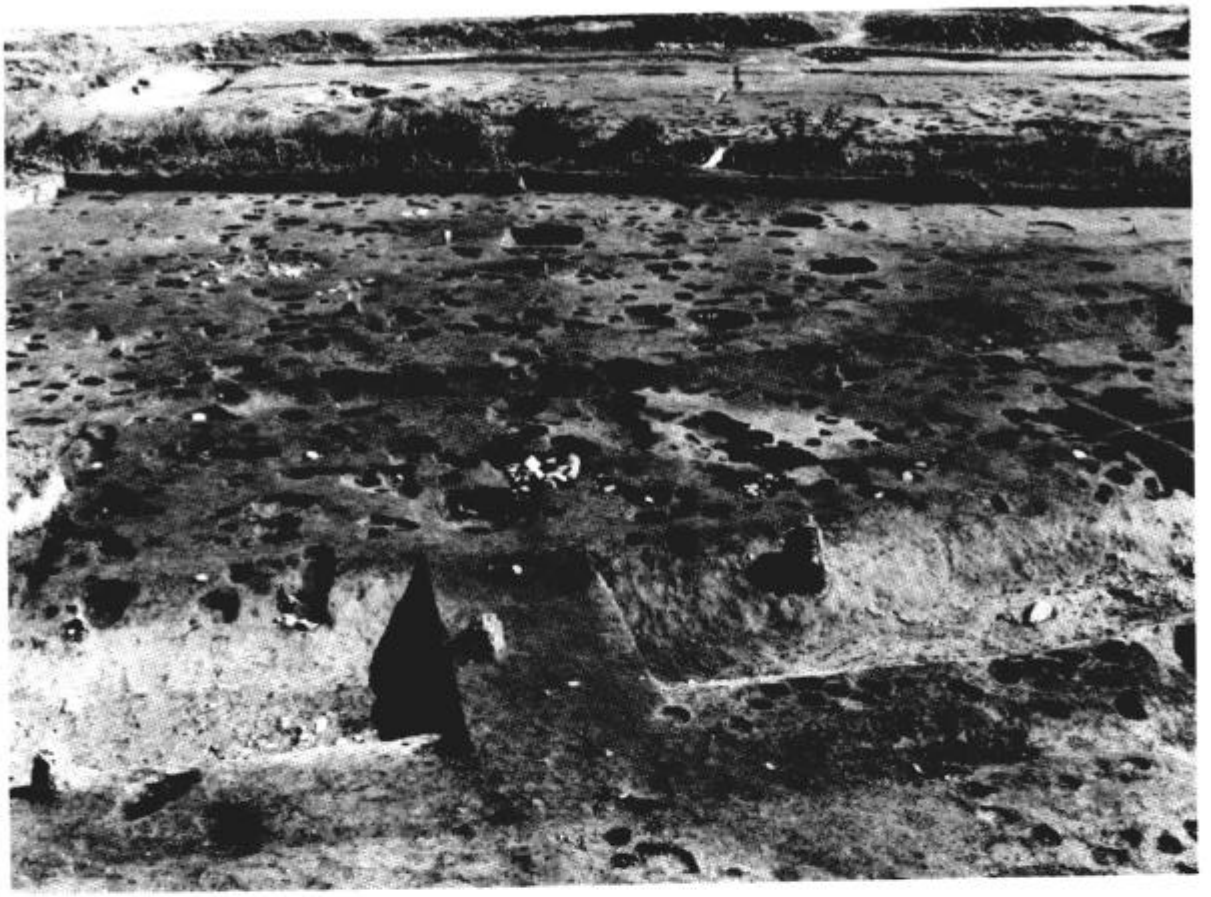


図版6　上　ＳＤ140堀跡断面（西辺）
中　ＳＤ140堀跡断面（南辺）
下　ＳＤ300堀跡断面

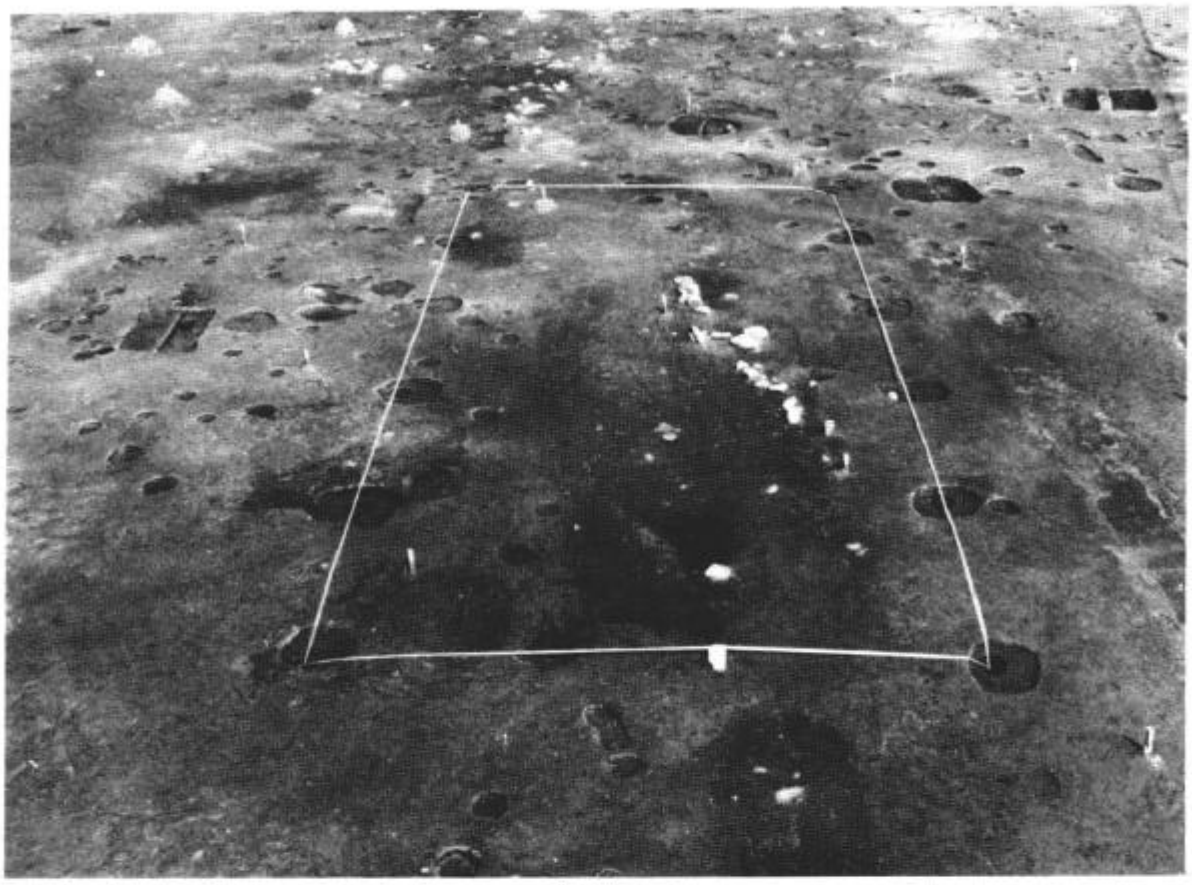
図版7　上　SD15A・B溝跡（西▶）
下左　SD15A・B溝跡（東▶）
下右　SD15A・B溝跡（東▶）

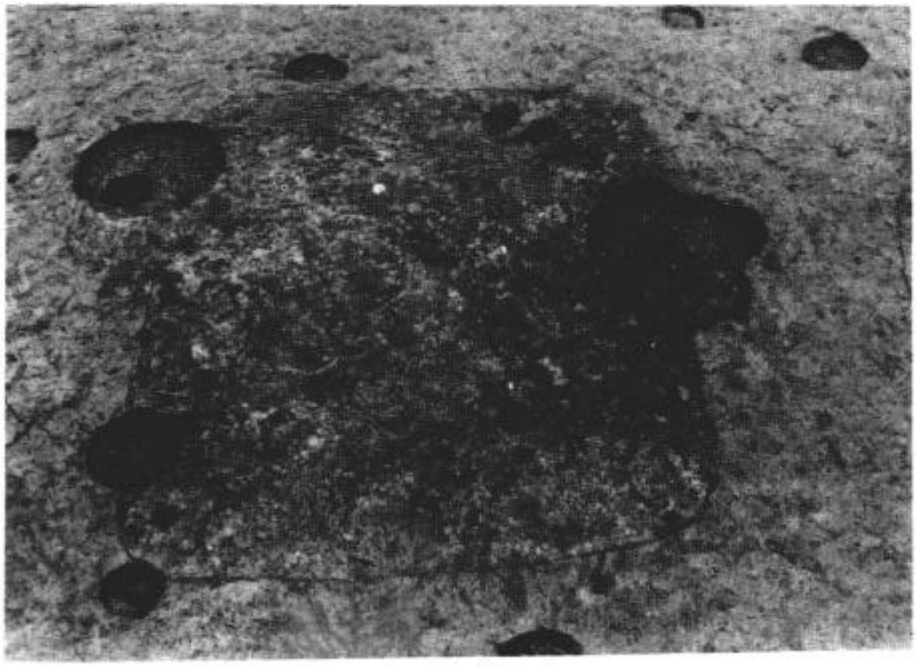
図版 8　　上　ＳＸ24土橋（東▶）
　　下　ＳＸ150土橋（東▶）

図版9　上　Ⅰ区：中心部（南▶）
　　下　東部柱穴群（東▶）

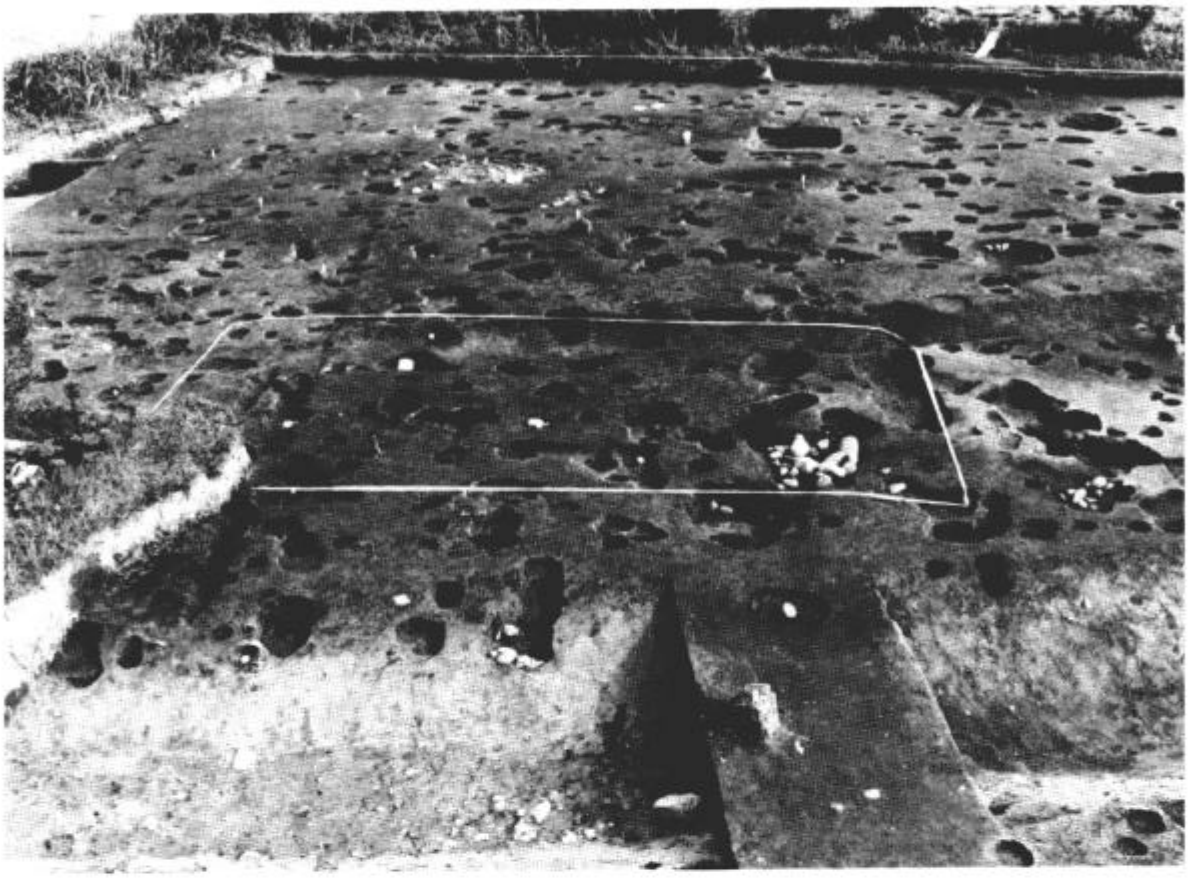


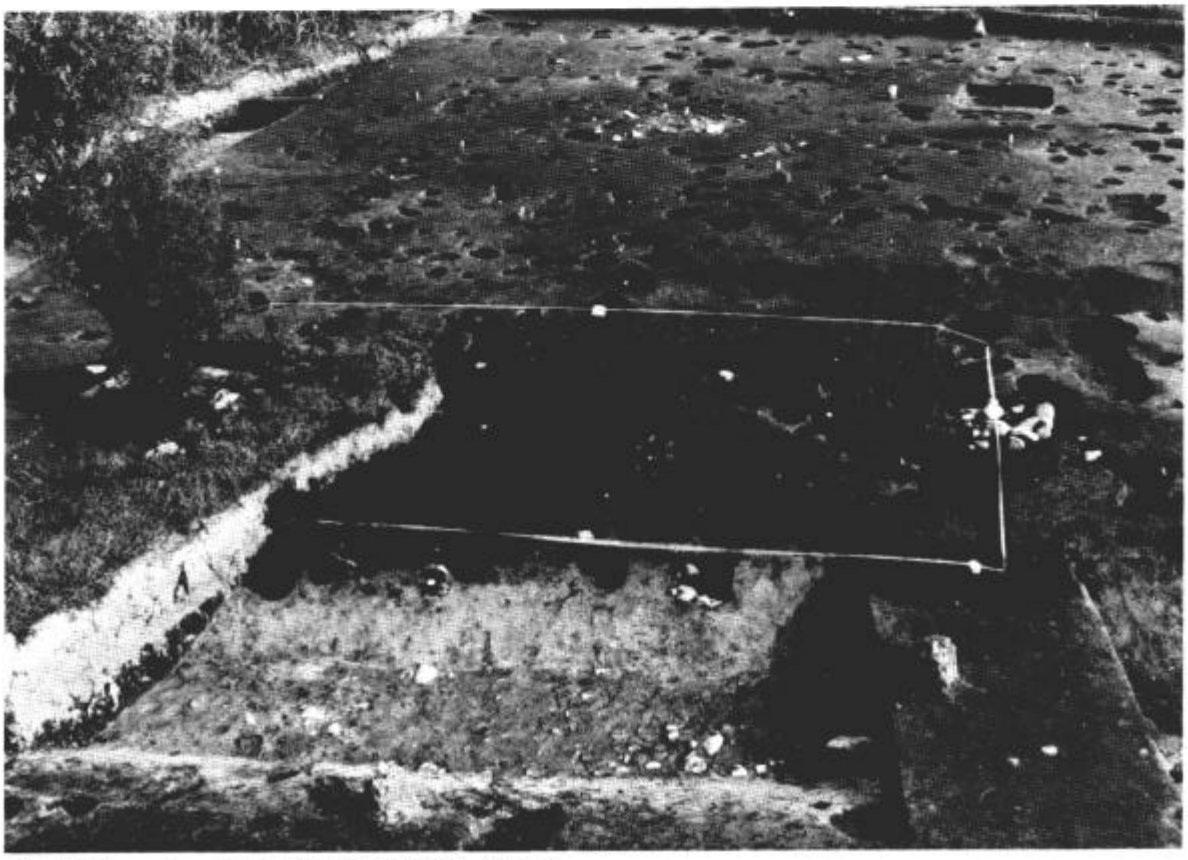
図版10　上　西部柱穴群Ⅰ（西▶）
　　下　西部柱穴群Ⅱ（南▶）



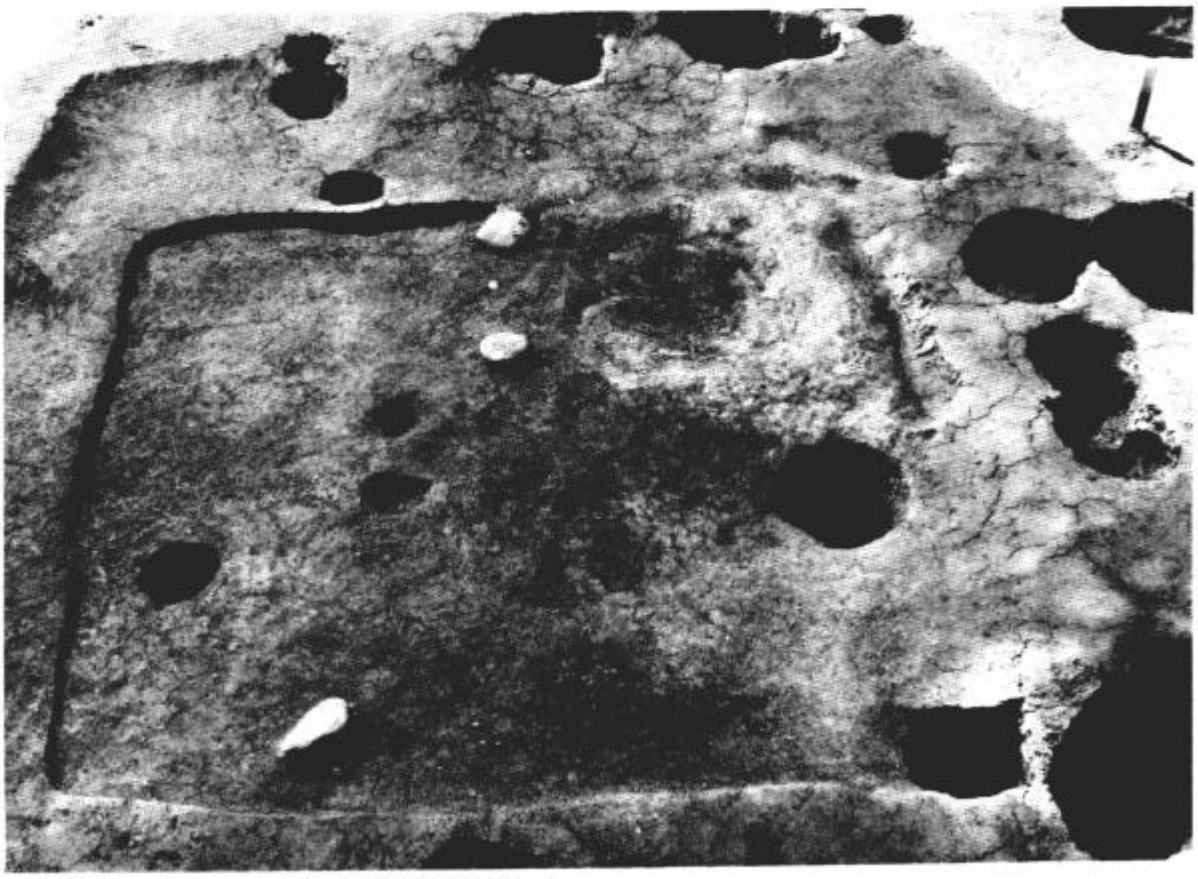


図版11　上　ＳＢ100掘立柱建物跡（南▶）
　　下　ＳＢ100掘立柱建物跡柱穴　ＳＫ137（南▶）

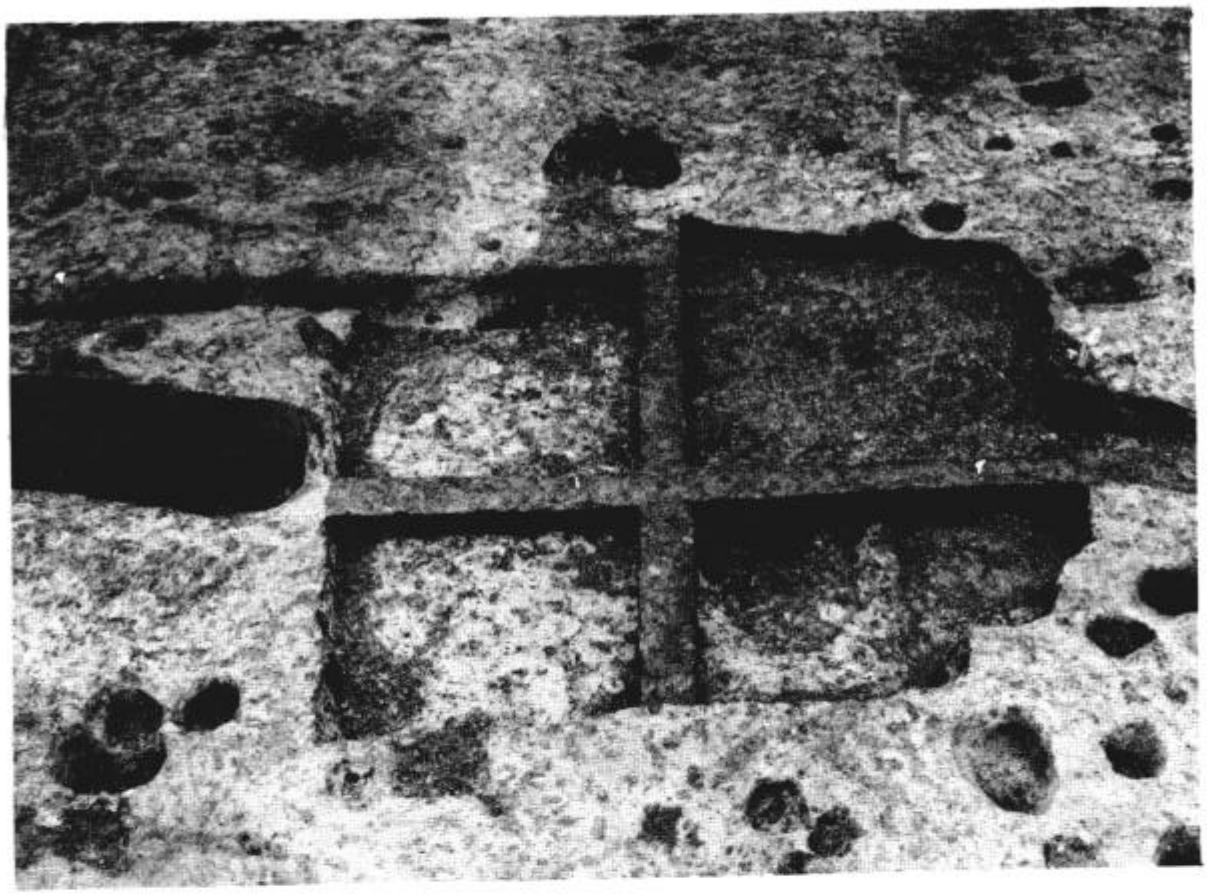


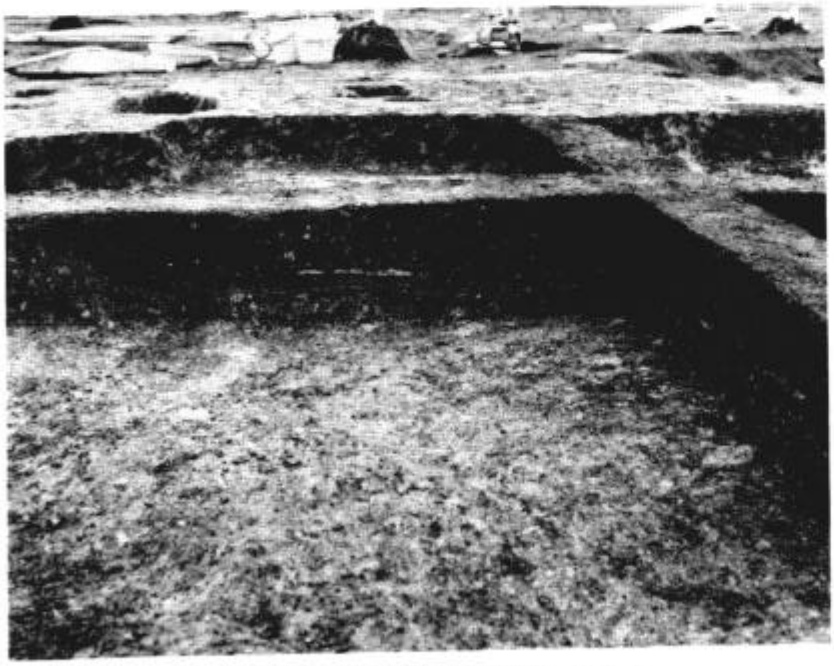


図版12　上　ＳＢ153掘立柱建物跡（西▶）
　　下　ＳＢ303掘立柱建物跡（西▶）

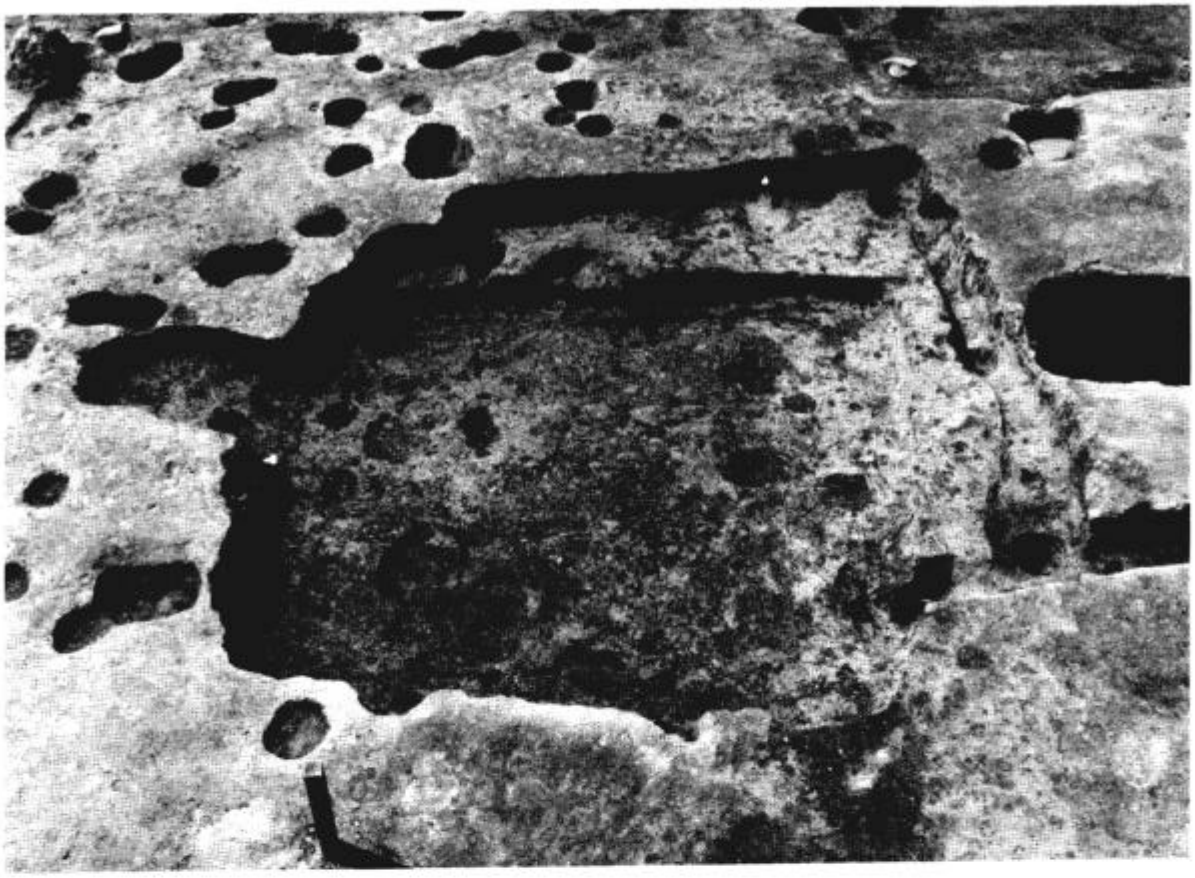


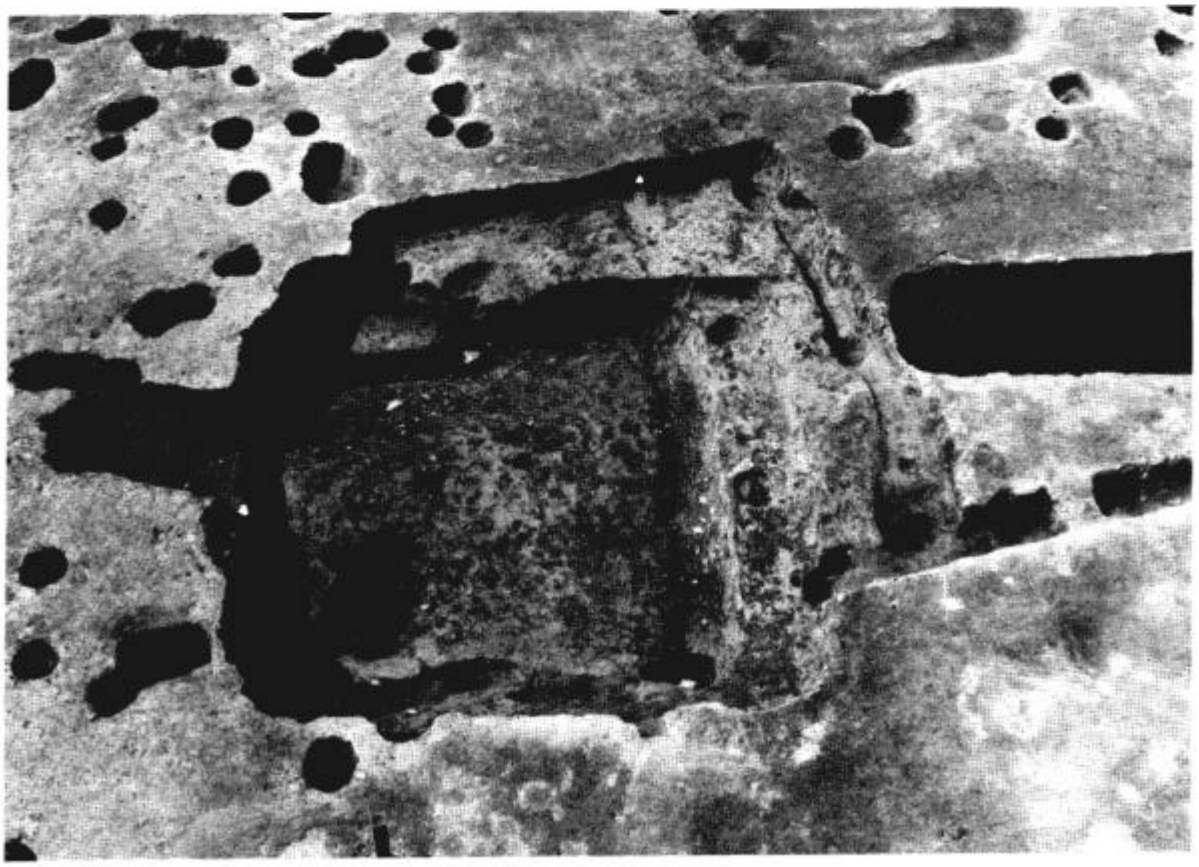
図版13　上　ＳＢ301掘立柱建物跡（南▶）
　　下　SI 20竪穴住居跡（北▶）



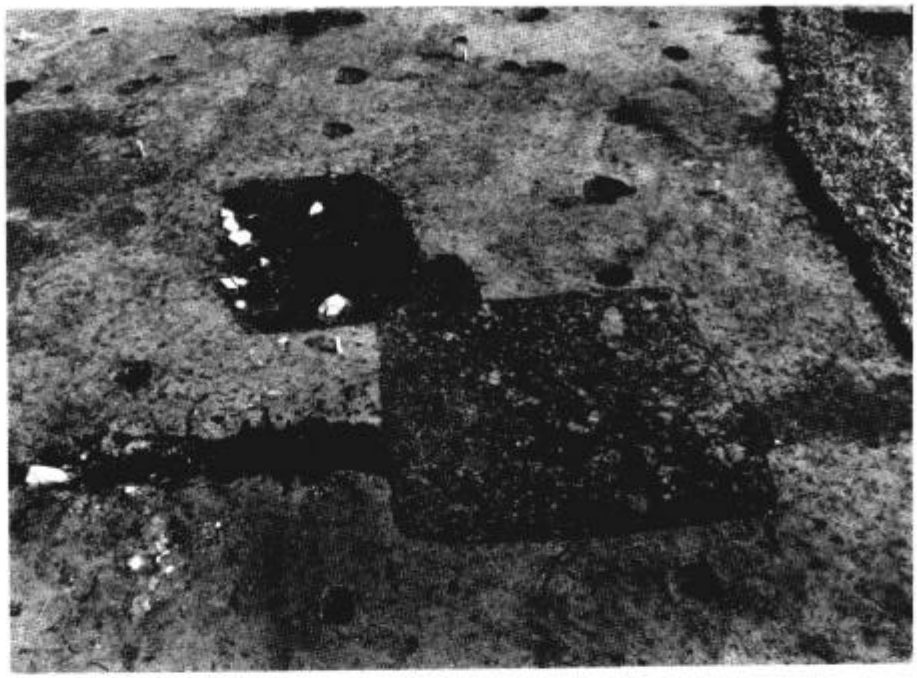


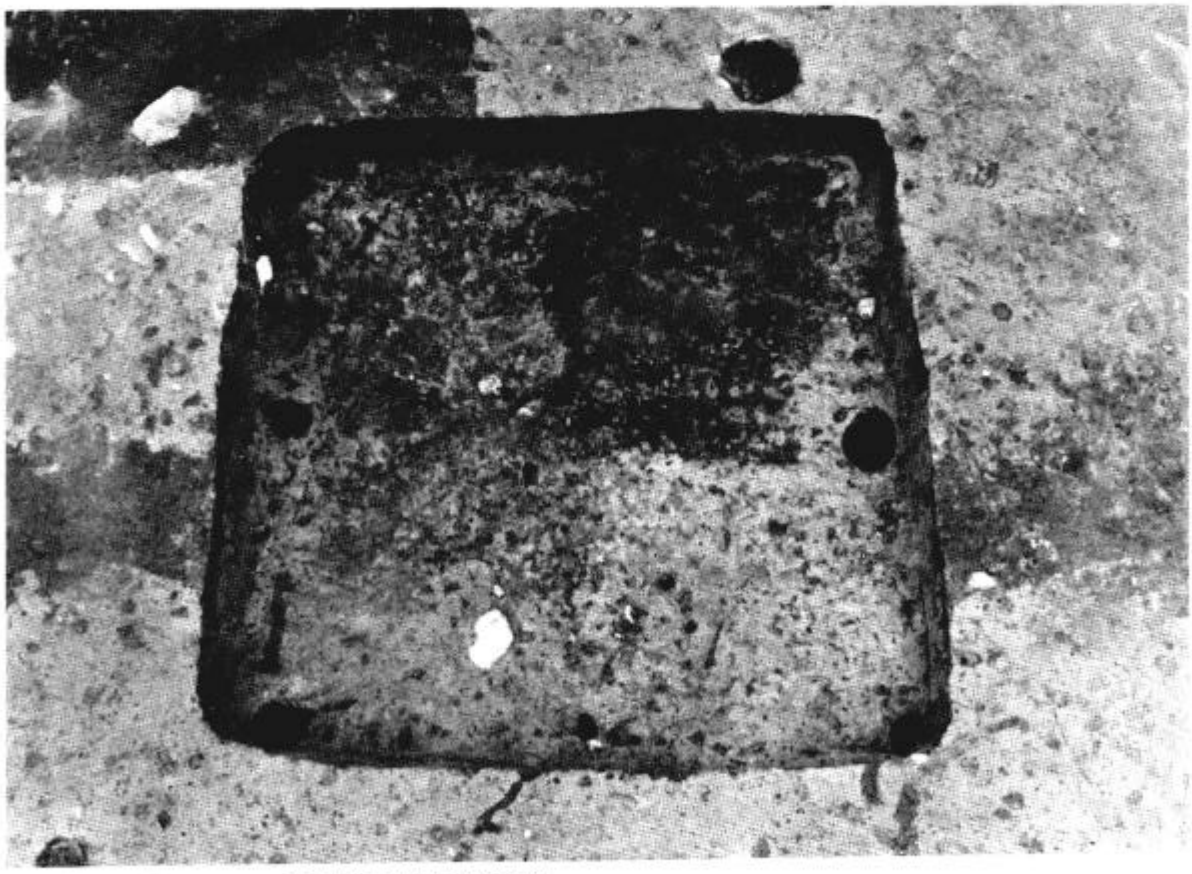
図版14　上　SI 203・204・205竪穴住居跡（南▶）
下左　同上断面貼床状況
下右　遺物出土状況



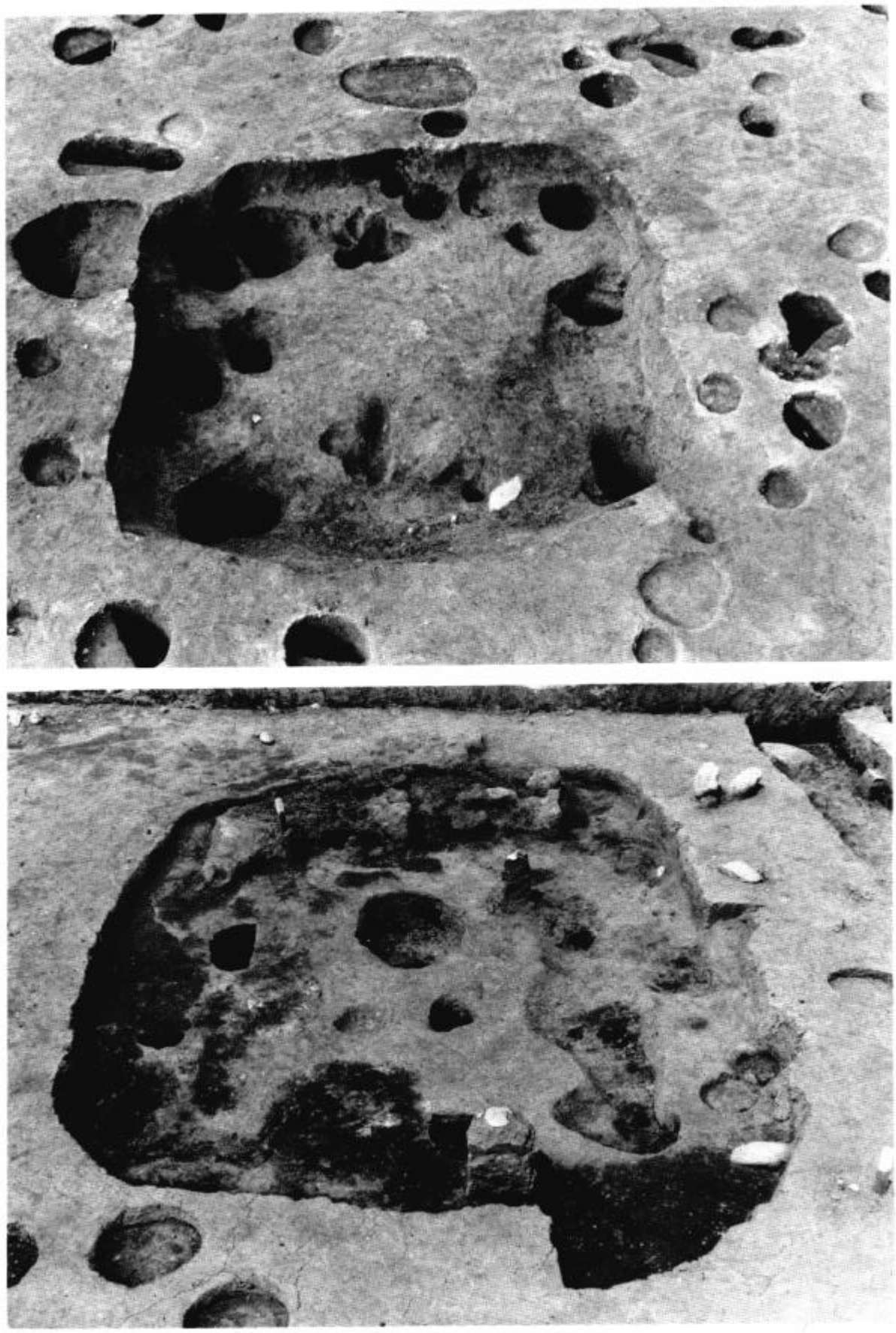


図版15　上　SI 203・204竪穴住居跡（北▶）
　　下　SI 203・204・205竪穴住居跡（北▶）

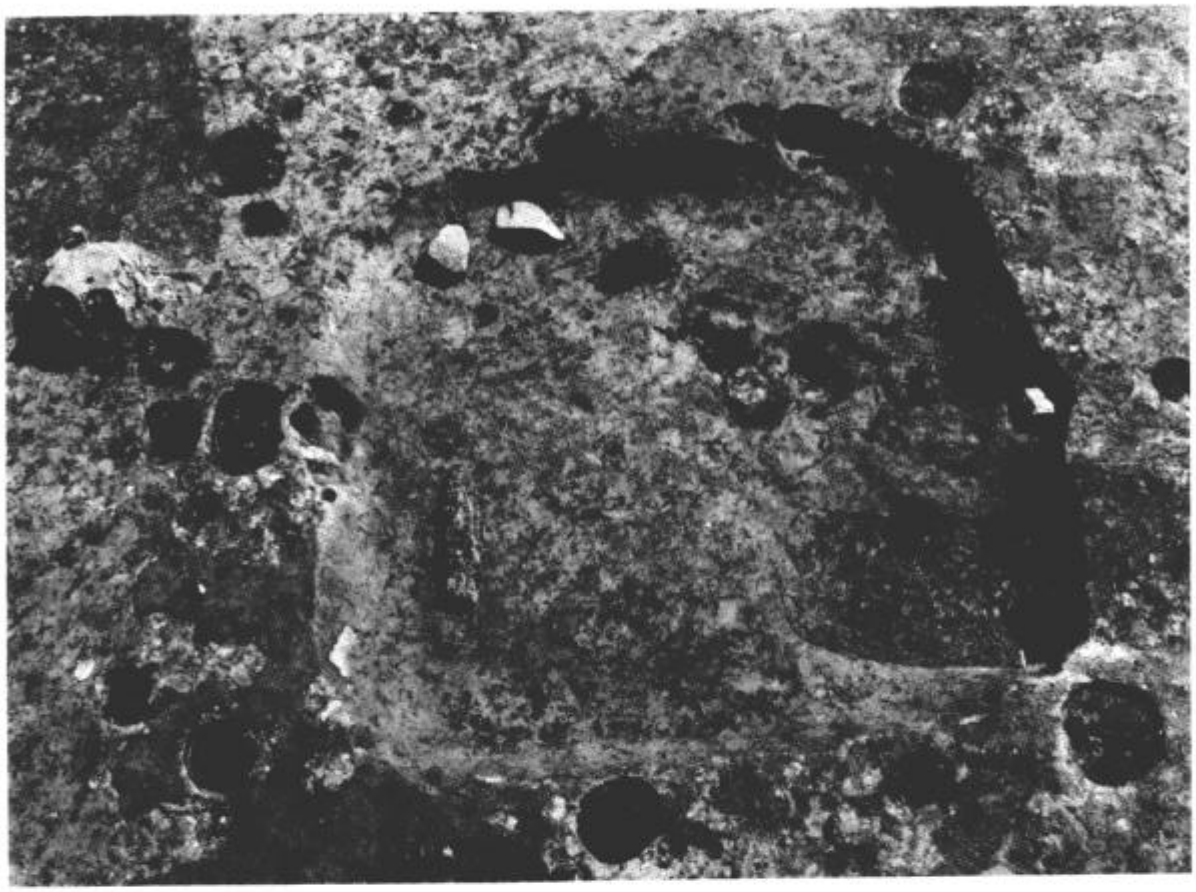


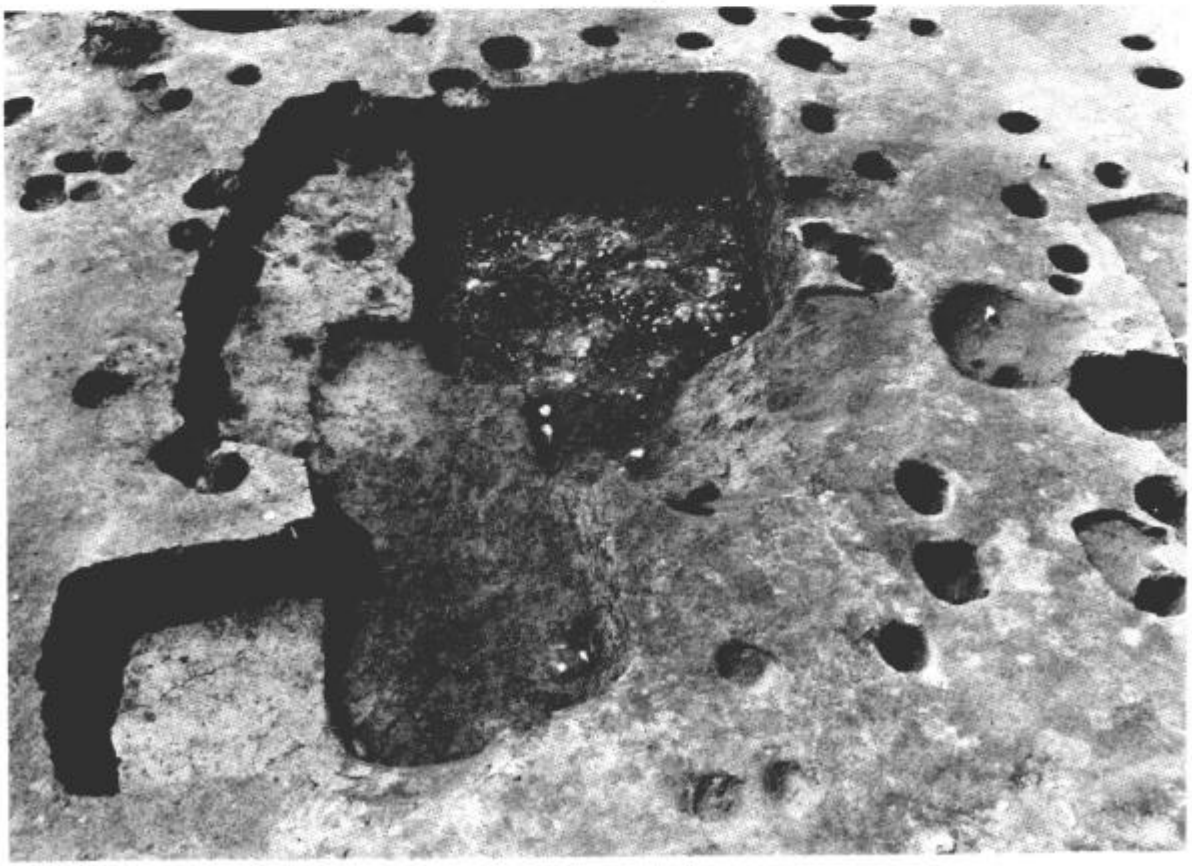


図版16　上　SI 108竪穴住居跡（西▶）
　　下　同上　　（西▶）

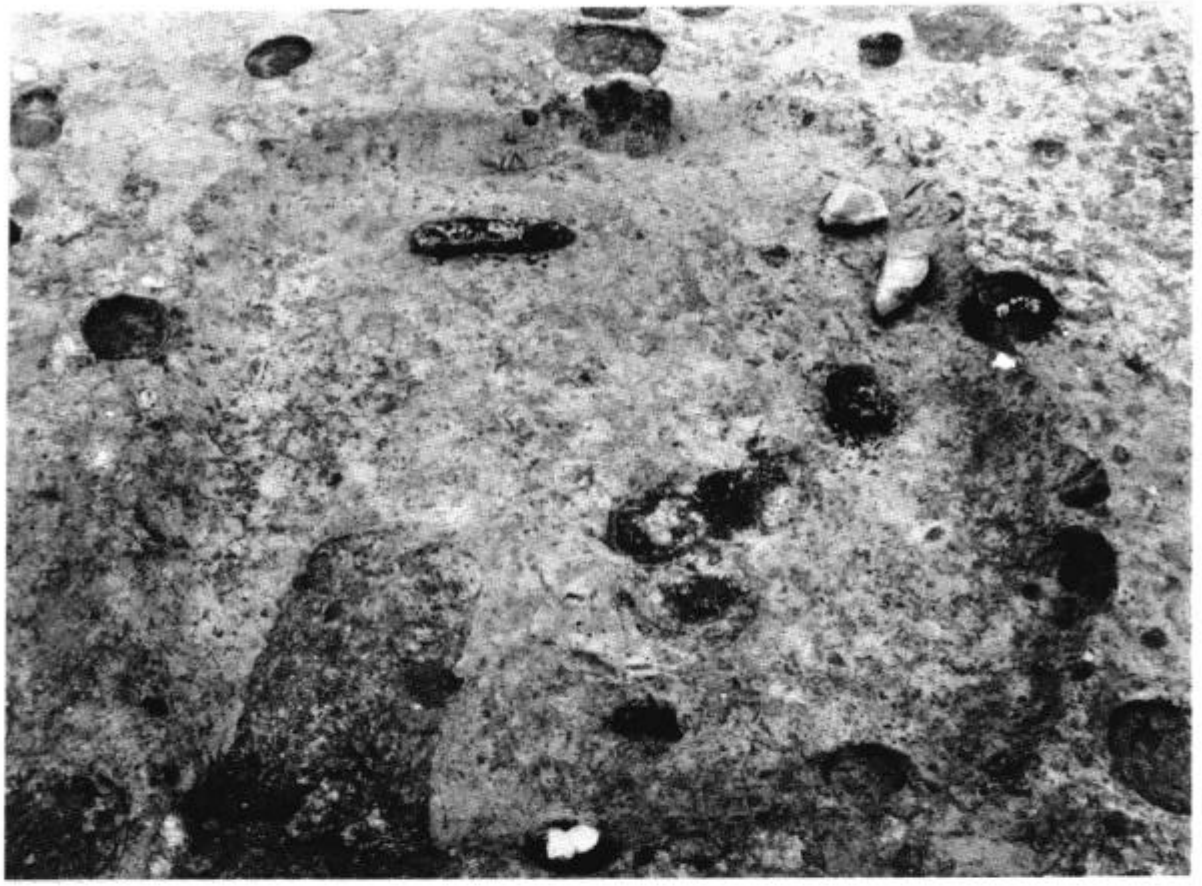


図版17　上　SI 10竪穴住居跡（西▶）
　　下　SI 11竪穴住居跡（東▶）

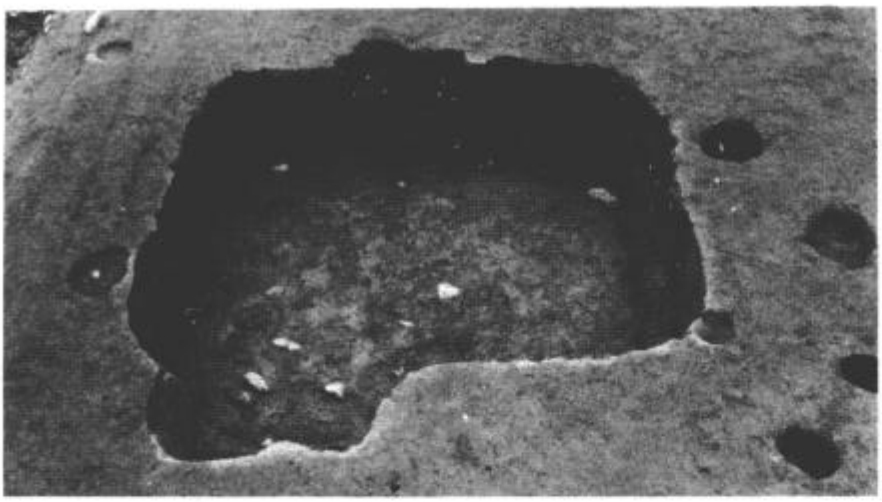


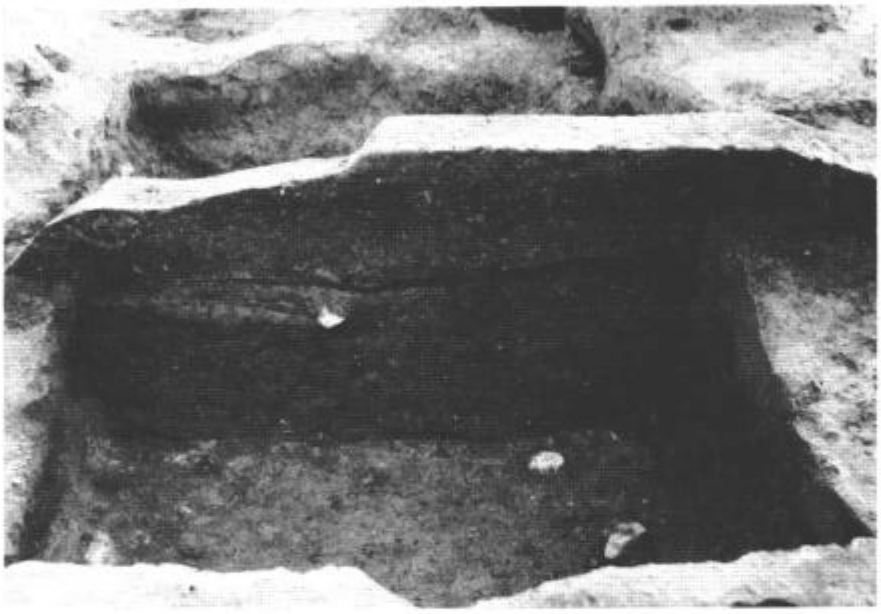


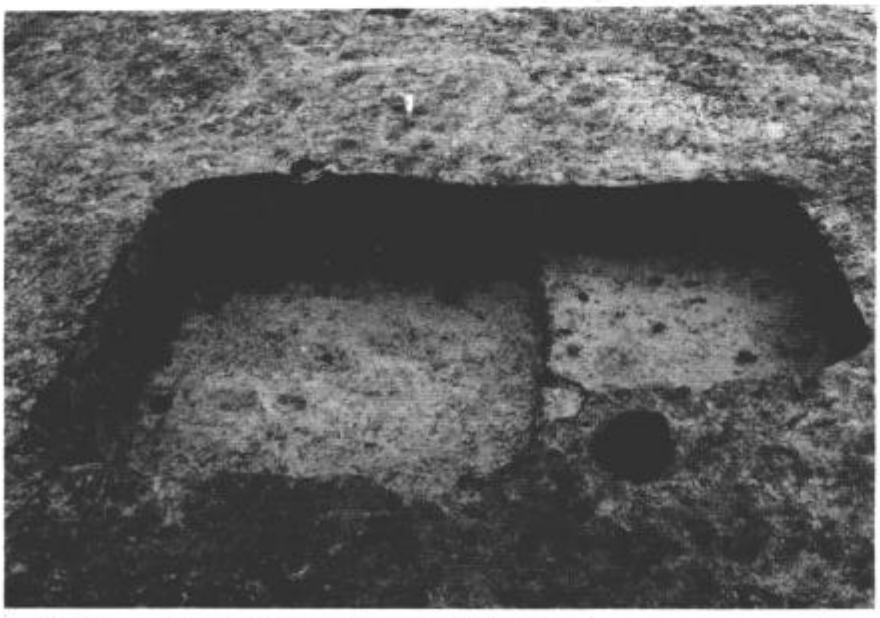
図版18　上　SI 117竪穴住居跡（西▶）
　　下　SI 236、SK209・235・210（北▶）



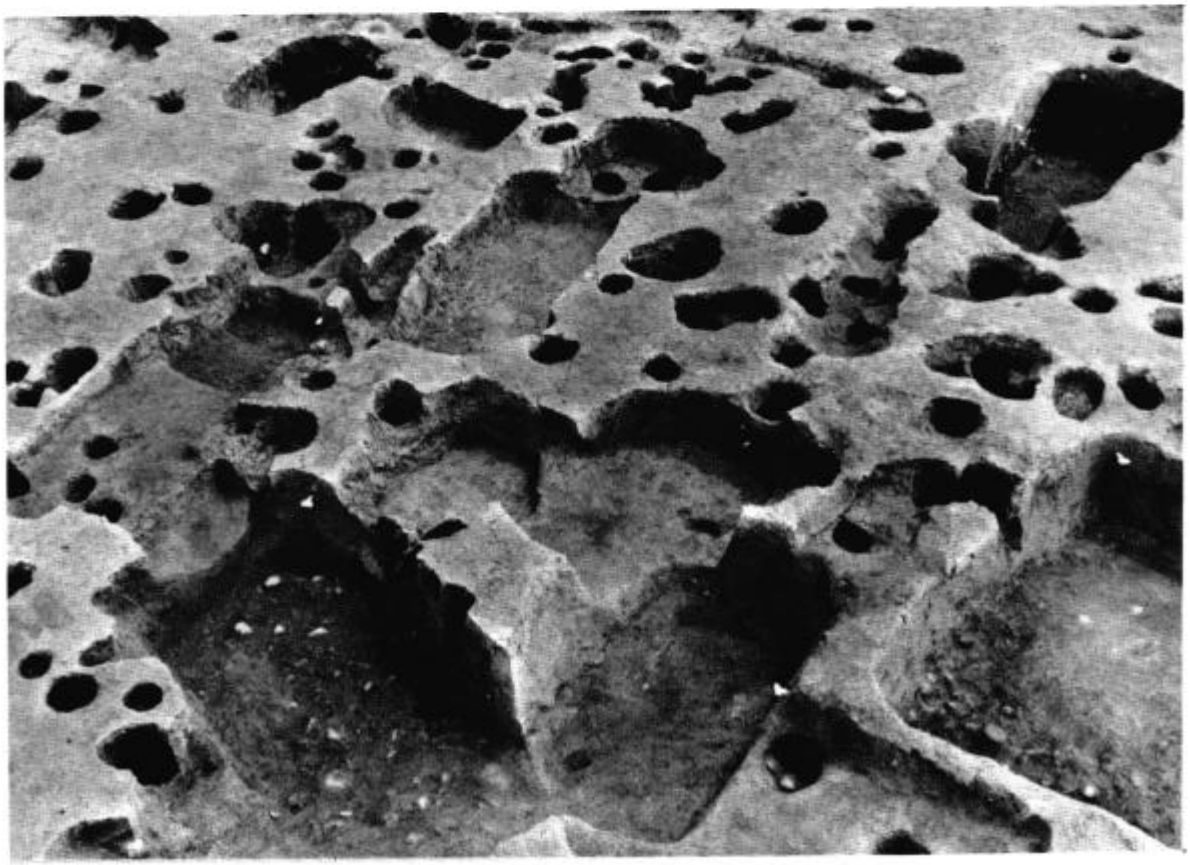
図版19　上　SI 117竪穴住居跡（南▶）
　　下　SK12方形竪穴状遺溝（南▶）



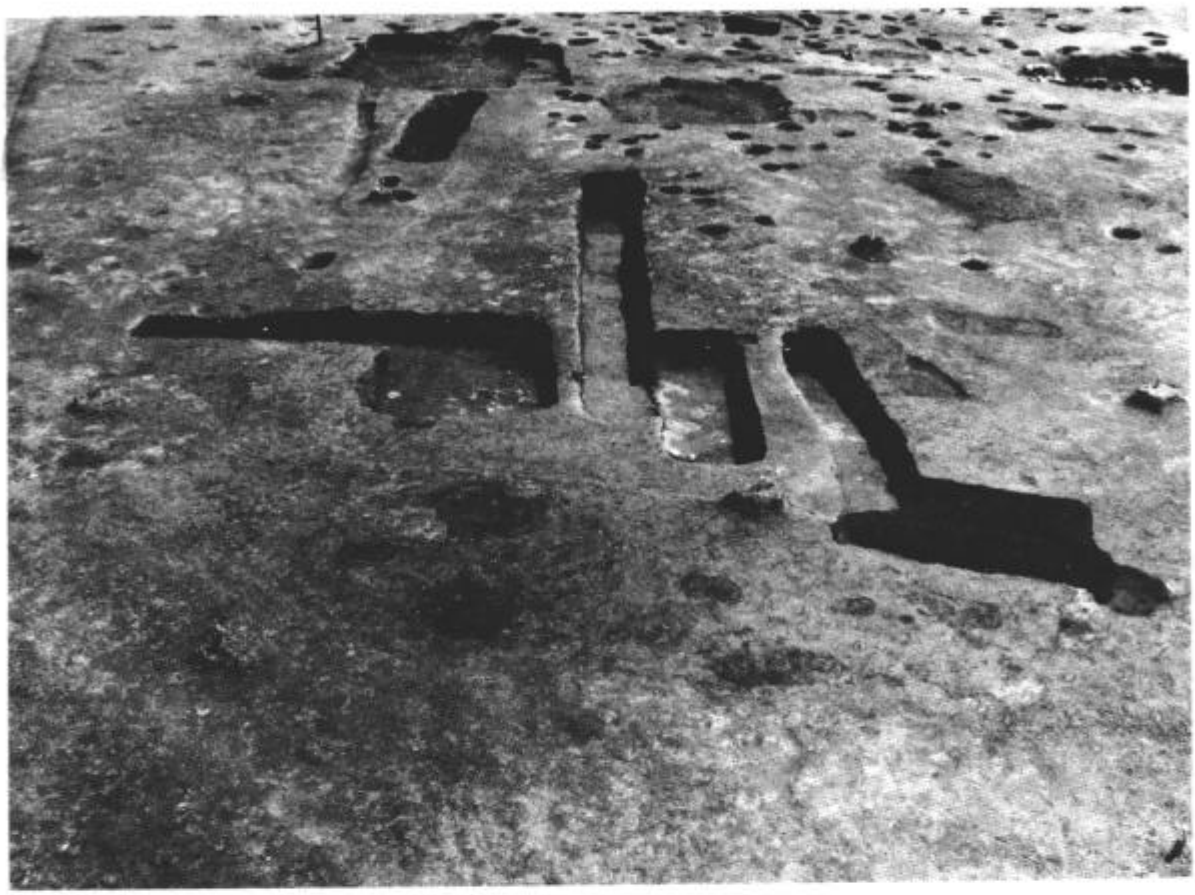


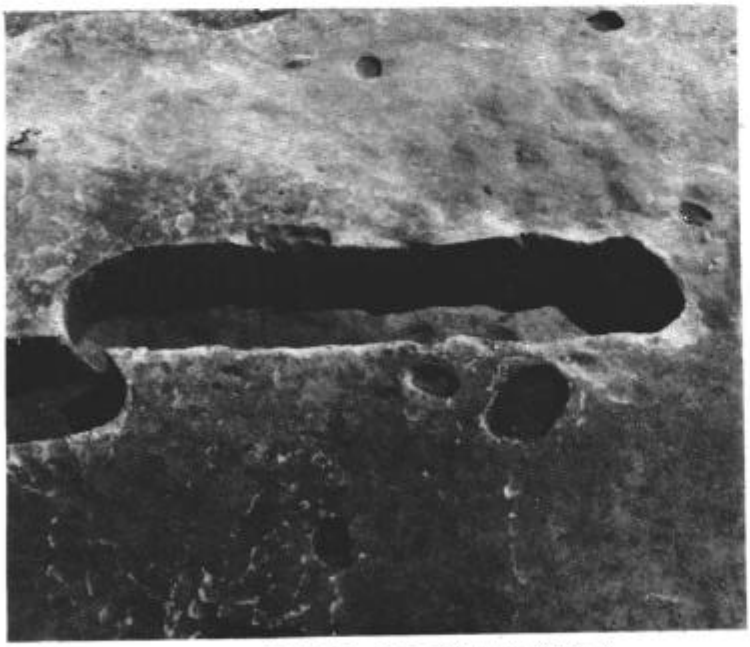


図版20　上　ＳＫ137方形竪穴状遺構（北▶）
中　ＳＫ155・156断面
下　ＳＫ328・329方形竪穴状遺構（南▶）

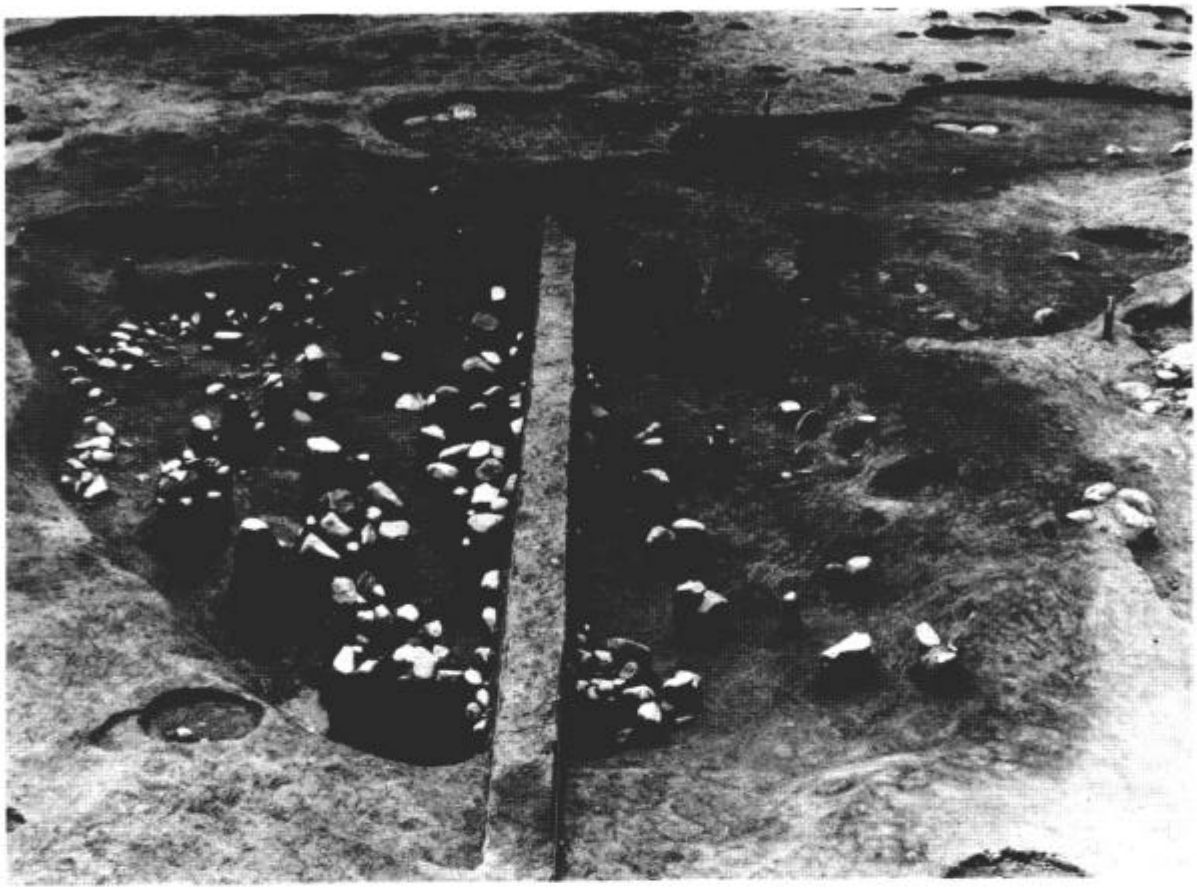


図版21　上　ＳＫ211・242・225など（西▶）
　　下　ＳＸ216・217・218・219など（南西▶）

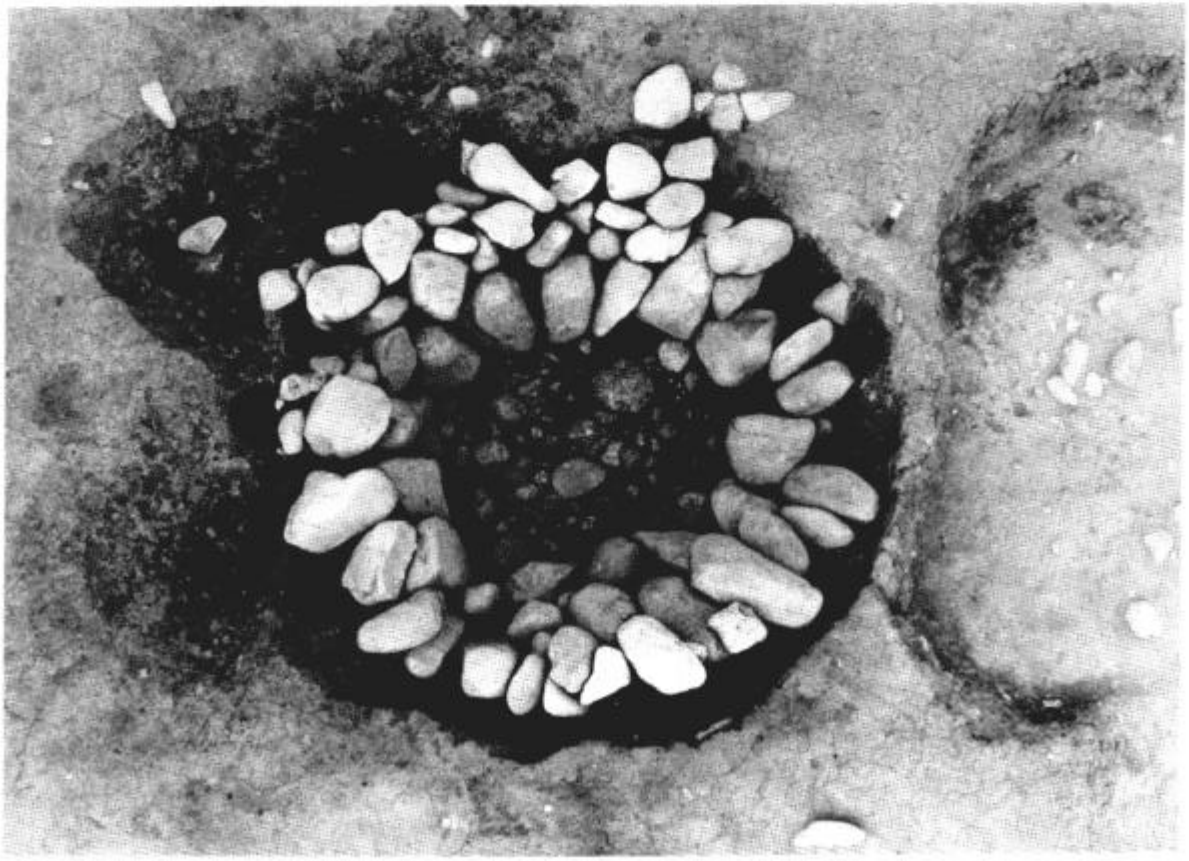




図版22　上　ＳＫ227・228・229・230など（西▶）
下左　ＳＫ147長方形竪穴状遺構（西▶）
下右　ＳＫ208(西▶)



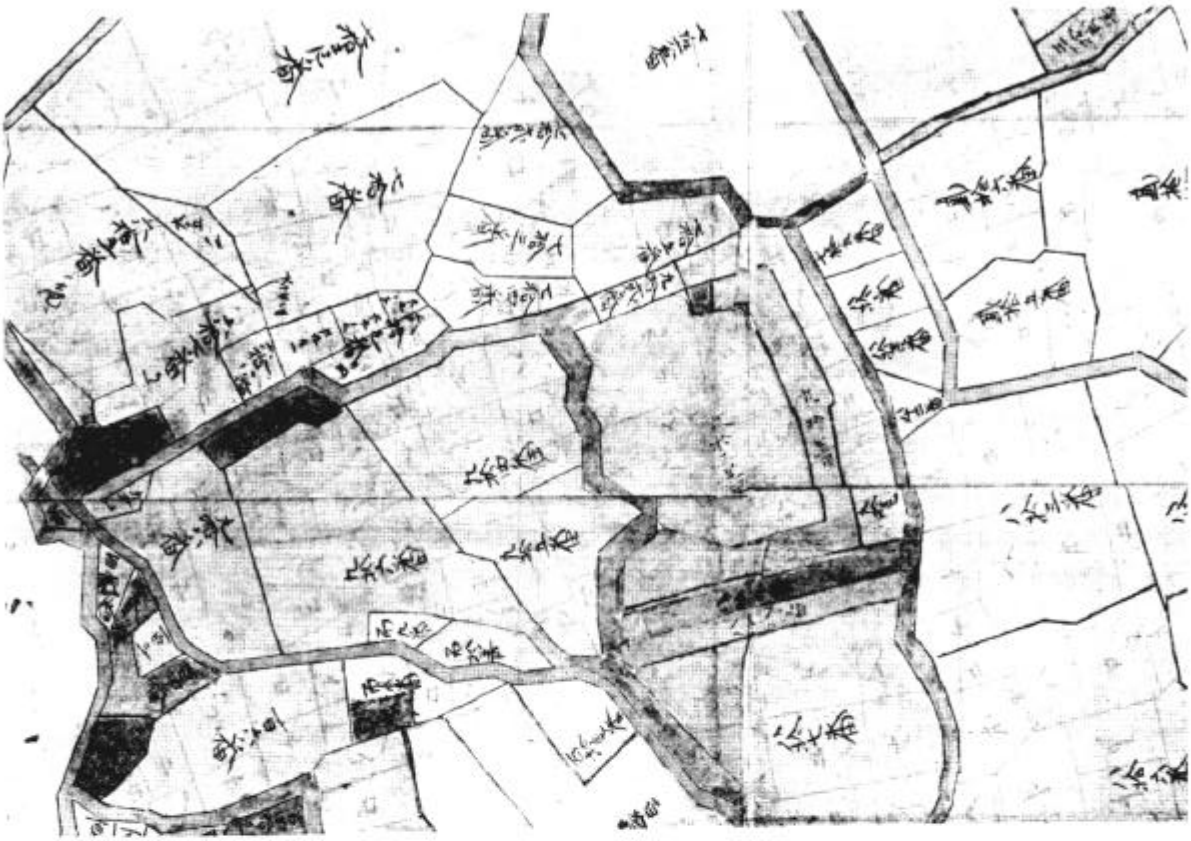
図版23　上　ＳＫ09土壙（北▶）
　　下　ＳＸ03･06集石遺構（東▶）



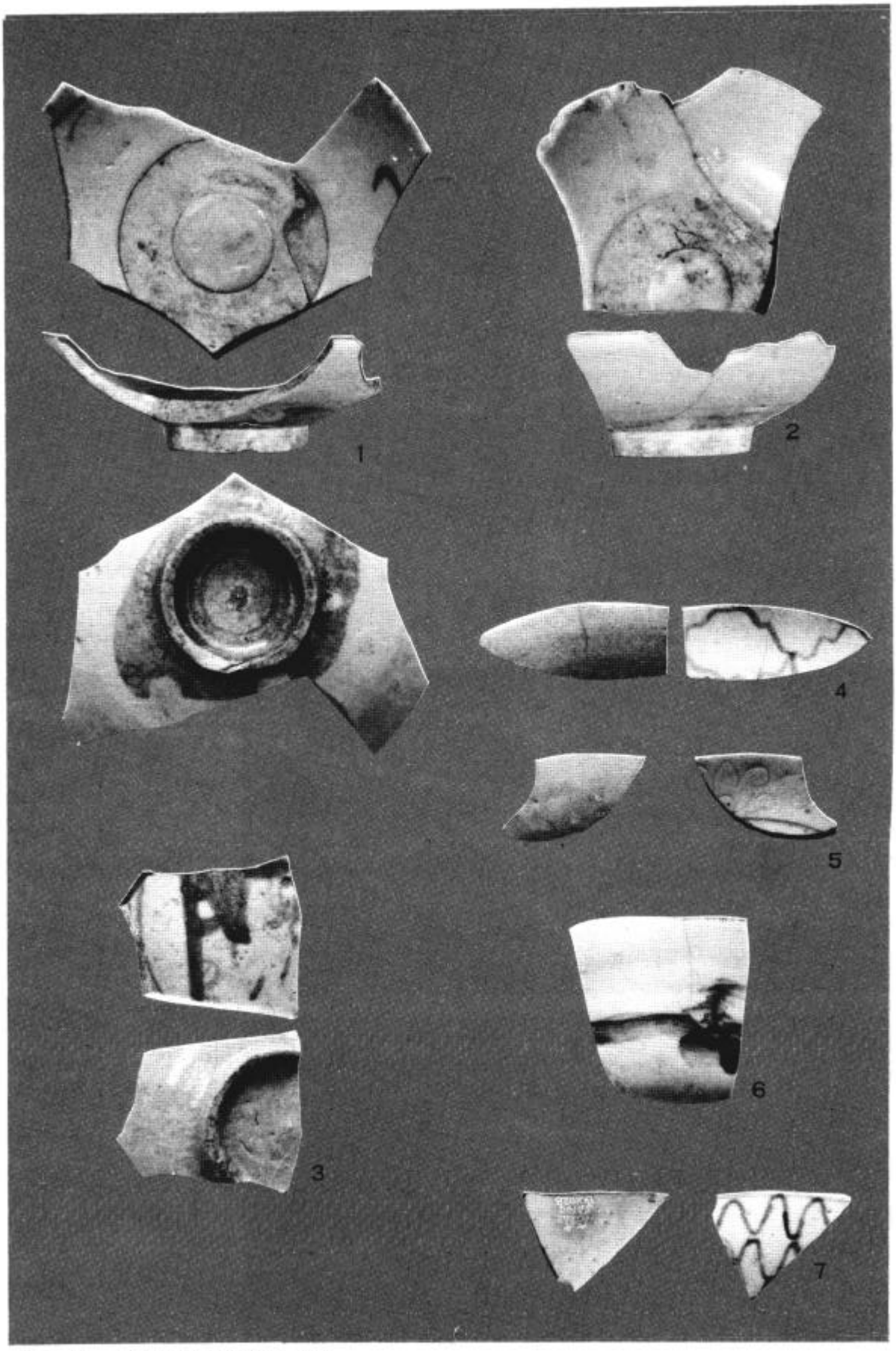
図版24　上　ＳＸ03集石遺構（西▶）
　　下　同上　　（西▶）

図版25　上　ＳＸ03西面
中　ＳＸ03北面
下　ＳＸ03東面

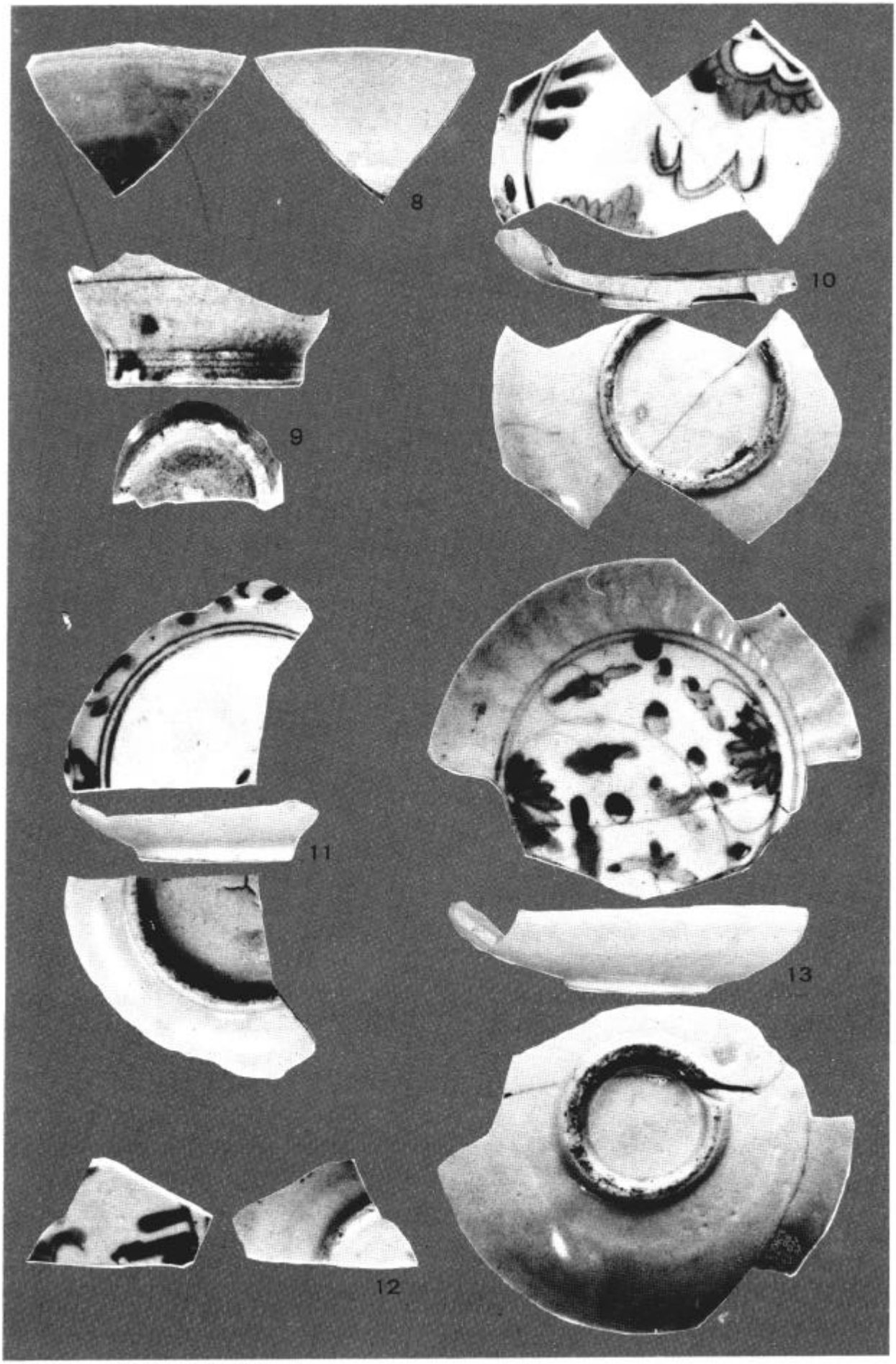
図版26　上　ＳＸ06集石遺構（西▶）
　　下　ＳＸ13集石遺構（西▶）



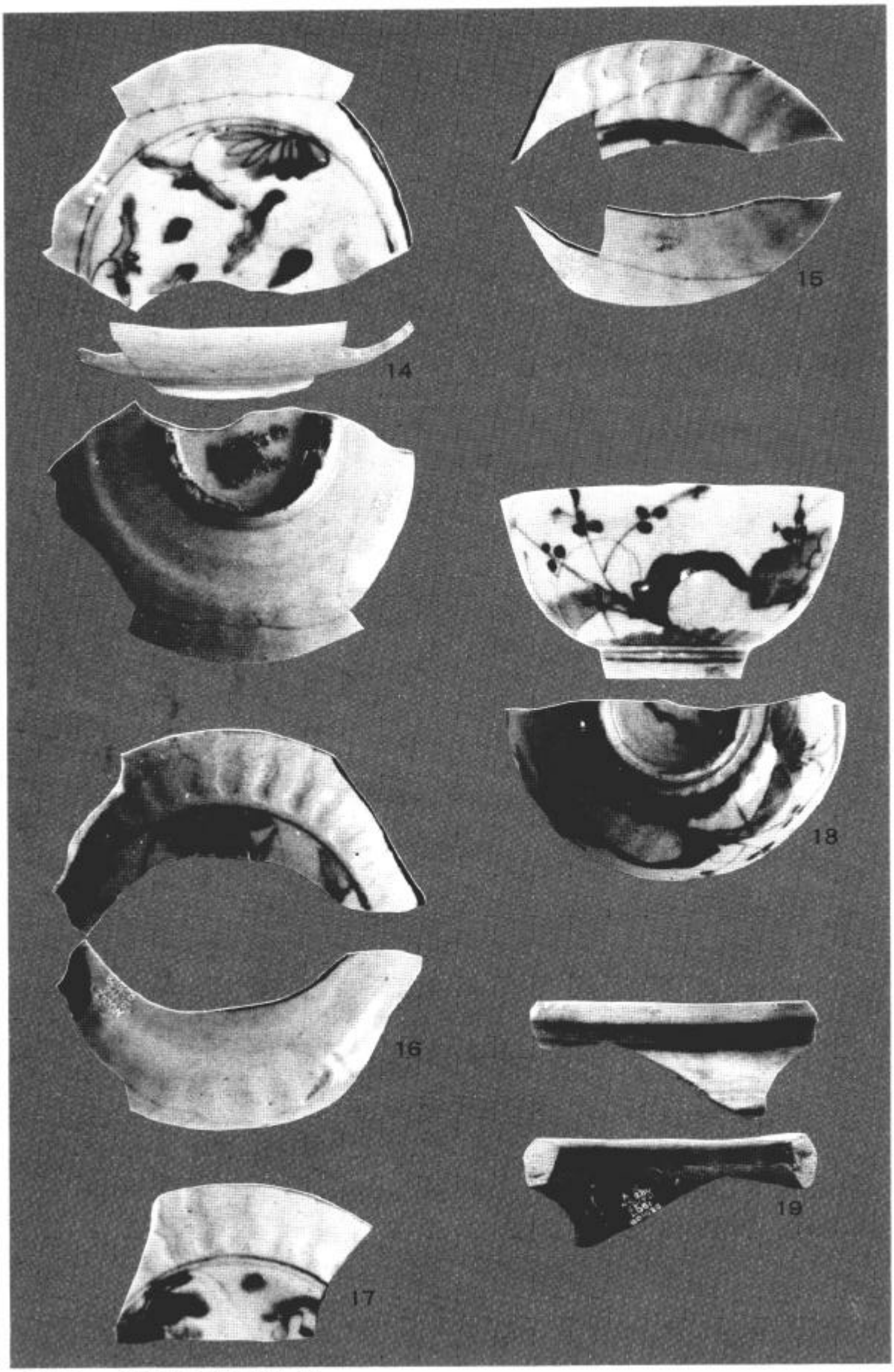
図版27　上　明治初期の地籍図（上が北）
中　遺物出土状況
下　同上



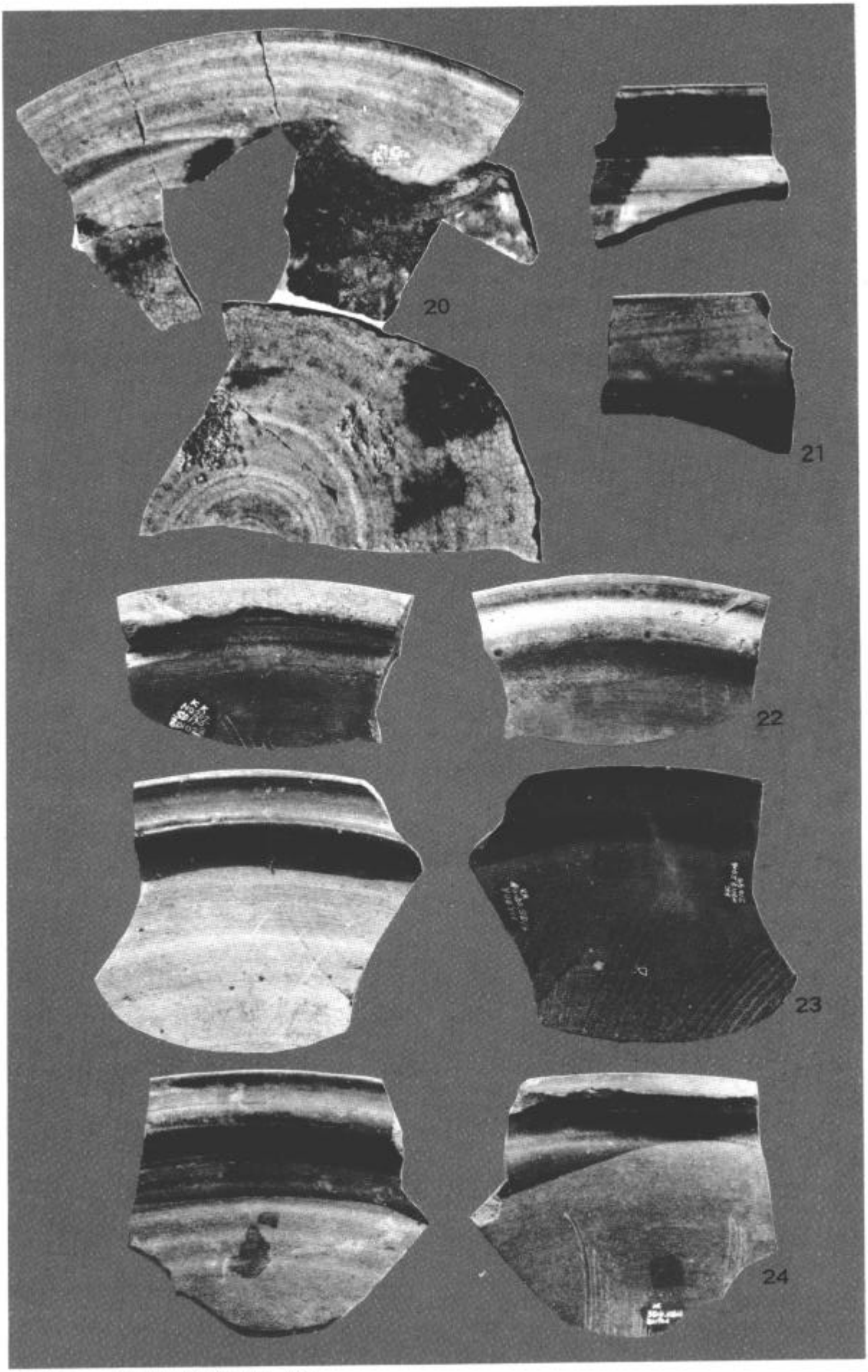
図版28　遺構内出土陶磁器 (1)



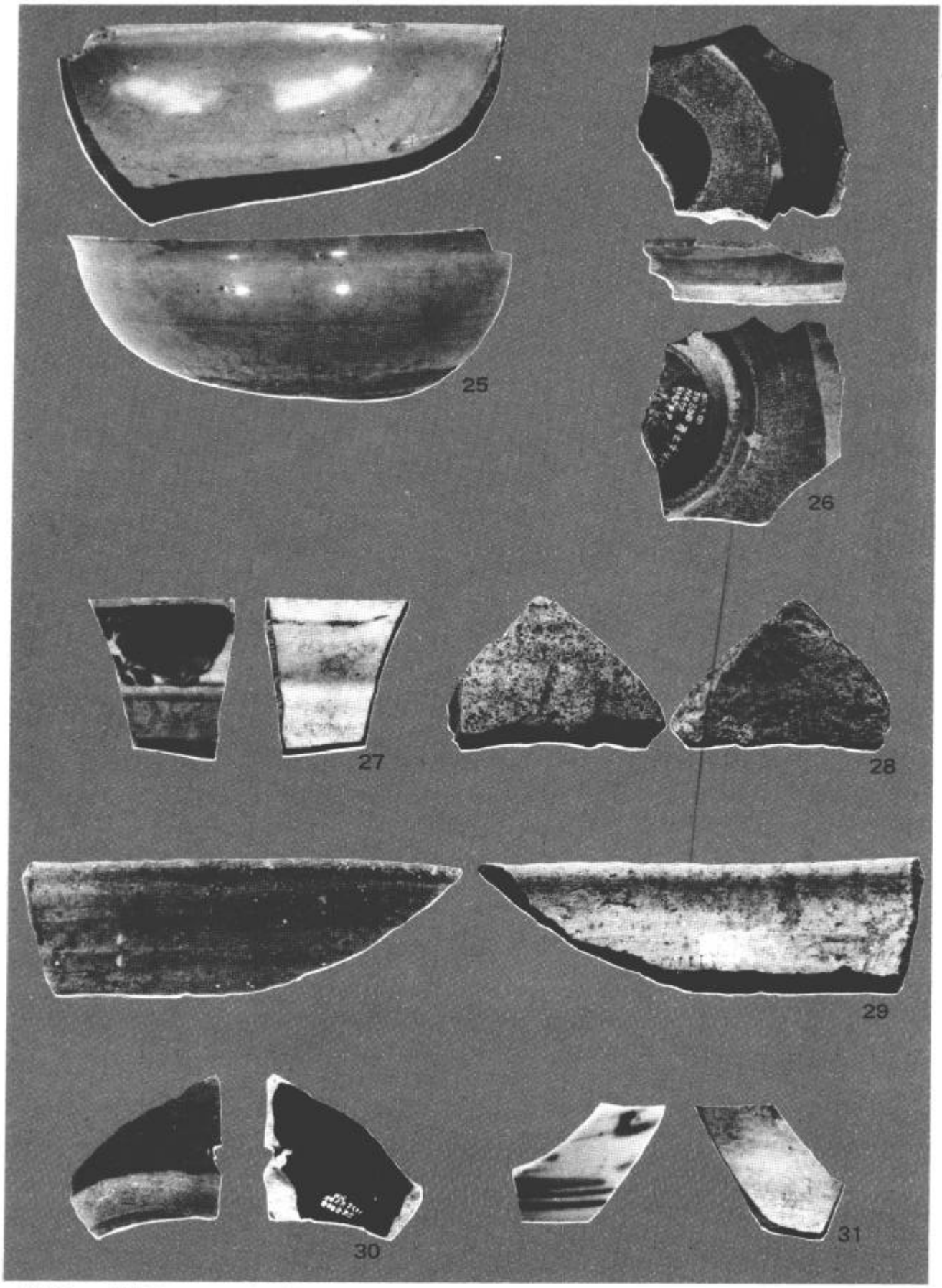
図版29　遺構内出土陶磁器　(2)



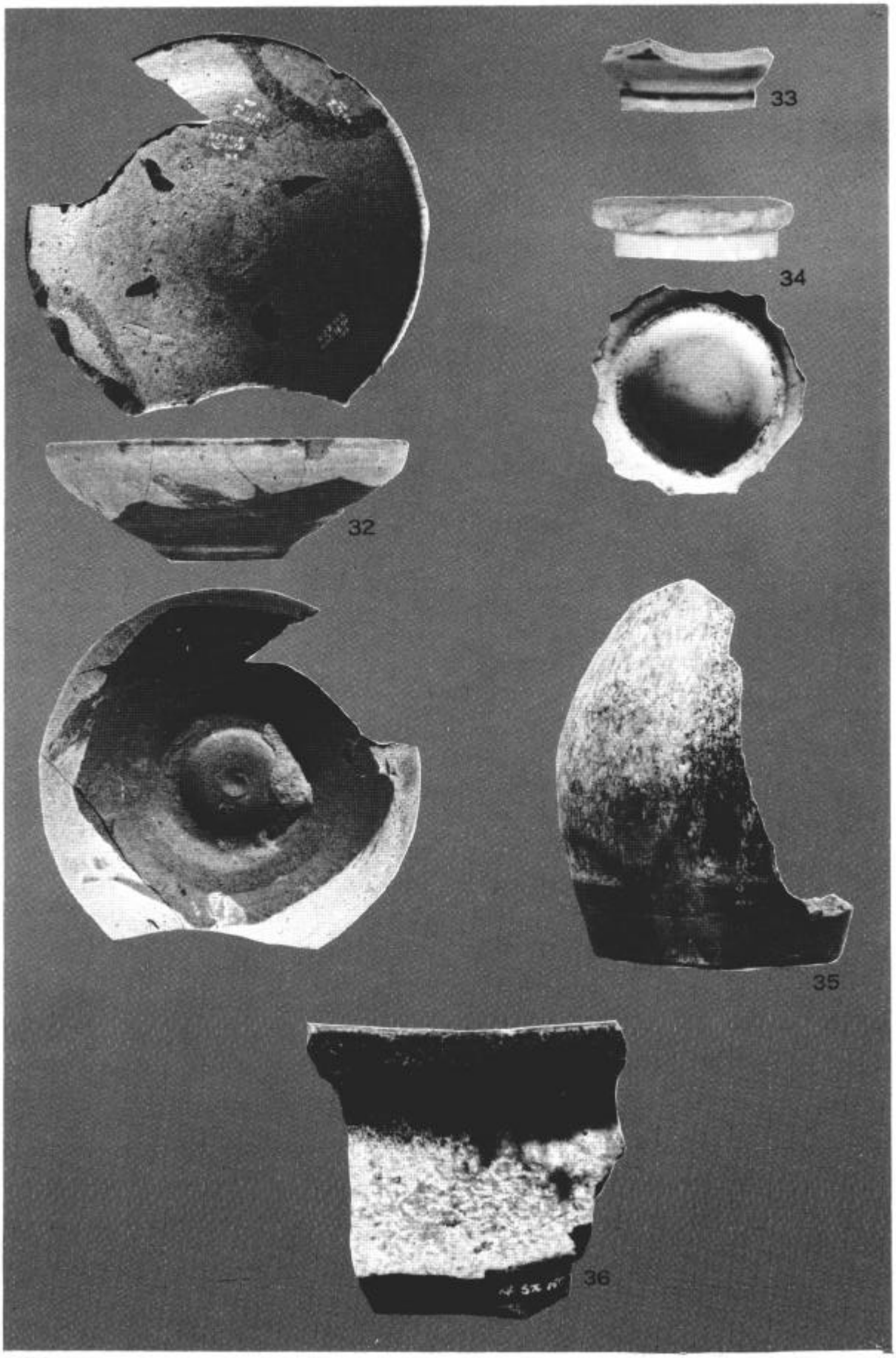
図版30　遺構内出土陶磁器 (3)



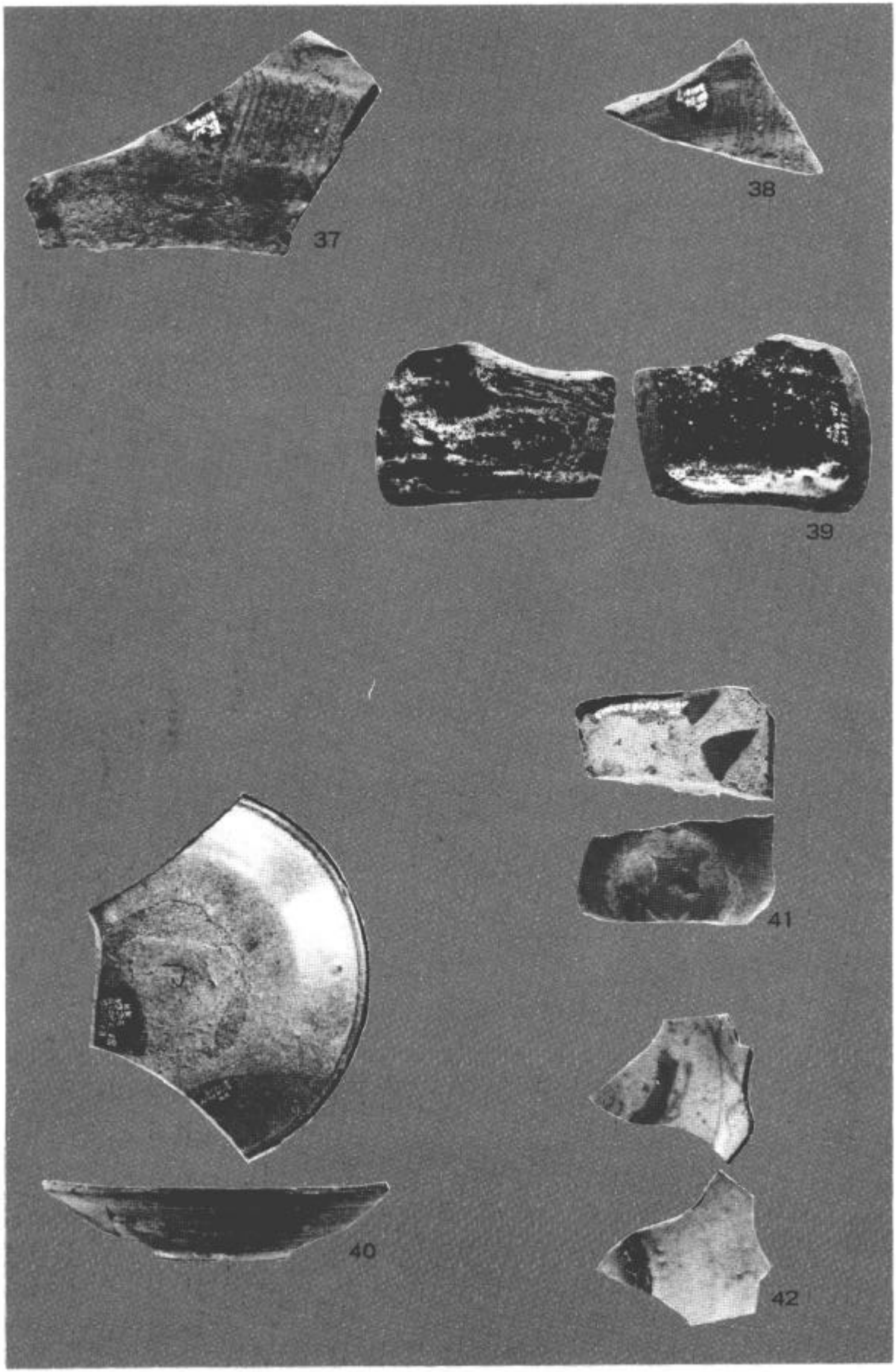
図版31　遺構内出土陶磁器 (4)



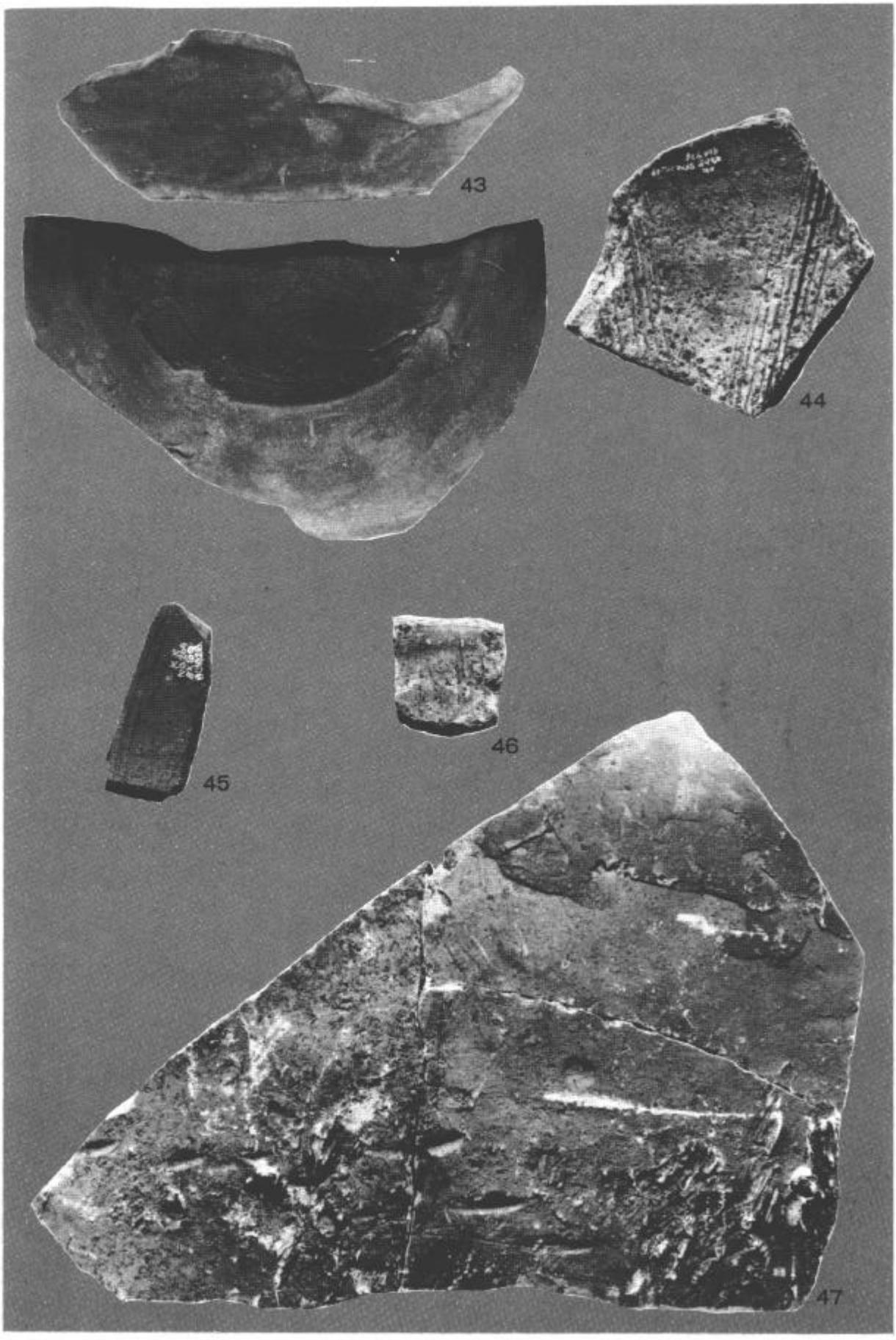
図版32　遺構内出土陶磁器　(5)



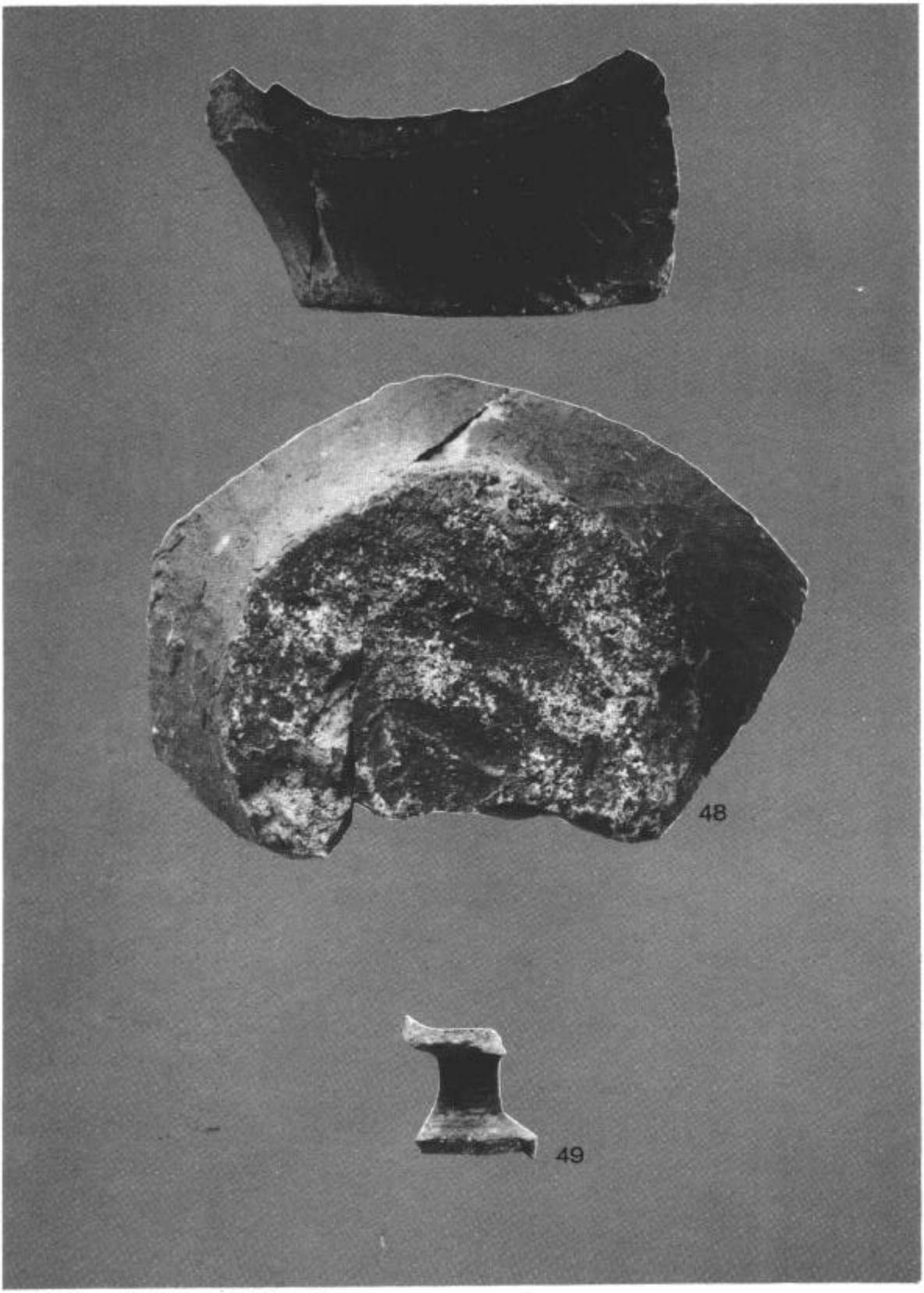
図版33　遺構内出土陶磁器　(6)



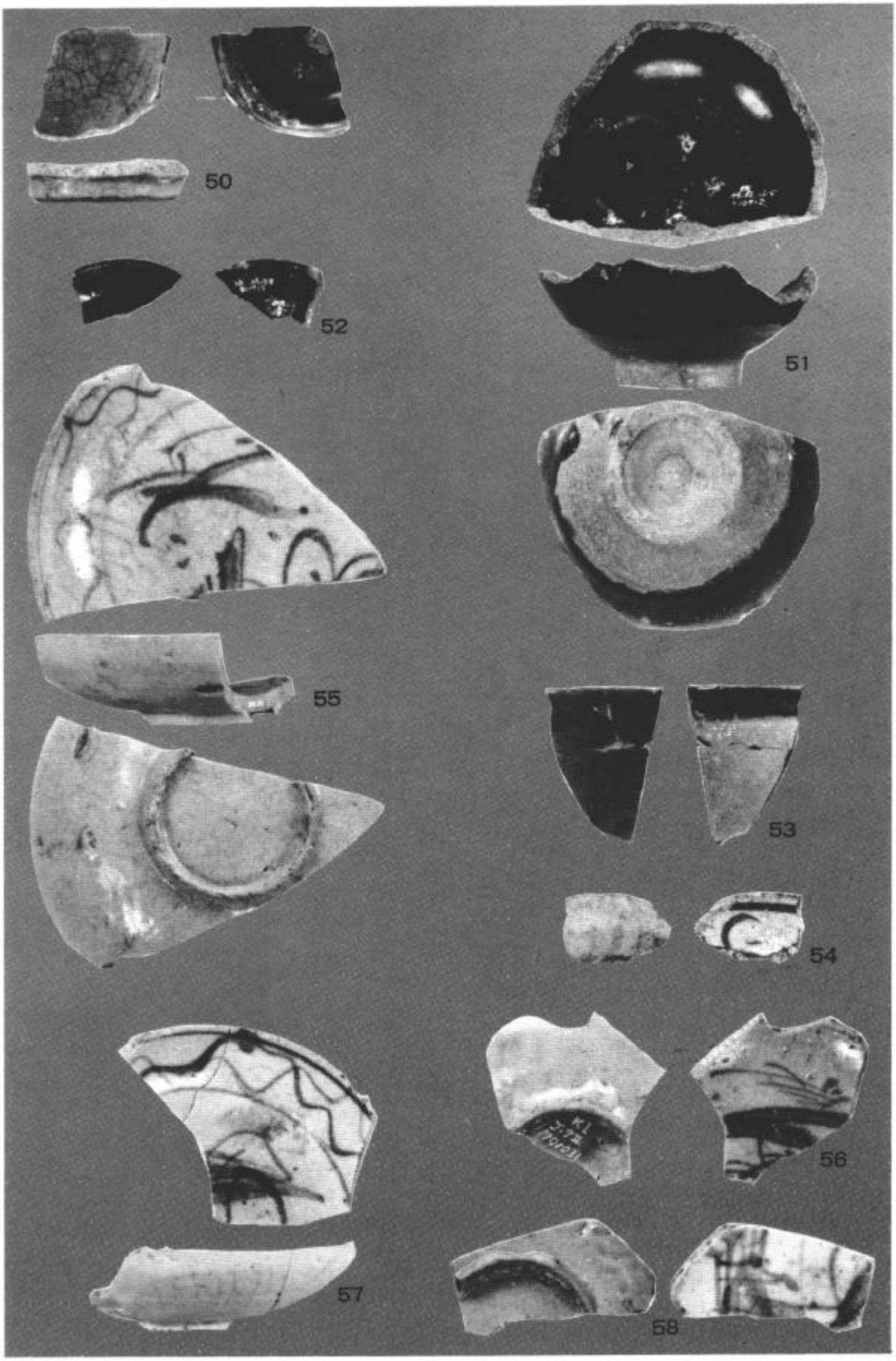
図版34　遺構内出土陶磁器 (7)



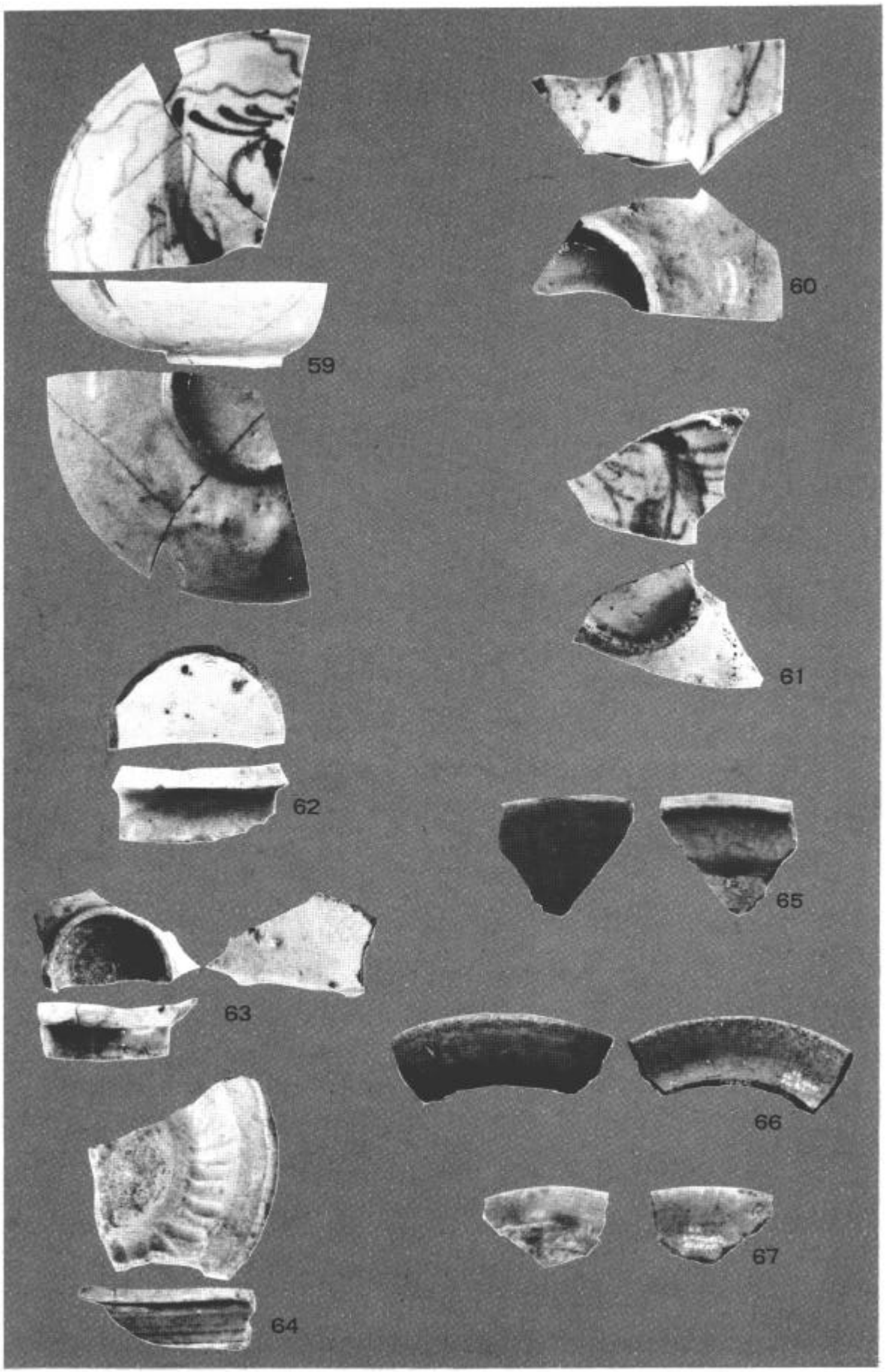
図版35　遺構内出土陶磁器 (8)



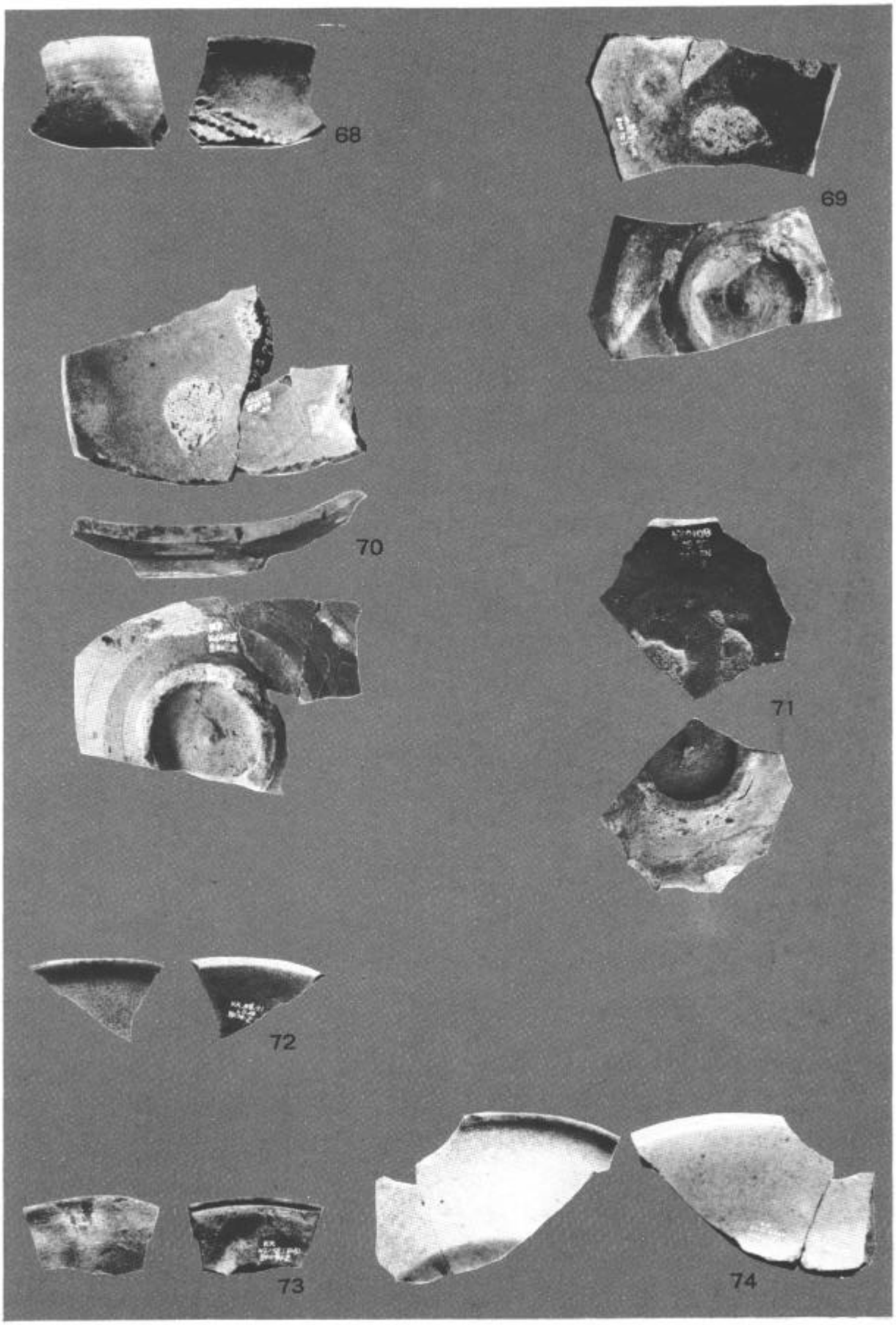
図版36　遺構内出土陶磁器 (9)



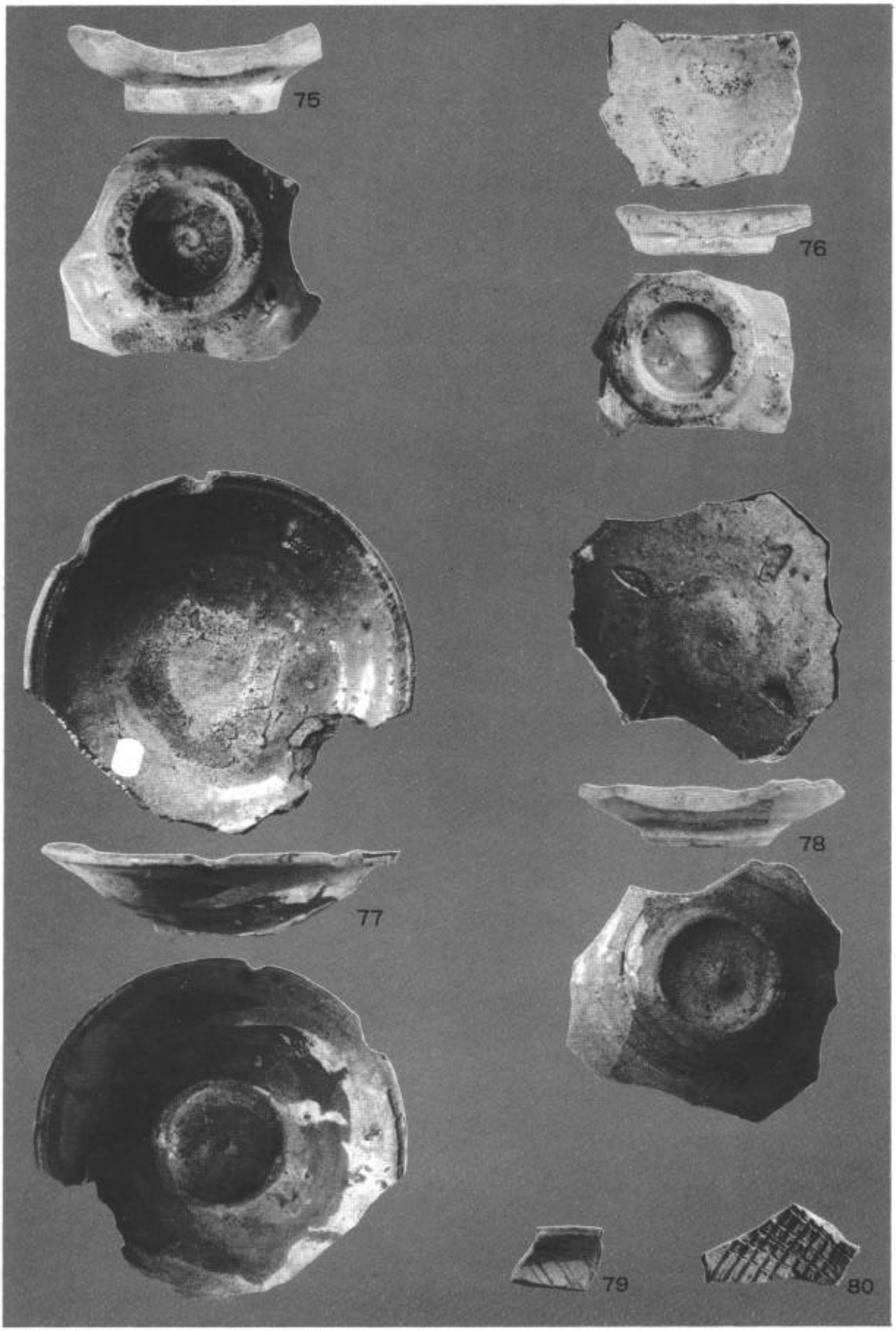
図版37　その他の出土陶磁器（1）



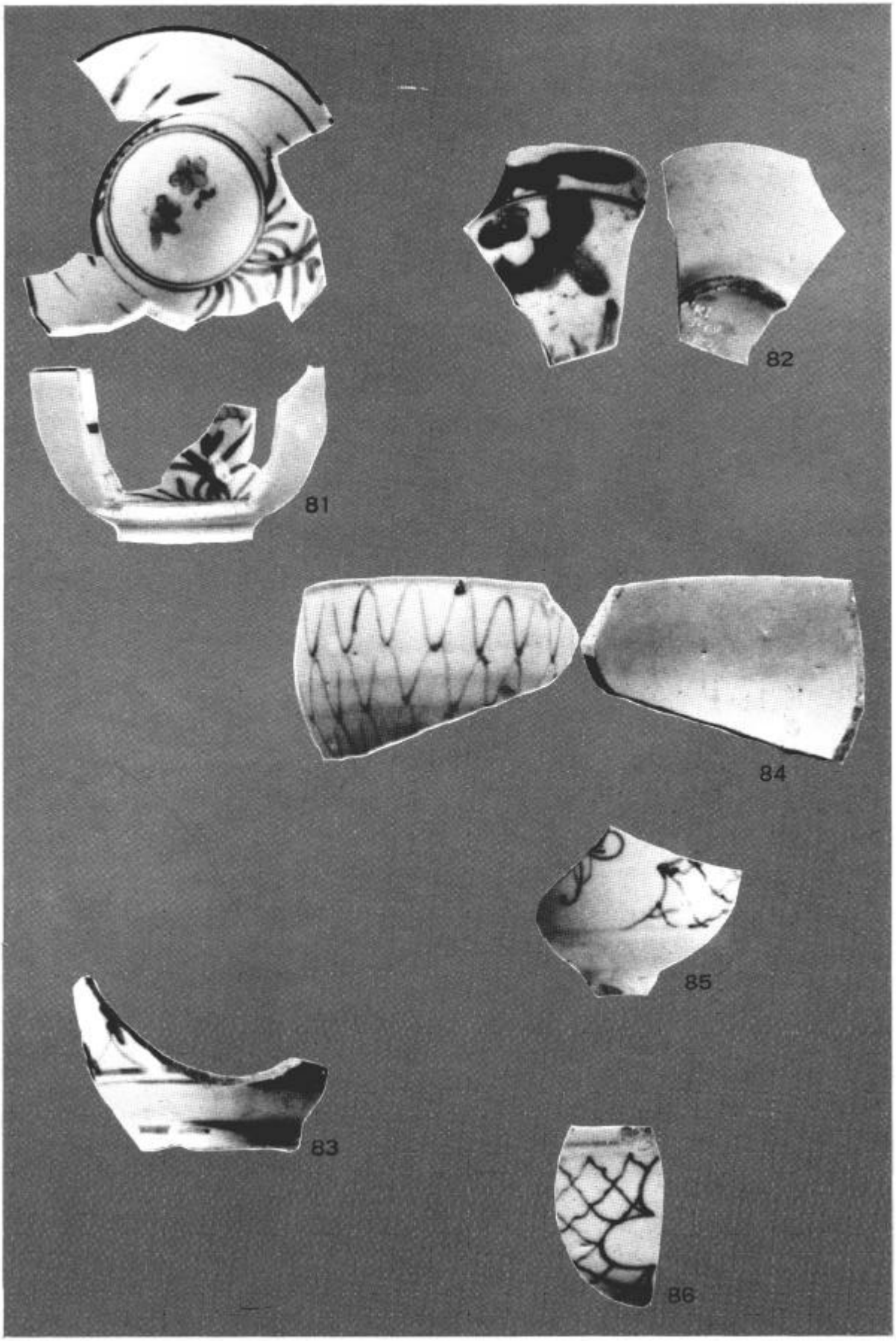
図版38　その他の出土陶磁器 (2)



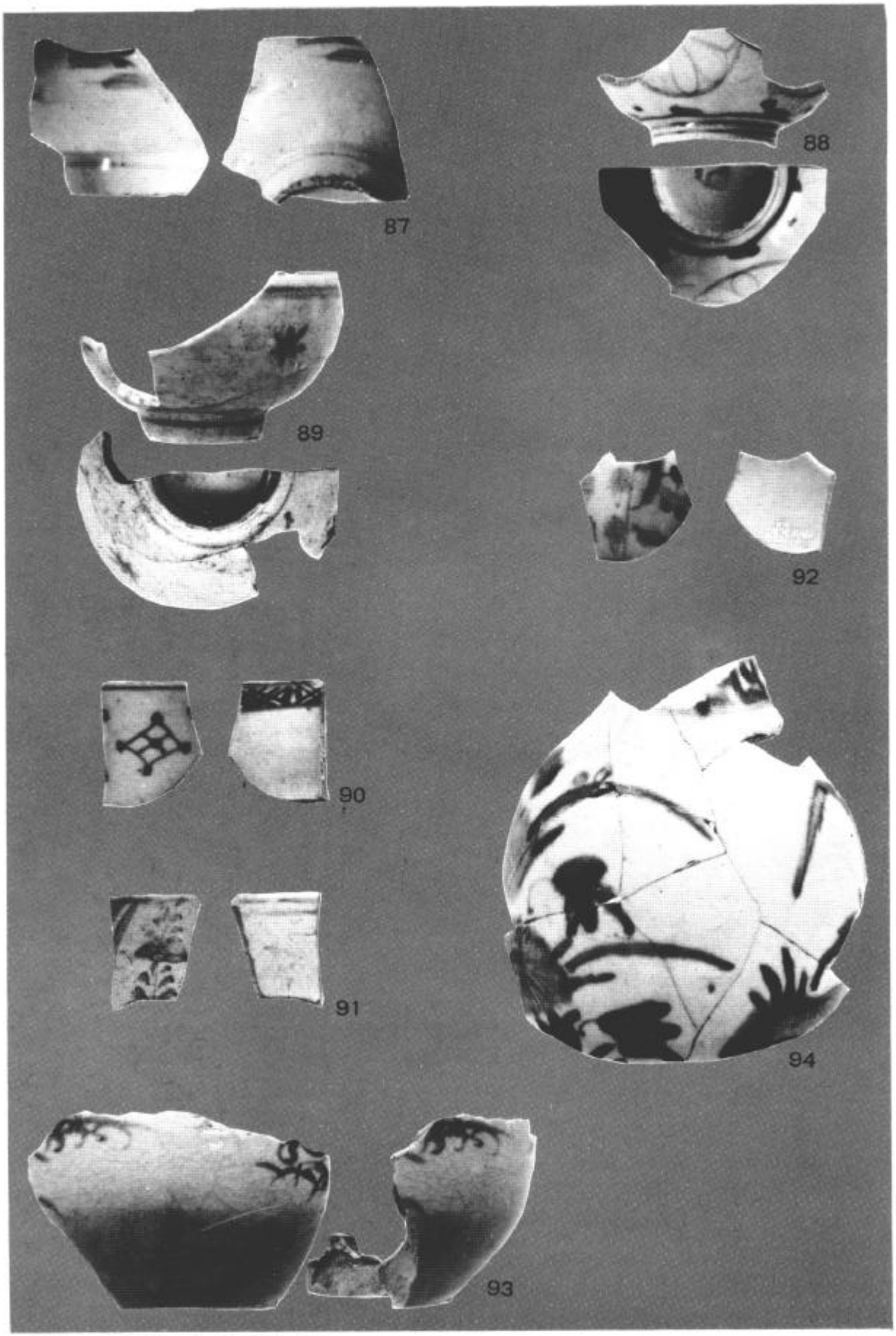
図版39　その他の出土陶磁器 (3)



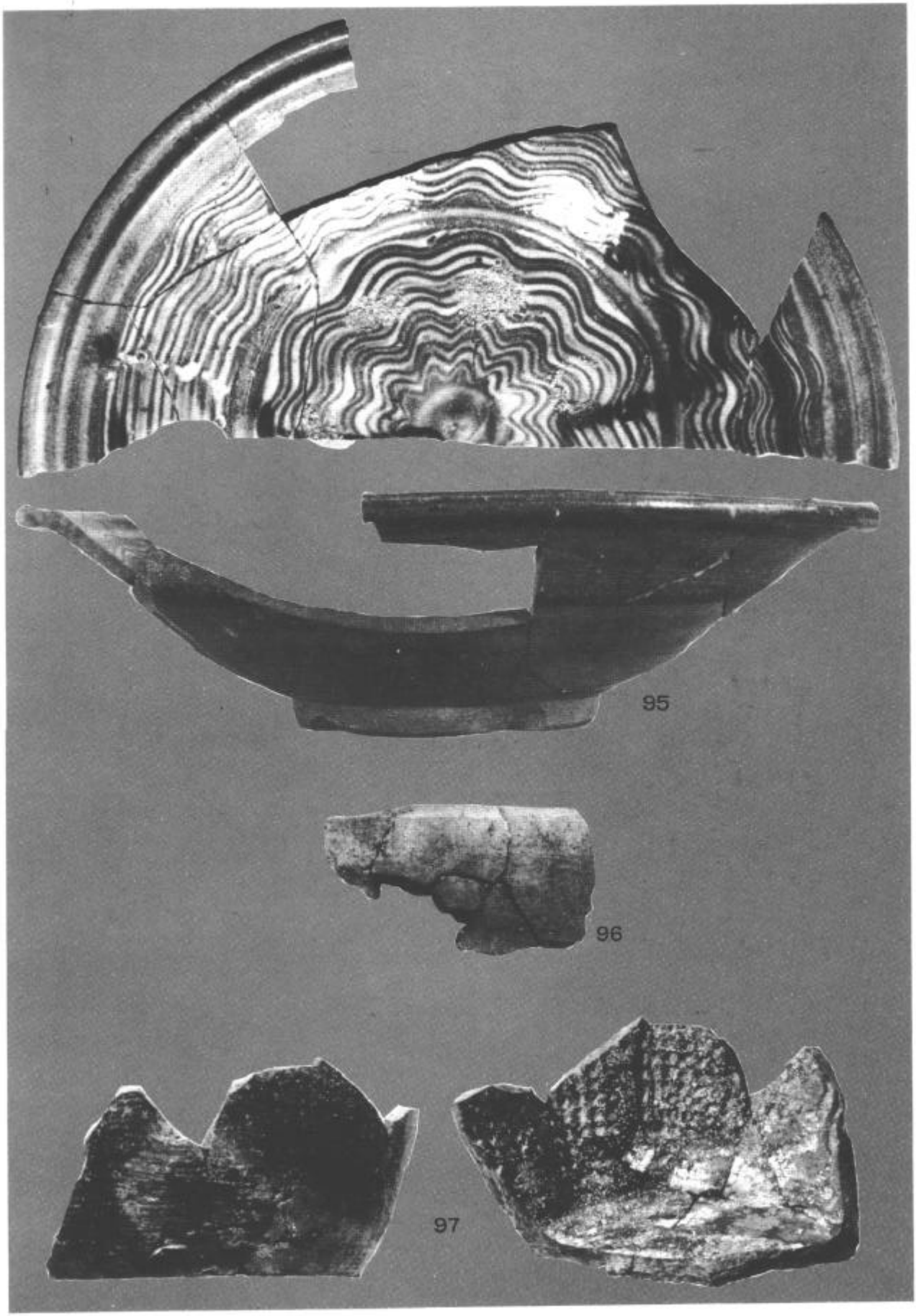
図版40　その他の出土陶磁器（4）



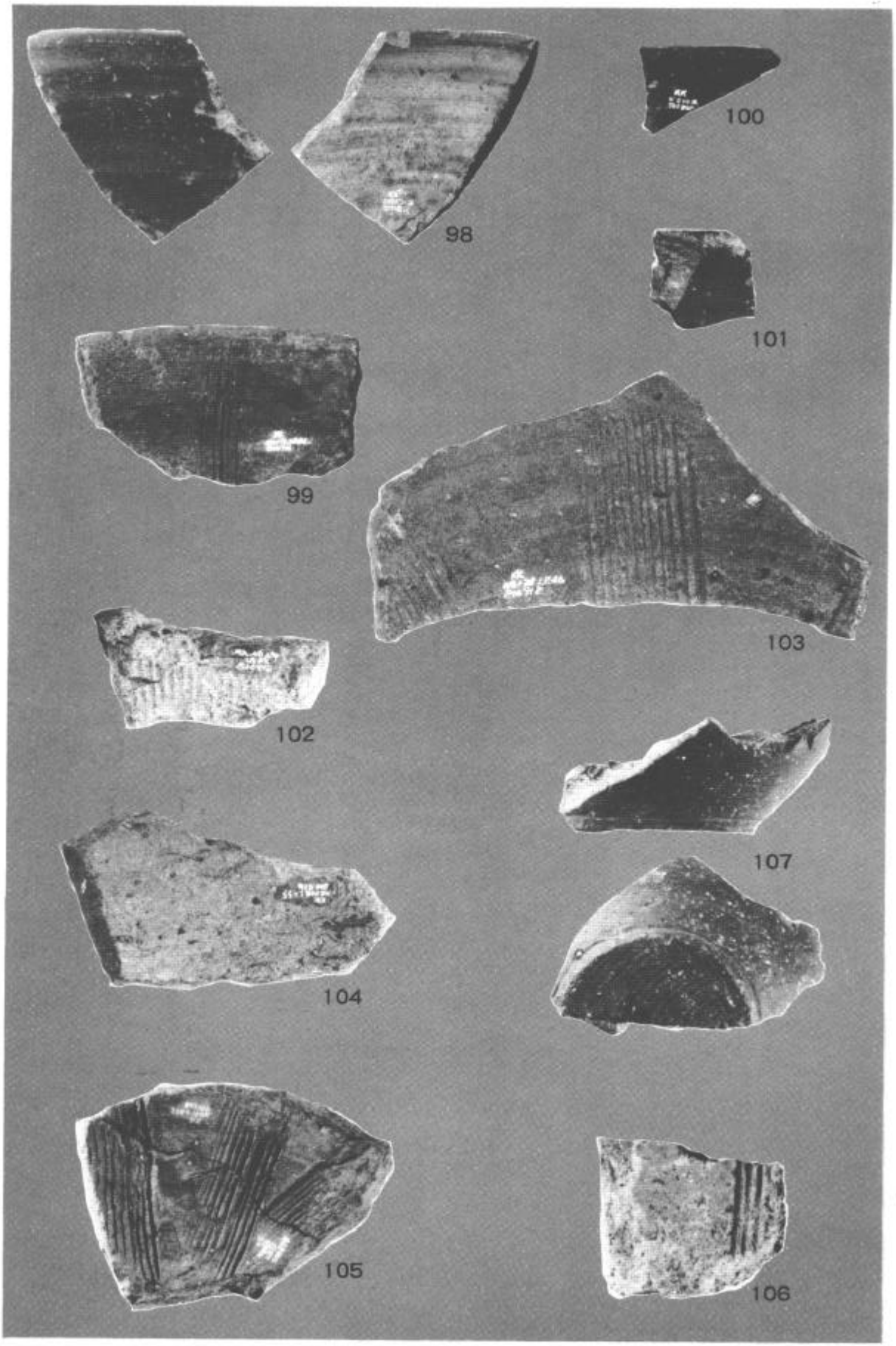
図版41　その他の出土陶磁器 (5)



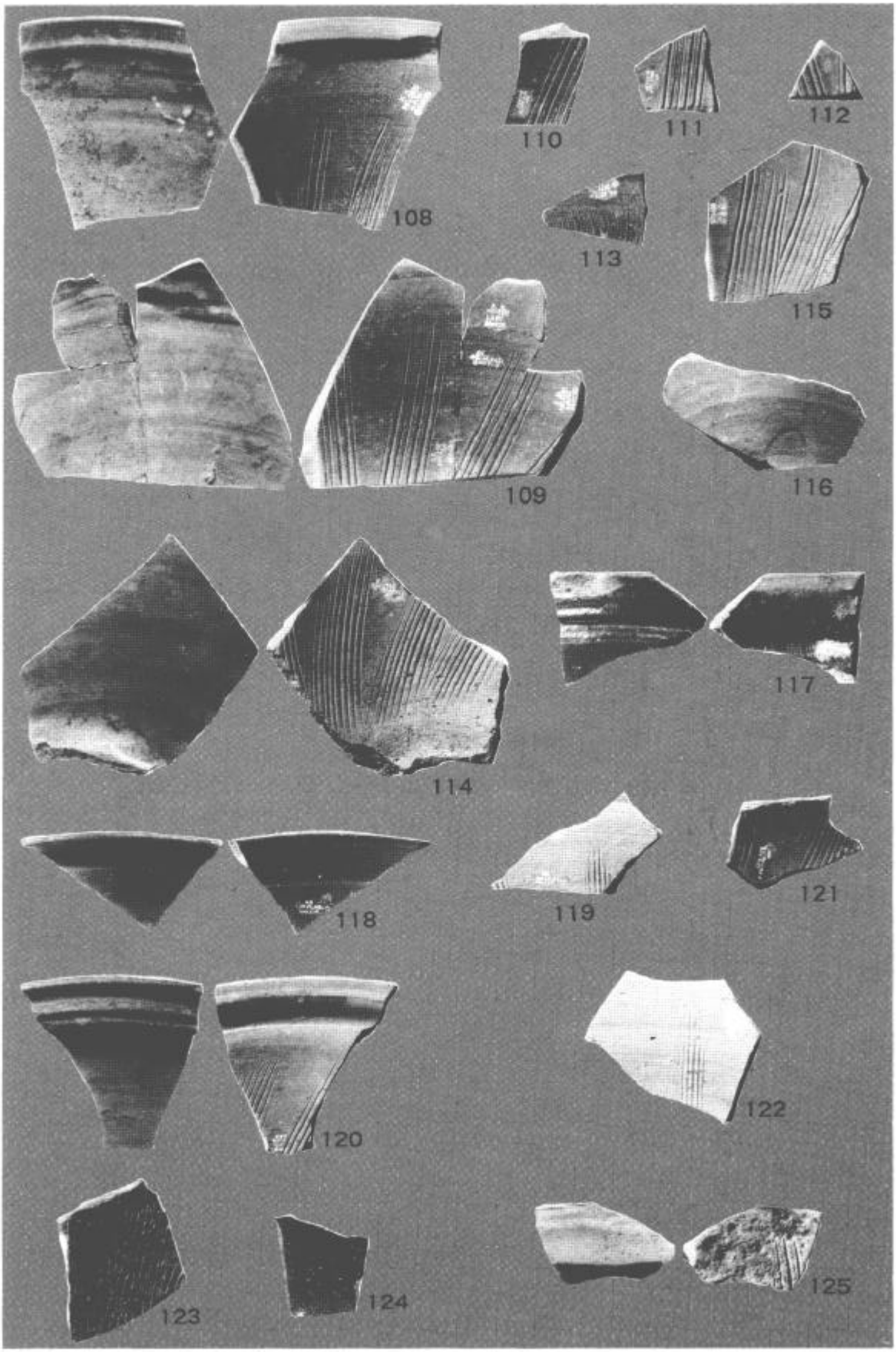
図版42　その他の出土陶磁器（6）



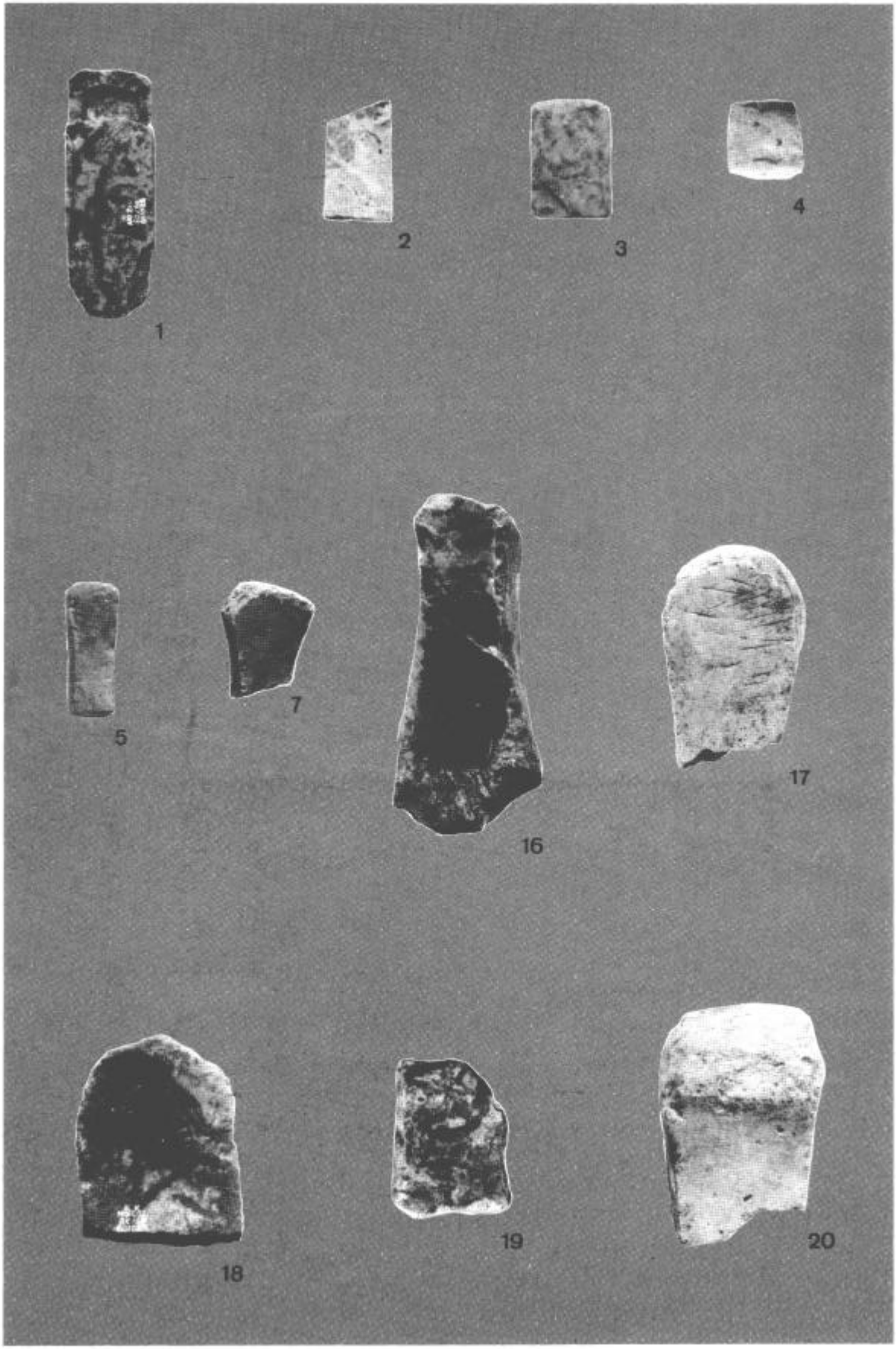
図版43　その他の出土陶磁器（7）



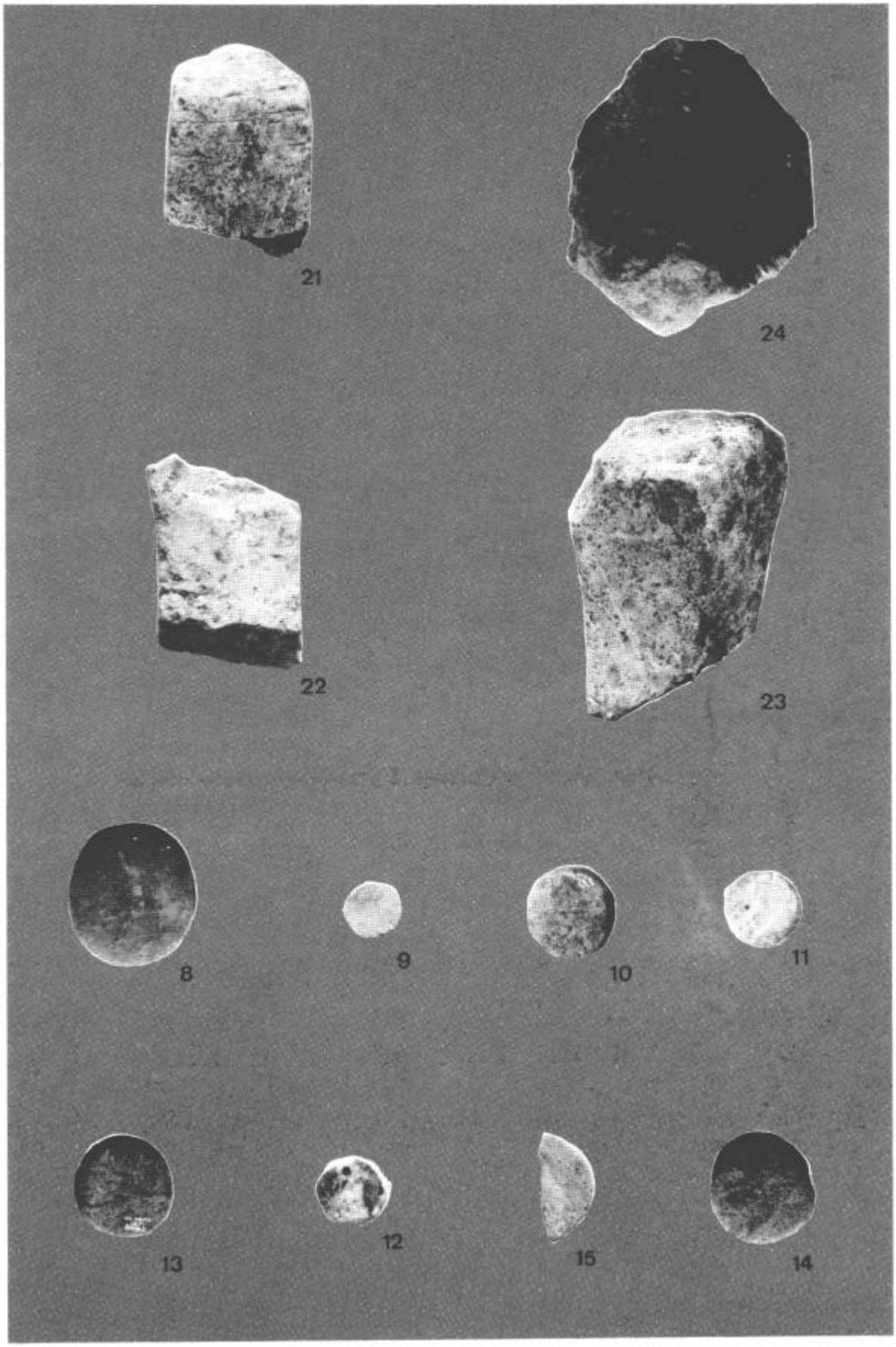
図版44　その他の出土陶磁器 (8)



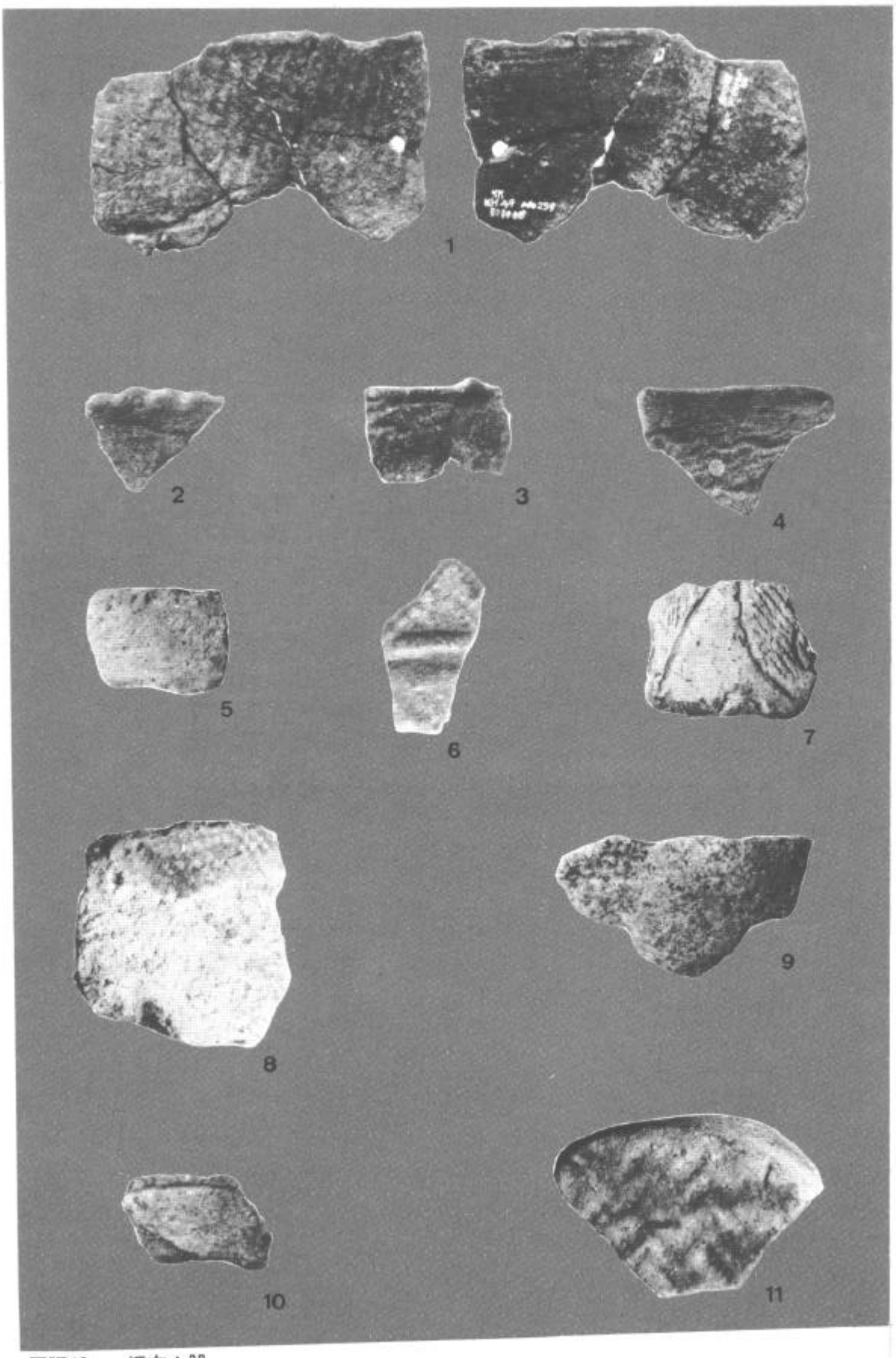
図版45　その他の出土陶磁器 (9)



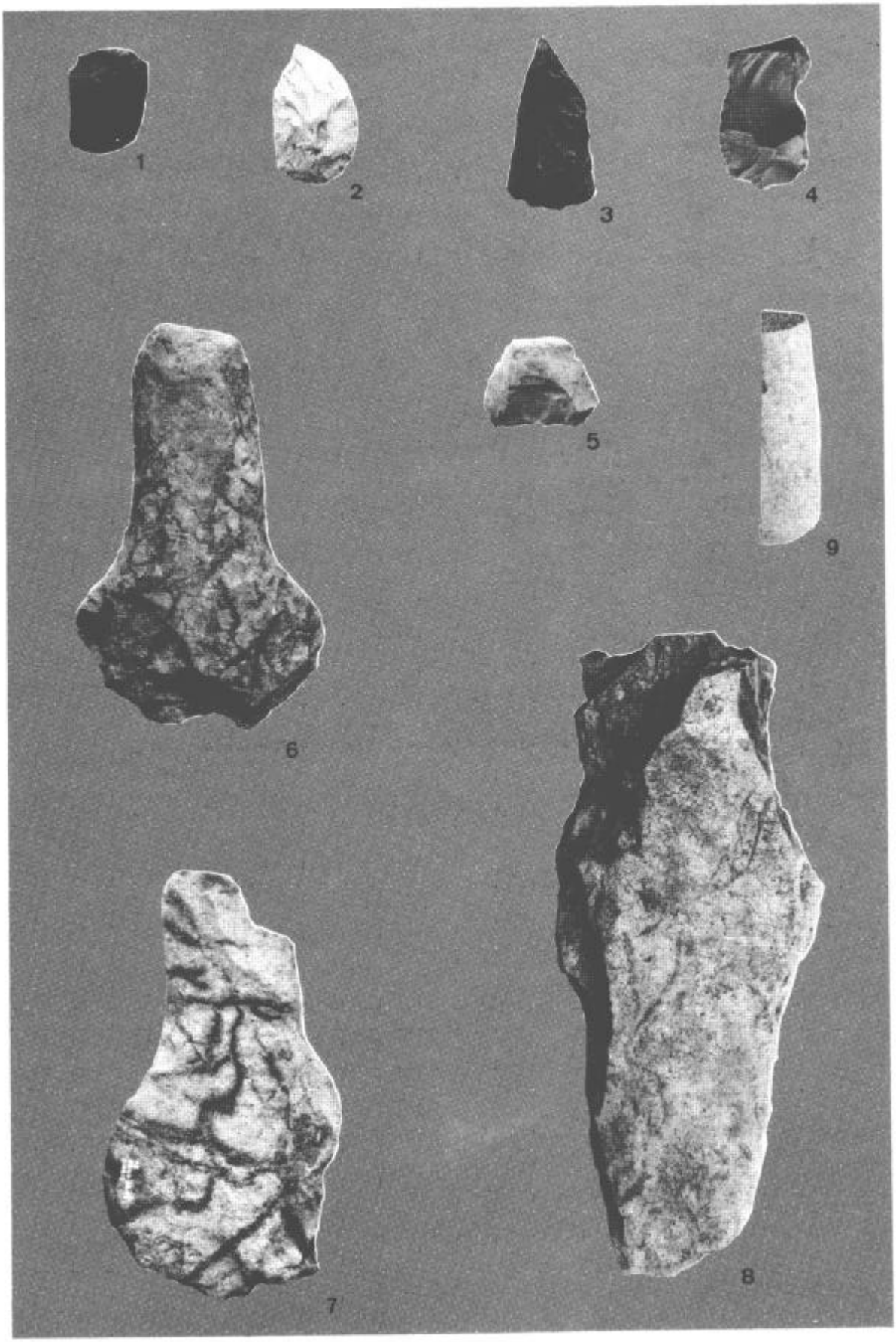
図版46　石製品（硯・砥石）



図版47　石製品（砥石・円盤状石製品）



図版48　縄文土器



図版49　縄文時代の石器